

Z32-B88

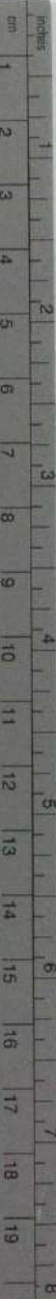
金の星

六月号



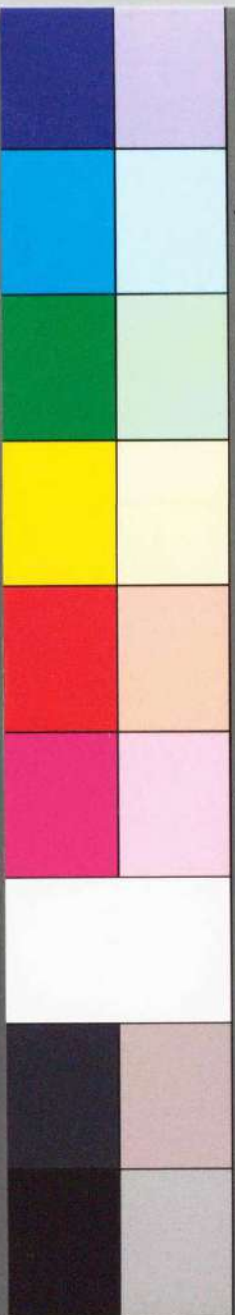
国立国会
8. 3. 26
図書館

第八卷 第六号



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

スピルカ 飲料 強 滋

(三……の枚七) 龜澤伯畫原伊 題巴在



りあに店薬・店品料食・店酒

オハナシ

巖谷小波関・鹿島鳴秋著
橋本邦助・太田三郎
細木原静枝・岡野榮
杉浦非水 画

童話も
童話も
昔のこと
今のこともある
面白くて
為めになる
オハナシ

四六倍割装全五冊
紙数各冊八十餘頁
定價各 壹 圓
送料各 八 錢

日本一の噺

巖谷小波著
岡野榮・小林健吉
杉浦非水 画

繪が一頁に
お噺が一頁
繪が踊れば
お噺も踊り出す
これこそ本統の
日本一の噺

袖巻装全三十五冊
紙数各冊三十餘頁
定價各 貳拾五圓
送料各 金 四 錢

オトギタビ

巖谷小波著
太田三郎・岡野榮
細木原静枝 画

歌と繪と
次々に續いてゆく
印象の濃い本
牛若丸は？
舌切雀は？
運動會の賞品は！

四六倍割装全三冊
紙数各冊三十餘頁
定價各 八 錢
送料各 六 錢

通 橋 本 日 京 東
社 會 式 株 善 丸

ルビ丸・田三・田勝一京東

札 仙 福 横
幌 登 岡 濱

名 京 神 大
古 屋 部 戸 阪

沖野岩三郎先生著（最新刊）

裝幀 鈴木保徳畫伯
挿畫 田中行一畫伯

勞働の少年

鐵山に勞働者となつて働く二人の少年の物語りです。兄の春吉は常に靜かなる野を慕ふ詩人の如き心を持ち、弟の岩吉は常に英雄を夢見て争闘を好む熱烈な少年です。二人は地下何百尺の鑛穴に入つて、生きるが爲めに鑛夫等と共に暮します。

この間に如何なる事件が勃發したでせうか。全山を震撼させる恐怖すべき血腥い事件は頻頻として起り、絶えず二少年の魂を脅します。しかし、二人は、父が鑛夫等の爲めに殺され孤兒とはなりましたが、父が最期に残した教訓を胸に抱いて、兄の春吉は遂に農夫となつて靜かなる一生を送り、弟の岩吉は最後まで鐵山に踏み止つて地下の大湖水を發見して人々を救済するといふ、沖野先生作の長篇一大傑作です。讀まねば不幸といふ程の名作です。

町 坂 動 郷 本 京 東
社 星 の 金
番 六 九 五 九 五 京 東 替 振

四六判箱入美本
内容二六〇頁
挿畫三色版外澤山
定價金壹圓貳拾錢
送料 六 錢

世界少年少女名著大系 (22) 大戸喜一郎先生著・裝幀 寺内萬治郎畫伯

不思議國めぐり

「不思議國めぐり」は、英國の少年少女が、パイプルの次には必ず讀むといふ程、有名な又奇抜なお話であります。原書は、「不思議國のアリス」と云ふ名で發行されて居ります。

或る所に、アリスと云ふおてんば少女がありました。夏の日の事、お姉さんと一緒に草原へ行つて草をつんでゐるうちに、つひつと〜と眠つてしまひました。その間にアリスは、一つの夢を見ましたがそれが、實に何んとも云へない、不思議な夢でありました。それを書き綴つたものが、この「不思議國めぐり」なのです。

この本を一度お讀みになつた方は、イギリスの少年少女たちと同じように、この本が大好きになつて、くりかへし〜お讀みになる事と思ひます。挿畫は特に、原書の美しい畫を澤山に取り入れました。

金の星社自慢の本の一つとして、是非皆さんに讀んで戴きたいと思ひます。

町 坂 動 郷 本 京 東
社 星 の 金
番 六 九 五 九 五 京 東 替 振

四六判箱入美本
内容二〇〇頁
挿畫三十枚
定價九拾錢
送料 六 錢

全國小學兒童代表綴方集

むつかしい綴方が誰にもたやすく出来るやうになる本である。
この本は尋常四年生から高等二年生までの全國の小學生の作つたものゝ中から最も優れた文章を選んで編纂された書で作文の時のよい參考書となるし課外讀物としても有益である。

波野薫先生編
四六版の美しい表紙の本
定價 五十錢
送料 四錢

最も安い雑誌

月刊 小學文藝

毎月定價 送料共 十五錢
半年分 割引八 十錢
一年分 割引一圓五十錢

小學兒童の心に美しい文藝趣味を育て、行く面白い本

懸賞募集

綴方短歌 一首以内

俳句 五句以内

童謡 二編以内

◆綴方は二十字結十行の用紙他はハガキのこと。
◆原稿は日本橋區橋本町九小學文藝社宛のこと。
◆近所の本屋に無い時は振替が切手か爲替で直接郵送下さい。

發行所 東京市本區橋本町九番 紅玉堂書店

永橋卓介編

高坂元三裝幀

世界童話叢書第七編

イタリー童話集

四六判箱入美本
本文三〇四頁
原色版四枚
凸版刷挿畫廿二枚
定價金一圓五十錢
送料十二錢

行發々愈

目次
リオンブルウノ赤白黒煙
馬鹿で仕合せ 魔法使と
靴屋の出世 七人兄弟
賢い少女 チョリチ
小鳥 仙人 華になる泉
風琴物語 お城の入替へ
もの言ふ本屋 占ひ

美しい自然の國であり詩の國であるイタリーに童話や傳説の豊富な事は怪しむに足りません。之に加ふるに強大なるローマ帝國を建て、ヨーロッパ文明の中心を形造つた幾千年に亘る光輝ある歴史と、いたる所に葡萄、無花果、レモン、オリブの花咲き實を結ぶ樂園の如き情趣に富む南國の童話は陰鬱な暗影にとざされてゐる北歐諸國のそれとは全くその趣を異にしてゐます。
支那、印度、ろしあを始めとして大陸諸國の童話に親しんだ讀者には、春の花園のやうに麗しい南歐の童話は必ずや新しき歡激を與へずにはおかないでせう。是非御高讀を願ひます。

東京市外區上野二丁目八番

金蘭社

東京市外區上野二丁目八番



川紅い汗青い汗	(幼年時)	編輯部選
ピストルミステツキ	(森)	古宇田敏太郎
三日月さん	(金)	北川清
ピツクリ兵助	(金)	小林きよ
へいぼう太郎	(金)	織田小星
熊坂長範の最期	(金)	西川喜平
お山のからす(子供篇)	(金)	野口雨情選
ある驛長の話	(金)	青柳和夫
要さん辨さん上京の巻	(10)	沖野岩三郎
五月の唄	(三)	達崎龍
五百七號室	(三)	三井信衛
話(童話)	(三)	齋藤佐次郎選
日(童話)	(三)	山本鼎選
通	(三)	山本鼎選



目次	
牧場の歸り	(表紙・石版)
朝露	(口絵・三色版)
へいぼう太郎	(口絵・一色版)
燕のお客さん	(四)
同作	(二)
愛犬物語	(六)
信夫の孝行	(四)
漫畫芝居コドモ座	(三)
鰐魚の船	(五)
義齋大明神	(五)
雀のお宿(大人篇)	(四)
勇敢な少年樂手	(四)
蛙ものがたり	(五)
寺内萬治郎	寺内萬治郎
岡本歸一	岡本歸一
寺内萬治郎	寺内萬治郎
野口雨情	野口雨情
藤井清水	藤井清水
小島政二郎	小島政二郎
西尾千賀子	西尾千賀子
河盛久夫	河盛久夫
三島霜川	三島霜川
鈴木氏亨	鈴木氏亨
野口雨情選	野口雨情選
大戸喜一郎	大戸喜一郎
花村浩六	花村浩六





朝

霞

(金の星雲)

岡本歸一畫



へいぼう太一郎



(九〇頁をくらん下さい)

寺内萬治郎畫

定價一圓八十錢
送料(書留)十二錢

日本の神話

尋四五六高學年
程度の讀物

最新刊

新日本の子供達に贈るために、著者は新たに此の好著を著された。武井武雄氏の装幀と共に新學年の子達へ最良の友として心よりおすゝめします。

弓
張
月

吉田助治編

定價
送料
一
三
三〇

西遊記

吉田助治編

定價
送料
三
四
三

ギリシヤの神話

中島孤島著

定價
二、五〇
二〇

ギリシヤ
傳説
イリアド

中島孤島著

エヂプトの神話

中島孤島著
(近刊)

六五六三込牛話電 院書アデイ 區込牛市京東 四一町伏山 兌發

漫画

信吉ノ成功

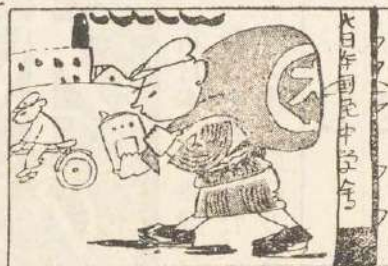
(一) 小学校ワッショウフシ、イ
クサンノコドモダハ、イ
ヨロノナカヘトビダシタ
オモツタホド、タノシクハ、ナ
カツタ。



小學校卒業後
行くことな事柄で上の學校へ
行くと、出来な子供は今の
中學校で勉強なさい。

(二) レンキチハ、ウチガゼンホ

ウナダメ、デツチニダサレタ
ガ、ヒトニマケナイキナ、ダ
イニホンコクミンチユウガク
クワイニフダワイシテ、コ
ーヤロクサベンキヨウシタ。



僅か一ケ年半で中
學卒業の學力と資
格が得られる。

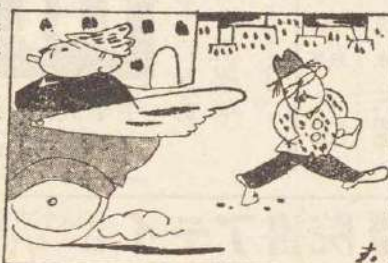
(三) ヨサダモ、ウチノテツダイ

チシナガラ、コーギロクデベ
ンキヨウシダガ、トンキチト
ヨダロウハ、トウキヨウノ、チ
ユウガダハハイジデモ、ナマ
ケテ、カッドウシヤシン、パカ
リミチアルイダ。



(四) 二十ホドダツテ、シン

キチハ、ヨツバナカイシヤノ
シヤチヨウニナリ、ヨツタハ
ソノカイギンニナツタガ、
トンキチトヨダロウハ、オナ
サケテ、シンキチノカイシヤ
ニツカツタモラツテイル。



◎入會するには今が一番好いときてす
講義録見本規則書
大日本國民中學會
電話神田區豐盛臺一丁目一〇〇番

濱田廣

介著

初山滋氏裝幀・畫

十一枚

定價壹圓貳拾錢
送料拾六錢

ひろすけ
童話集

飛

ん

で

來

い

新刊

「正しきもの」への思想をやさしく具象化して、兒童達の叡智と常に
握手してゐる著者の童話は從來の類型的なお伽話の比ではない。藝
術的教育的に十分な價値を備へて押しも押されぬ所、正に日本
の新興童話の代表である。

武井武雄著並畫

口畫三色刷一枚
挿畫二十四枚

定價壹圓五拾錢
送料拾六錢

長篇
童話

ラ

ム

ラ

ム

王

新刊

陽氣で純で、多角的で又どこかに高踏的な風格をすら持つてゐる
「ラムラム王」は著者の高邁な構想と二十四枚からなる華やかな挿繪
とに飾られて、幼き者の夢見ること多き高き高き感情の琴線をかき
鳴らさずには置かないでせう。

東神 京樂 市町 牛二 込丁 區目 叢文閣 振替電話 東京四二五 八二五 二八三

金 星 界 少 年 少 女 名 著 大 系

金 星 界 少 年 少 女 名 著 大 系 判 六 箱 入 類 本 ・ 定 価 各 冊 金 十 九 銭 ・ 送 料 金 六 銭

第 一 編

ロビンソン漂流記

船乗りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、途中難船に出遇ひ、無人島へ流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸つて来るまでの長い物語りです。世界の少年少女に、これ程澤山讀まれた本はないといはれてゐる位有名なお話です。ですからこの本を讀まない者は一生の不幸だといはれてゐます。

第 二 編

ナポレオン物語

『ナポレオン物語』は即ちナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた一少年ナポレオンが、ナポレオン大帝と稱せられて歐洲を征服する榮華の時代から、遂に南大西洋の一孤島セント・ヘレナで淋しい死を遂げるまでの變化極りない物語をわかり易く面白く書いたものです。一代の英雄ナポレオンの面影は、必ずや讀者に大きな印象を與へるでせう。

第 三 編

ドン・キホーテ

イスパニヤのある村にクイザノといふ男が、毎日騎士の物語りを讀んでゐる内に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ、瘦馬に乗つて本當に武者修業の處に出かけ、到るところで大失敗をして、遂にあはれた死をとげるといふ痛快な物語です。

第 四 編

コロンブス物語

アメリカ大陸を發見したコロンブスの物語りです。コロンブスが苦心慘愴して遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化極りない運命と、大きな努力には、感嘆せずにはゐられません。その面白い物語りです。偉人の傳記として、實に興味深い物語りです。

第 五 編

大人國小人國めぐり
ガリバー旅行記

ガリバーが、難船して小人島に漂着し、それより大人國を巡ぐる、滑稽と奇抜な面白い物語りで、そこに人生の諷刺や、大なる教訓が含まれてゐます。世の少年少女諸君に、興味と有益なる讀物として、此の本をおすすめします。

金 星 界 少 年 少 女 名 著 大 系

金 星 界 少 年 少 女 名 著 大 系 判 六 箱 入 類 本 ・ 定 価 各 冊 金 十 九 銭 ・ 送 料 金 六 銭

第 六 編

ロビン・フッド物語

『ロビン・フッド』は英國に昔から傳へられてゐる面白い物語りです。シャーウッドの森に住んで正義のために戦つたロビン・フッドの一生は、始めから終りまで胸をなぞります。悪い知事や僧正や、王をやつて、最後に尼のために毒殺されるあたり、涙なしには讀めません。

第 七 編

アラビヤンナイト

アラビヤに千年餘も傳へられ、世界の珍寶として奪れてゐる物語りです。昔アラビヤに悪い王があつて、毎日一人づつお姫を迎へては翌日は殺してしまふのを、或日勇敢な婦人が現れて、自ら進んで王の妃となり、その夜から千一夜物語つたのが、この『アラビヤンナイト』だといはれてゐます。

第 八 編

ギリシヤ神話
オデッセー物語

ギリシヤ詩聖ホーマの作であつて、世界中で一番古い、そして一番面白い物語りとして『イリヤード物語』と共に有名な物語りです。トロイの戦争に遙々海を越えて出征したオデッセーが、神の怒にふれて、途中ありとあらゆる困難に出遇ひ、遂に乞食になつて本國に歸る迄の物語りです。

第 九 編

シェークスピア物語

有名なシェークスピアの芝居の中で、童話として面白いものばかり特に選んで物語として書いたものです。『あらし物語』『仲意のま』『ベニスの商人』『がみ』『女訓』『真夏の夜の夢』『冬物語』等、是非一度は讀んで置くべき物語りです。

第 十 編

グリム童話

童話の開祖グリムの童話の中で、有名な面白いものばかりを集めて一冊にしたものです。世界各國の少年少女に幾度讀まれても喜ばれるのは、このグリム童話です。

金社の星 世界少年少女著名大系

四六箱入類美本・定價各冊金十九錢・送料金六錢

第十編 入繪

イソップ物語

イソップ物語は古くから知られてゐる話だけに、これまで随分多くの本が出てゐる。しかし本書の如く一つの物語に一枚づゝの立派な畫を入れて、お話を畫と兩方で面白く讀ませる本は他にありません。金の星社が最も自慢の本の一つとして、是非皆さんに見ていただきたいと思ひます。

第二十編 日本神話

古事記物語

『古事記物語』ほど立派な神話は、恐らく世界の何れの國にもありません。實際驚く程立派な面白い物語です。日本の國がはじめて出来た話から始まつて、神々の誕生や、天照大神や、大國主の命の話や、それからつと末になつて、雄略天皇の御代までの神話です。

第三十編 子供キリスト傳

新約物語

二千年後の今日まで、世界の救世主としてあがめられてゐるイエス・キリストの一生を聖書に従つて最も正確に書いた本です。この尊い人の一生を子供のために書いたものは外にありません。本書は、わが國にあらはれた最初の子供キリスト傳として、廣く世に紹介したいと思ひます。

第四十編

西遊記

支那から印度へ、はる／＼お經を取りに行つた玄奘三藏の旅を書いたもので、お供には悟空、八戒、沙悟淨の三人の怪物がついて行き、途中で様々の魔物に出遇ふ物語です。一度讀み出したら本を置けない世界的名作です。この本を讀まない者も不幸です。

第五十編

ローマ英雄物語

ローマの英雄を中心にして、ローマの歴史を面白く書いたものであります。はじめローマの國を開いたロムルスとレマスの不思議な生立物語からはじまつて、ハンニバルやシーザーなどの大英雄の物語などが順々に現れて來て、息もつけぬ面白い物語です。

金社の星 世界少年少女著名大系

四六箱入類美本・定價各冊金十九錢・送料金六錢

第六十編

聖書物語

舊約聖書は世界の最も古い文學として、これ程立派なものはないと云はれてゐます。宗教の物語りとしても、又一つの物語りとしても、こんなに面白いものはありません。信仰深いアブラハム・イサクの嫁えらび、羅の柱になつたロトの妻、蛇の肉の好きなイサク・ヨセフの夢判斷、實に面白い物語です。

第七十編

奴隸トム物語

奴隸トム物語を讀んで泣かぬ人は魂のない人です。此の物語は米國で盛んに使はれてゐた哀れな奴隸達の生活を書いたものです。深く神を信じ、如何なる苦しい生活にも、よく堪え忍んで行つた主人公トムの一生をお讀み下さい。世界まれに見る偉大な傑作です。

第八十編

ギリシヤ英雄物語

ギリシヤ英雄の傳記は、少年少女の讀み物として一度讀み出したら止められない程に興味のある物語りです。本篇はこれまで、世間に出てゐるものと違つて、有名な世界的文豪キングスレーが、自分の愛児のために著した名著を、土臺にして書いたものに、最も理想的なものとして勝ることの出来るものです。

第九十編

アンデルセン童話

世界第一の童話作家アンデルセンの童話は何人も讀んで置かなければならぬほど尊い世界の寶です。本書に收めた作は、アンデルセンの作の中でも最も代表的なものになつてゐる立派な作ばかりですから、本書一冊を讀めばアンデルセンの作が全部わかるわけです。立派な傑作集です。

第十二編

小公子

『小公子』の名は古くから知られてゐます。はかない運命に生れた小公子の物語りは、少年少女の必讀書として世界各國に推薦されてゐるものです。早く父の死に出遇ひ、孤の如く清き母の手に育てられ、から、頑迷なる祖父の家に引取られ、絶えず悲劇の主人公として活躍する小公子の運命の物語りを御一讀下さい。

沖野岩三郎先生著・裝幀柳田謙吉畫伯・

四六判箱入三二〇頁
定價金壹圓八拾錢・送料六錢

日本の兒童と藝術教育

著名の題問
！る現よいよい

本書一冊によつて讀者の思想に大變化を來さすべき使命を帯びた一大著述であります。沖野先生の三十年來の體驗と思索から生れ出でた本書こそ、わが國の兒童教育及文學にたづさはる何人も、一讀せねばならぬ本であることは言ふまでもありません。内容三百餘頁、一々一大警鐘となつて皆さんの胸を打つてせう。

殊に『現代の日本の兒童に如何なる童話を與ふべきか。』に就ての著者の大抱負を聽かれよ。

町坂勳郷本京東
社星の金
番六九五九五京東替振

世界少年少女偉人傳大系

錢六料送・錢十九金價定・葉數外版色三畫挿版六四

大木雄三先生著・裝幀柳田謙吉畫伯

（編一第） ジャンヌ・ダルク

可憐なる一少女ジャヌ・ダルクが、奮ひ起つて、母國を滅亡から救ふ健な氣な物語は、如何に讀者の血を跳らせるでせうか。教訓と興味ある一大雄篇。

霜田史光先生著・裝幀柳田謙吉畫伯

（編二第） ローマシーザー

世界的英雄、ジュリアス・シーザーの一生を書いたもので、その幼年時代から、ローマの元老院で刺殺されるまでの、大活躍を現した歴史物語です。

三井信衛先生著・裝幀寺内萬治郎畫伯

（編三第） ネルソン

トラファルガーの海戦に、譽れを戴した、ネルソンの傳記です。その國を愛する赤心、己の責任を重んずる觀念は、何人にも一大教訓となる物語。

番六九五九五京東替振
番七八三五六石小話電

町坂勳郷本京東
社星の金

の評好大るす表代を界曲作謠童本日
集譜曲謠星の金

錢六金料送・錢拾八金下以輯三・錢拾六金各輯二輯一

第一輯 人 本居長世作曲・野口雨情作謠	第二輯 一つお星さん 本居長世作曲・野口雨情作謠	第三輯 青い 本居長世作曲・野口雨情作謠	第四輯 赤い 小松耕輔作曲・野口雨情作謠	第五輯 夢 本居長世作曲・野口雨情作謠	第六輯 子守唄 本居長世作曲・野口雨情作謠	第七輯 お人形さんの夢 小松耕輔作曲・遠崎龍作謠	第八輯 べんべん鳥 中山晋平作曲・野口雨情作謠	第九輯 あの町この町 本居長世作曲・野口雨情作謠	第十輯 名所めぐり 藤井清水作曲・野口雨情作謠	第十一輯 夢 夢のお國、兎が来い、赤い橋に、踏さんお手まり、夢の歌、砂の歌
船	空	靴	唄	り	唄	夢	鳥	町	り	國
(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)
人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、歸る燕、十五夜お月さん	一つお星さん、七つの子、鵲と雀、鶴さん、象の鼻、四丁目の犬	青い装、燕、雨夜の傘、でん／＼鳥、雀の酒盛り、呼子鳥	赤い靴、山彦、三ヶ月さん、姥捨山、朝鮮船屋、眠り龜の子	夢とり、おしやれ椿、つば子、十と七つ、雲雀の水汲、雀の機織り	子守唄、櫻と小鳥、乙姫さん、はぐれ鳥、蕨坊主、藪の下道	お人形さんの夢、釣鐘草、啼いた啼いた雉子、芒の穂、お馬のお耳、草薙び、霜柱	べん／＼鳥、螢のお使、仔牛、赤い子馬車、紅殻蟬、さみだれ	あの町この町、雀踊り、木の葉のお船、高野山、鼠の小母さん、證誠寺の狸囃	長柄の橋、柱ぐり、阿彌陀池、宮城野の萩、お乳給、石山寺の秋の月	夢のお國、兎が来い、赤い橋に、踏さんお手まり、夢の歌、砂の歌

番七八三五川石小話電
番六九五九五京東替振

社星の金 郷本京東
町坂動

金の星

六月號



(通巻第七拾九號)

燕のお客さん

作曲 藤井清水

作詞 野口雨情

M.M. ♩ = 112
(優雅 軽快に)

Score

f *mp*

f *mp*

Score

mp

mp con eleganza

f

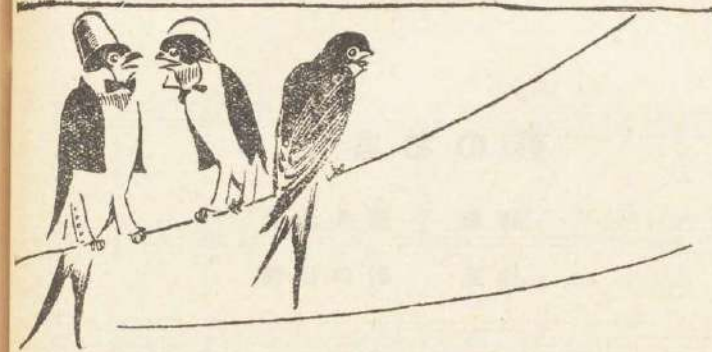
f

mp

燕のお客さん

野口雨情

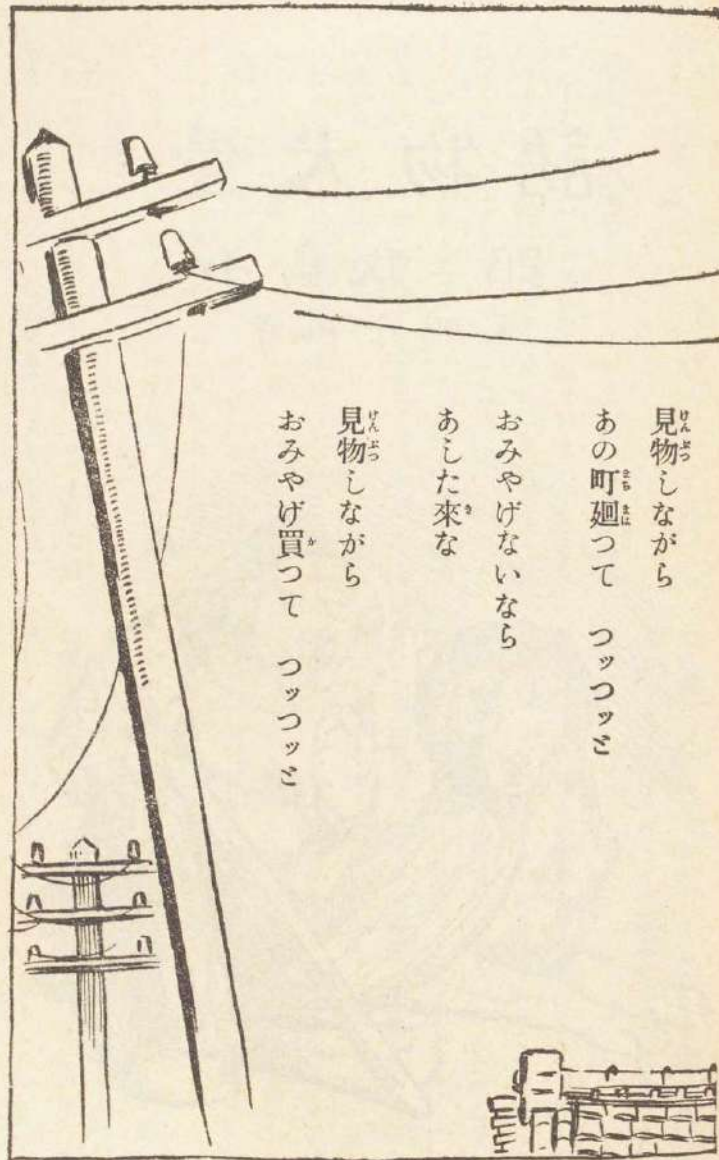
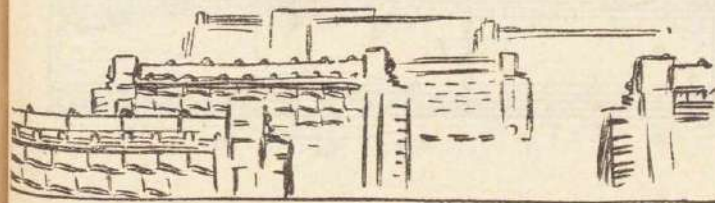
岡本歸一畫



燕のお客さん
飛んで來な

見物しながら
この町廻つて つつつつと

來るごきおみやげ
持つて來な



見物しながら
あの町廻つて つつつつと

おみやげないなら
あした來な

見物しながら
おみやげ買つて つつつつと

愛犬物語

小島政二

寺内七郎



六

十二

「爺さん、寝惚けちやイケないせ。そいつは俺の犬だ。」ハルも、口から流れ出る血を拭きながら立ち向ひました。「退けよ。退かなきゃ叩き殺すぞ。俺はどうしたつてドーンンへ行くんのだ。」

しかし、ソーン-ton は、バツクを庇つて突ッ立つたまゝ、一歩も退く氣振を見せませんでした。

「退かないと云ふんだな。」

ハルは、咄嗟に狩獵用のナイフを引き抜いたと思ふと、矢庭に切つてかかりました。が、ソーン-ton は少しも慌てず、手に持つてゐた斧の柄をのばすとコツンと、ハルの手首を打ちのめしました。すると、ナイフはポロツと地に落ちました。ハルが慌ててそれを拾はうとすると、

「拾ふな。」と一喝して、もう一度コツンと打ち据ゑました。相手がひるむ隙を見て、ソーン-ton は、

つと躍むが早いか、あべこべにナイフを拾ひ取つたと思ふと、手早くバツクの革綱を切つてしまひました。

ハルはもう戦ふ勇氣はありませんでした。考へて見れば、バツクはまるで死んだも同然でしたから、この上綱を引くのに役立つかどうか分りませんでした。で、思ひ切りよく見捨て、バツクの代りにバツクを先頭に据ゑ、ソルを橋際に据ゑ、この二匹の間にジョーとチークとを挟んで、いよく川の方へ下つて行くことになりました。犬はみんな跛を引いてゐました。メルシードは、荷物で一杯の橋の上に乗り、ハルは楫棒を握り、チャールスは躓きながら、うしろの方から附いて行きました。

バツクは、流石に首を上げて、一行のうしろ姿を見送つてゐました。その間に、ソーン-ton は彼の傍に膝を突いて、荒くれた親切な手で、どこか骨に傷をしてゐはしないかと、あつちを探りこつちを探り

七

してくれました。幸ひ、大した傷もしてゐませんでした。唯方々に澤山な擦り傷を負つてゐることゝ、非常に飢えてゐることゝが分りました。

その時、橋はもう川の上を二三丁も先きに行つてゐました。バツクとソーントンとは、一行が氷の上をそろ／＼と進んで行くのを、ちつと見守つてゐました。すると忽ち橋のうしろの端が、ズブ／＼とめり込むのが見えました。と同時に、ハルのしがみついたまゝの桿棒が、すつと高く空中に跳ね上りました。あゝ、メルシードのキャツと云ふ叫び聲が聞えました。チャールスは夢中になつてこつちへ逃げにかゝりましたが、その時は既に、あたりの氷が一面に割れて、犬も人もみんな見えなくなつてしまひました。見えるものは、たゞ欠伸をしたやうにボツカリ明いた穴ばかりでした。

バツクとソーントンとは、思はず顔を見合せました。

「よかつたなあ。よかつたなあ。」
ソーントンは、バツクの頭を撫でながら、嬉しうに云ひました。その手を、バツクはペロ／＼舐めました。

十三

なせソーントンは、たつた一人ぼつちでこんな寂しいところにキャンブを張つてゐたのでせうか。實は、彼は大勢の仲間と一緒にこゝまで辿り着いた時、足に凍傷が出来て、それが崩れて、一歩も歩けなくなつてしまつたのでした。で、仲間の連中は、彼に手當をして回復するまでこゝに残し、自分達はドーンンへ送る材木を切り出すために、この川を溯つて行つたのでした。で、彼がバツクを救つた時には、ソーントンはまだ少しばかり跛を引いてゐましたが、暖いお天氣が続くにつれて、いゝ鹽梅にすつかり直つてしまひました。



バツクも、永い春の日を、殆んど寝て暮らしました。流れる水を眺めたり、うつら／＼と眠りながら鳥の聲を聞いたりしてゐるうちに、そろ／＼と元氣を回復しました。三千哩も旅行をしたあとでボンヤリ體を投げ出してゐるのは、なんとも云へぬいゝ氣持でした。云ひ忘れましたが、ソーントンのキャンブには、スキートとニツグと云ふ二匹の犬がゐました。スキートは小さなセッターの牝で、親猫が子猫を舐めるやうに、バツクの傷口を親切に舐めたり清めたりしてくれました。ニツグも性質のいゝ黒犬でした。バツクは傷が直るにつれて、素のやうに骨のまは

りに肉が附いて來ました。

バックが丈夫になると、二匹の犬は忽ち親しみを
見せてふざけ掛つて來ました。時とすると、三匹を
相手に、ソーントンまでがその仲間に加はることが
ありました。かやうにしてバックは、その回復期を
跳ね廻りながら親しい生活にはひりました。彼は、
「愛」と云ふものを、ソーントンによつて初めて知
つたのでした。

ソーントンは、彼の恩人であつたばかりでなく、
實に犬を飼ふ名人でした。外の犬追ひ達は、檻を引
いて貰はなければならぬ犬だから可愛がる。とこ
ろが、ソーントンは、そんな慾得を離れて、自分の
子と同じやうに、可愛くつてたまらないから可愛が
るのでした。彼は犬と向ひ合つたまゝ、永い間、話
をしてゐるのが好きでした。ふざける時、ソーント
ンはバックの頭を兩手に挟んで、體を激しく前後左
右に揺つたり、どさつと倒したりして、随分手荒に

一〇
取り扱ひましたが、さう云ふ手荒の中に、なんとも
云へない愛情の籠つてゐることをバックはちやんと
知つて喜んでゐました。

それに對してバックの方でも、痛みを與へるやう
なふざけ方をしました。ソーントンの手を銜へて、
あとで暫く齒の跡が残る程きつく噛み締めたしま
した。しかし、それがバックの愛情の現し方である
ことをソーントンは知つてゐました。

ふざけ合つてゐた二人がつと離れて、面と向ひ合
ふことがありました。そんな時、バックの口は笑ひ
を帯び、目は物を云ひ、喉は顫へる響を發しまし
た。

「本當に貴様は物が云へさうだな。」と、ソーント
ンは頭を撫でてやらずにはゐられませんでした。

バックはソーントンに救はれてから永い間、彼の
姿を見失ふのが厭でした。ソーントンがテントを出
て、再びテントにはひる時まで、バックは必ずその

あとに附いてゐました。彼はこの北地に來て以來、
度々主人を獲へられたので、どの主人も永いもので
はないと云ふ恐れが深く頭に染み込んでゐました。

彼はベロールや、フランソアや、合の子が消え失せ
たと同じやうに、ソーントンも亦彼の生活から消え
失せるだらうと氣使つてゐました。夜中にすら、彼
は夢の中でこの恐れに魔されました。そんな時に
は、彼はバックリ目を醒して、寒い中をテントの裾
まで忍び寄つて、そつと主人の寢息を立ち聞さる
のでした。

間もなく、ソーントンの仲間のハンスと、ビート
が、待ち設けた筏に乗つて歸つて來ました。三人は
ドーンソンの町へ行つて、この材木を賣り拂つて大分
儲けました。で、それを元手に糧食を買つて、タチ
ナ河の水源に向つてドーンソンを出發することになり
ました。

途中、或崖の上に腰を卸して、人も犬も休んでゐ

ました。その崖は、三百尺も高さのある、眞直に削
り立つたやうな岩でした。

その時、ソーントンはふと崖の鼻まで立つて行つ
て、

「バック、飛んで見ろ。」と、手を動かして見せま
した。

すると、よもやと思つてゐたバックが、猛然と身
を翻して崖から飛ばうとしました。驚いたのはソー
ントンです。

「嘘だ、バック、嘘だ。」と叫びながら、慌て、バ
ックの首へ嚙り附いて、あとへ引き戻さうとしまし
た。ハンスとビートもびつくりして、ソーントンの
體にしがみ附きました。

やつとバックを宥めてみんなでおつとした時、
「まるで魔物だな。お前の云ふことなら何でも聞
く。」とビートが云ひました。

「俺は、あいつのゐる前では、お前に手を觸れるこ

とも恐ろしい。」

ハンスのかう云ふのに合せて、ビートも、



「全くだ、俺もさうだ。」

ところが、その年のまだ暮れぬうちに、サークル
シチーの町で、ハンスの心配して云つた言葉が本當
になつて現れました。「黒のバートン」と云ふ仇名
の男が、或酒場で、一人の新参者に喧嘩を賣つてゐ
ました。見兼ねて、ソーントンが穩かに仲裁にはひ
りました。その時、いつものやうにお供をして來た
バツクが、片隅に寝をべつて、前足のうに頭をの
せ、ちつと主人を見守つてゐました。

「うるせえな。」

バートンはかう云つたかと思ふと、いきなり拳闘
の手で罪もないソーントンを突き飛ばしました。ソ
ーントンはクル／＼と廻つて、やつとテーブルに撞
まつて體を支へました。

その時、居合せた人達は、忽ち、一種吠えるとも
唸るとも云ひ難い叫び聲を聞きました。同時に、バ
ツクの體が床を離れて、バートンの喉を目算けて空
は腕の肉から齒を弛めて、もう一度喉へ噛み付き直
しました。今度はバートンも防ぎ切れずに、喉の肉
を一部食ひ裂かれてしまひました。

「あつ。」

驚いてみんなは總立ちになつて、バツクを追ッ拂
ひました。さうしてすぐ醫者を呼び迎へました。し
かし、醫者が血止めの藥を塗つてゐる間、バツクは
猶もそこらをうろつき廻つて、恐ろしげな唸り聲を
發しては飛び込もうとしました。その度に、大勢の
棍棒で追ひ返されました。

訴へによつて、すぐに裁判が開かれましたが、素
はと云へば、バートンがバツクを怒らせたのが悪い
と云ふ判決で、バツクはそのまま放免されました。
それ以來、バツクは忽ち有名になつて、アラスカ
中で彼の名を知らない者は一人もない位になりまし
た。翌年の秋、バツクはまた違つた場合に、ソーン
トンの命を救ひました。それを話させよう。(つづく)

中に飛び上りました。バートンは腕を横にして辛う
じて命は取り止めたが、バツクに食ひ附かれた
まゝでうしろの床の上に投げ倒されました。バツク





信夫の孝行

西尾千賀子

岡本歸一畫

教壇に立つてゐる信夫達の先生が、あるとき、次のやうにおつしやいました。

「皆さんはおうちで、どんな事をしていますか？ お父様やお母様を困らせはしないでせうね。お父様やお母様はみなさんのために、どんなに苦勞をしてゐらつしやるか分りませんよ。だから決して御心配をかけてはなりません。我儘をしてはなりません。學校ではよく勉強して、そしておうちへ歸る

時は道草など食べないで、早く歸つて安心させてあげなければなりませんよ。そしてみなさんに出来る事は、お手傳ひしてあげるのがよろしい。どうです、みなさんはどんなお手傳ひをした事がありますか。お兄様やお姉様のおつしやる事を聞かなくてはなりません。又、弟さんや妹さんのある人は、虐めないやう大事にしてあげなくてはなりませんよ。兄弟仲のよい事は大變な孝行ですよ。兄弟が仲のよいのを見ると、どんなにお父様やお母様はおよろこびになるでせう。これから時々、みなさんがお家でどんな事をしているか、先生に聞かせて貰ひませう。ね、今日から皆さん氣をつけて、そして

先生に大威張りでお話の出来るやうな事をして下さい。」

さう云つて、先生はみんなを見廻しました。両手をお膝の上においてお行儀よく聞いてゐたみんなは、ホツと溜息をつきました。

信夫のすぐお隣の席にゐる二郎は、赤い顔して、そつと先生のお顔を見てゐました。二郎は今朝、お母様が學校に行くのが晩くなるから、早く起きなさいと云つて、何度起してもなか／＼起きませんでした。そしておしまひにお父様が怒つて布團を捲つてしまはなければ起きてきませんでした。やつと起きて忙しくお臺所を働いていらつしやるお母様に着物をさせてくれと云つてねだりまし

た。やつと着物をさせて貰つても、その着せ方が悪いと云つては駄々をこねました。だから今先生のお話を聞いて、自分は非常に悪い事をしたと思つたので、もしやそれを先生が知つてはゐないかしらと思つたので、顔を眞赤にしたのです。

又信夫の斜め前にゐる時夫は、先生のお話をきいてから、黙つてうつむいて了ひました。時夫には小さい弟と妹とがありました。昨日お母様は三人に同じ數のお菓子を下さいました。ところが時夫は兄弟の中で一番大きなものですから、早く自分のお菓子を食べて了つて、そしてそつと妹のお菓子を一つ横どりして、妹を泣かせた

のです。そして此の事をお母様に云ひつけてはいけなと云つて、弟の頭をたたいてまた弟を泣かせて了ひました。今その事を思ひ出したので、急に弟や妹が可哀想になつて來たのです。

信夫もやはりみんなと同じ様に、心の中では一寸まごつきました。信夫のお家には女中や書生がゐて、信夫の用を何でもしてくれまますから、お母様にめいわくをかけた事はありません。また、弟も妹もないので、弟や妹をいじめた事はありません。

だが朝起きた時、顔を洗ふ水を早く汲んでくれなかつたと云つては、女中の梅やをたたいたり、また學校が終つても、すぐお家へ歸

らず、途中でよその犬をいぢめたり、お友達のお家へ寄つたりしてお母様を心配させたことが、幾度もあります。時にはお母様は心配のあまり、女中を學校へたづねに行かせたり、お友達の家へきつにやつたり、とても大騒ぎをしたこともあります。だから、先生のお話をきいて信夫は、お母様に大層すまなく思つたのです。そしてそのつぐなひに、何か孝行をして見ようと思ひました。

そのあくる朝、信夫はいつもより早く起きました。そしてお父様やお母様の知らん間に着物を着てしまひ、梅やが水を汲んでくれなくつても、自分でチャンと顔を洗

つてしまひました。そして大威張りでお父様やお母様のところへ、朝の御挨拶に行きました。

『お父様、お母様、お早うございます。』

まだ寝間着のまゝであらしたお父様は、びつくりなさいました。

そして笑ひながら仰いました。

『おや、たい層早いのだね。そして着物も自分で着たのかい、偉いね。どうして急に利口になつたのかね。』

お母様も驚いてしまひました。

『もうお顔も洗つたの？ まあ驚いたわね。母様はちつとも知らなかつたわ。どうして急にそんなに利口になつたの。』

信夫がお母さまのお部屋を出た

あとで、お父さまとお母さまは、顔を見合はせて笑ひました。

『何うしたのだらう。何うした風の吹きまはしだらう。急にあんなに早く起きるなんて。』とお父様がおつしやると、

『三日坊主でなければようございませうがね。』とお母様がおつしやいました。

暫くすると、お臺所の方で梅やの聲が聞えてきました。

『あの坊つちやま。此所は今梅やが掃きましたから、もうよろしいんでございますよ。ホラ御覽遊ばせ、塵が一つもないぢや御座いませんか。』

これを聞いたお父様とお母様は

の上、まだお手傳ひまでする様になつたとは。

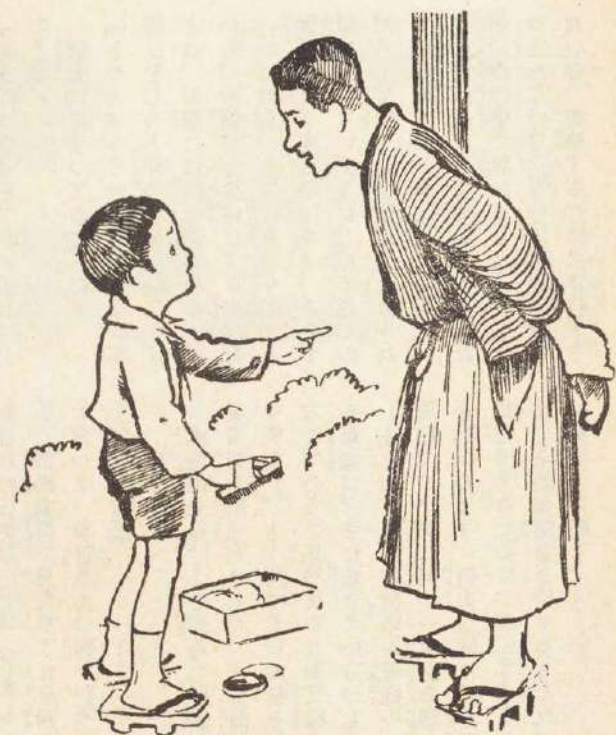
すると、今度はお玄關の方から書生の青木の聲がきこえてきました。

『お坊つちやま、駄目ですよ。僕がみがいたのをいちつちや、またきたなくなるぢやありませんか。そ、そんなにクローームを澤山つけちや駄目ですよ。』

お父様とお母様は、また顔を見合はせて驚いてゐました。そこへ信夫は情氣た顔をしてはひつてきました。

『どうしたの？』

『お母さん。僕つまんないな。ちつともお手傳ひが出来ないんだもの。』



又顔を見合はせました。

『まあどうしたと云ふんでせうね。あんな面白かつた信坊が、自分の事は自分でする様になつたそ



其處でお父様とお母様とは仰いました。
「信夫、お前學校で何か教はつたの？」
信夫はだまつてゐました。
「きつとさうでせう。先生はお手傳ひをしろと仰つたかしれないけどね、お家には梅や青木がゐますから、お前がお手傳ひする事はないのだから、その代り、今迄より勉強をよくするのですよ。そして道草をしないやうにしてくれるのが、お父様やお母様は何よりうれしいのですからね。」
信夫はだまつて聞いてゐましたが、心の中で思ひました。「ああ、つまらないな。もつと何か孝行したいな。勉強するだけの孝行ぢや

張合がないな。お手傳ひは出来な
いし、兄弟がないから仲よくする
わけには行かないし、つまらな
い。活動寫眞で見たやうに夕刊で
も賣つて、お母さんに何か買つて
上げたいな。」
或夜信夫は、ふと恐ろしい夢を
見て目を醒ました。十二時近
くでした。もう疾づくにお休みに
なつてゐると思つてゐたお父様と
お母様は、まだ起きていらつしや
いました。そして隣のお母様のお
居間で、小聲に何か一生懸命話し
をしてゐます。信夫は何だか心配
になつてきたので、耳をすまし
て、そのお話をきいてゐました。
お父様のお聲で、

「仕方がない。こんな大きな損を
したのも、不運とあきらめる外は
ない。とにかく、生活をひきしめ
るのが大切だ。現在のまゝではゐ
られない。小さい家に移らう。そ
してお前も困るだらうが、梅も青
木も暇を出さなくちやならない
ね。」と、仰います。
「そんなこと何でもありません
わ。これから私は一生懸命働
きます。でも私達はどうなに苦勞し
ても、信夫だけは今迄のやうにし
てやりたいものですわね。」と、
お母様のひくい、しかし力強いお
聲がきこえました。信夫はなんだ
か胸があつくなりました。だが小
さい家に移つて、さうして梅も青
木もゐなくなれば、どんなに淋し

くなるだらう。しかし今度こそ孝
行が出来ると思ふと、信夫は
悲しいやうな、勇ましいやうな心
が胸に一杯になりました。

それから半月位の後、信夫のお
家はある郊外へ移りました。もう
その時は梅や青木も一緒ではあ
りませんでした。郊外のお家には
水道も瓦斯もありませんでした。
信夫は朝お母様と一しよに起きる
と、井戸のポンプを押しました。
お母様は「そんな事は青木にさせ
るからいい」と仰る代りに「御苦
勞だね。」と云つて下さいました。
それからお母様が御飯の用意をし
てゐる間に、お玄關と庭を掃きま
した。靴もみがきました。だが今

は「お坊つちやん、お庭はもう掃
きましたよ」と云ふ梅や青木もい
ないし「靴はみがけてゐますよ。」と云
ふ青木もゐませんから、信夫は大
威張りでする事が出来ました。
學校がひけると、大急ぎで歸つ
てきました。ある日友達達の榮吉
は、急いで歸つてゆ 信夫を呼び
止めました。
「信夫君。君は此頃馬鹿に早く歸
るね。何故そんなに早く歸るの、
少し僕と遊んでゆかうよ。」
「君は此間先生の 仰つた事を忘
れたの、君は孝行をしてはゐない
のか。」
「覚えてるさ。だがうちや僕が
する事は何にもないんだもの、僕
は少し位遊んでいつてもいいんだ

よ。」

「さうか、君はそれや遊んでゐたまへ、僕は早く歸つてお母様の手傳ひをするんだからね。」

信夫は榮吉を相手にせず、どんな急いで歸つてきました。そしてみち／＼今日歸つたらどんなお手傳ひをしたらよいかと、考へながら歸つてきました。

お母様は洗濯をしてゐました。



すると玄關へ誰かお客様が見えました。お母様がお玄關へ行つてゐる間、信夫はそのお洗濯を始めました。だが始めてするお洗濯はとても骨が折れました。やがてお客様が歸つたので、お母様がきてみると信夫がお洗濯をしてゐるのでびつくりしてしまいました。

「まあ信夫や、いくらお手傳ひしてくれてもこんなお洗濯なんかし

二〇

なくつていいんだよ、手を痛くしなかつたかい。」

さう云つてお母様が洗濯物を手にとりますとその洗濯物に一つ穴があいてゐました。

「おや穴があいたよ、お前があまり綺麗にしやうと思つて一生懸命こすつたから、穴があいたんだらうね。だがこれはいいよ、あのそれぢやね、お前すまないが一寸肉屋さんへ行つて来てくれない。ほんとに馴れない事はつかりで、いやだらうね。」

「うゝむ。僕大好きだよ、お母さん。」

と、云ふと、お母様の目がうるんでゐました。

夕方お父様がお歸りになると、

お母様は信夫がたい層手助けをしてくれる事を話しました。するとお父様はさもうれしうに、

「偉いね信坊は、明日お父さんが歸るとき、御褒美を買つてきてあげるよ。」

「僕は御褒美など欲しくないや。」

信夫は御褒美よ

りも、お母様の手助けになつたと云つて褒められたのが、何よりも愉快でした。こんなうれしい事はありませんでした。



或日、お母様が御用があつて外出なさいました。そして信夫一人留守をしてゐました。その時玄關に誰か來ましたから、出てみる

と、それは孤兒院の子供でした。そして袋の中から鉛筆や手帳を出して、どれか一つ買つてくれと云ひました。だがお母様も留守だし、信夫はお金をちつとも持つてゐません。

「君、氣の毒だが、今お母さんゐないし、僕もお金持つてゐないから、明日でも來たまへ。君はお母さんないのかい。」

「僕はみなし子なんだから、だからかうしてものを賣つて歩くんだよ。」

「そして君も矢張り學校へ行つてゐるの。」

「ウム、行つてるよ、學校ぢやよく出来るんだよ。こんな事をして歩いてゐるけど、今に偉い人間に

なるんだ。おやまたくるからね。」

さう云つて孤兒はかへつてゆきました。信夫は感心して下りました。そして考へました。

『あの孤兒は、物を賣つて、そうして學校へ行つてゐる。だがお父様やお母様がゐなくては張合がないだらうな、さうだ、僕もあんな風に何か賣つて見やう。そして其のお金で梅やにかへつて貰はふ。するとどんなにお母様はよろこぶだらう。一つお母様に話してみやうかなあ。』

夜、お父様とお母様とが歸つたとき、信夫は孤兒の話をして下した。そして『僕にも何か賣らして下さい。』と頼んでみました。お父様とお母様は暫く顔見合はせて

ゐましたが、お母様はいきなり信夫を抱きよせて、

『まあなんていぢらしい事を云ふのでせう、ほんとにお前は孝行者だね、だけどね、あの孤兒はお父様やお母様がないから、あゝして物を賣つて歩かなくてはならないの。信夫にはかうしてお父様もお母様もあるでせう。そして梅や青木はゐなくなつても、お前が物を賣るほど困りはしないの。今にお父様が立派な會社におつとめなさる様になれば、また昔のやうになるのだからね。』

信夫の郊外での生活は一年半ばかり續きました。するとある晩お父様がお歸りになつてお母様に、何か一言二言仰ると、お母様の顔が急によるこびのためにかがやきました。そしてお母様はニコニコしながら、

『信夫、一寸おいで。お前昔のお家へ歸りたくない。』

『うゝむ、歸りたいよ。』

『さう。お欣び。すぐ昔のお家へ歸れるよ。』

だが昔のお家へ歸ることは、大へんうれしく思ひましたが、また梅や青木が歸つてきて、自分が孝行が出来なくなるかと思ふと、それだけがなくなると、もの足りなく思ひました。



『ね、お母さん。昔のお家へ歸つても、やつぱりお使ひに行つてもいいでせう。』

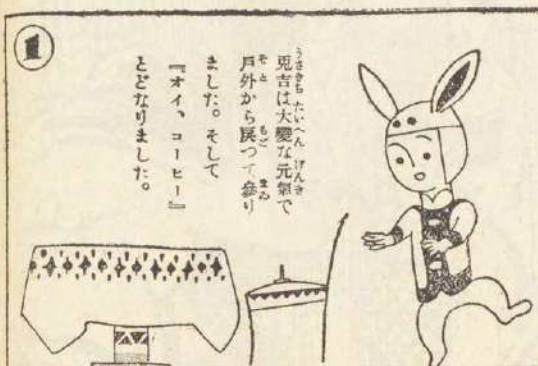
お母様は、うれしそうに笑ひくづれながら仰いました。

『ああ、いゝとも。たんとお使ひをして下さいね。』

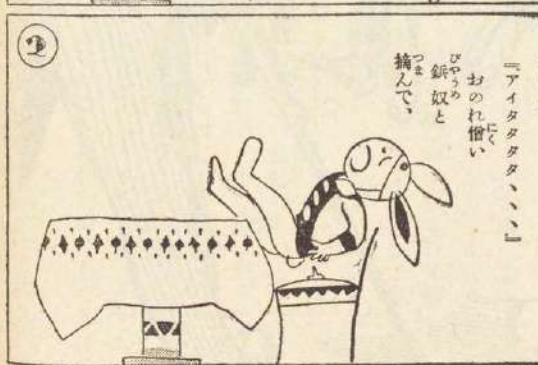
信夫のお家が昔のお家へ移る時、お父様は寫眞屋をつれてきました。そして此の小さい家の前で、お父様とお母様と信夫の三人で寫眞をとりました。それは信夫の孝行をいつまでも忘れないやうにするためでありました。

(をばり)

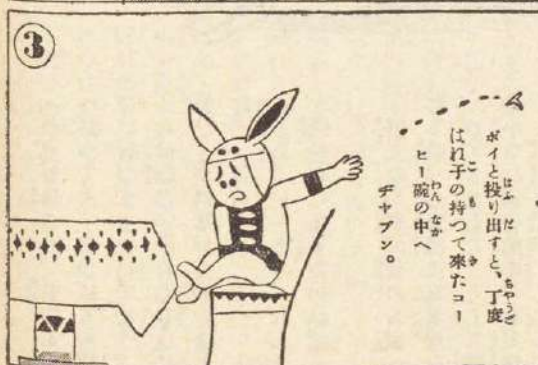
マンネン屋 河盛久光
コビモ屋



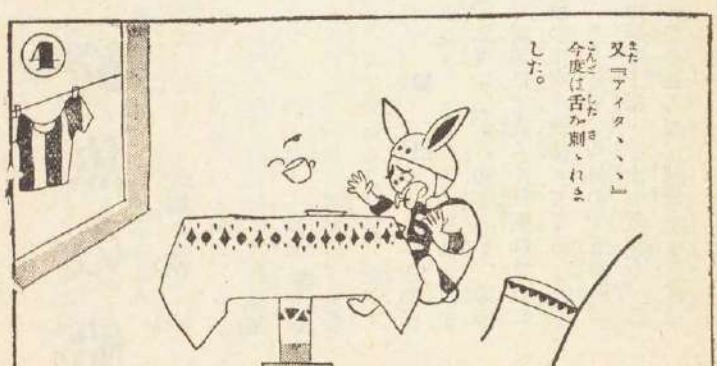
兎吉は大變な元氣で
戸外から戻つて参り
ました。そして
『オイ、コーヒー』
とどなりました。



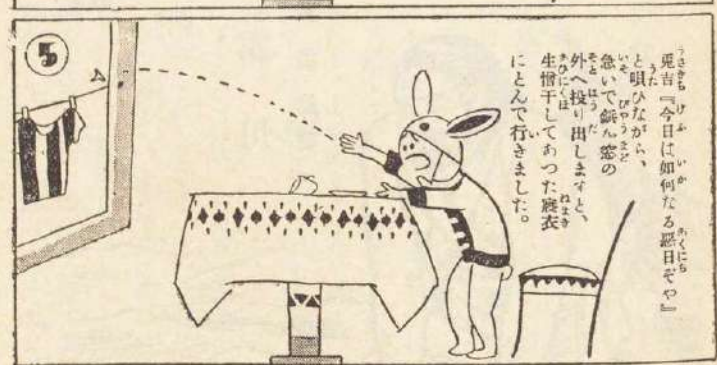
そして、そして、どなりながら、
ドシンと椅子に腰をおろすと、誰
の相懸かその上に銀が落ちてあま
したので、チクリ。
『アイタタタタ、』
おのれ憎い
銀奴と
つまみ
摘んで、



ボイと投げ出すと、丁度
はれ子の持つて来たコー
ヒー碗の中へ
チャブン。



又『アイタ、』
今度は舌が刺されま
した。



兎吉『今日は如何なる悪日ぞや』
と唄ひながら、
急いで銀の
外へ投げ出しますと、
生憎干してあつた襦袢
にとんで行きました。



夜睡る時です。又
『アイタタ、』
又々銀がさつ
たのです。
皆さん、不幸せと
いふものは、一つ
やつて来た時に、
あわて、しまふと
後から後からとや
つてくるもので
あります。
さよなら。

鰐魚の船

(爲朝物語)

三島霜川

寺内萬治郎書

船出

舜天丸が六ツの年の秋、ある日、爲朝は、永らく住馴れてゐた阿蘇の山寨を焼拂つて了ひました。さうして、八月の十五日に、肥後國宇土郡、宇土の濱から、二艘の船を出して、琉球に向ひま



した。その一艘には、爲朝自分船頭大將になつて、白縫と一緒

に、二十餘人の家來をつれて乗込みました。また、もう一艘の方は

舜天丸が大将でした。そして、それには、八町礮の紀平治と、乳母

の磯萩と、その所天の高間太郎とが傳人になつて、十五人の家來を

引きつれて乗込みました。船は、軸を南の方に向け、順風に帆を張

りきつて、沖へ沖へと乗出しました。爲朝の船の軸には、笹龍膽の

紋のついた白旗が一と流れ、さつと海風になびいてゐました。

秋晴の空は、爽に澄みわたつて、一點の雲もありませんでした。濃藍の海は、まるで壘の上のやうに静でした。

「この日和であつたら、明日の夜明までには、七島灘を乗切つて了へるだらう。」

爲朝は、さう云つて、大へんな元氣でした。顔には悦と希望との

色があふれてゐました。家來たちも、未だ見ぬ國へ行くといふだけ

でも、愉快だと云合つてゐました。船ちうが、皆、元氣でした。

そして、よく働きました。船は、スル／＼と滑るやうに、よく駛りました。

丁ど其の夜は、お月見の十五夜でした。夜になると、海は、黄昏

ほどに明くて、まるで夢の世界のやうに静で、渡海が、一だんと愉快でした。爲朝の船でも、舜天丸

の船でも、水主、楫取の役の者の

他は、皆、船の胴の間に集つて、西へ廻つて行く月を眺めたり、金のやうな月の光が、波に碎けるのに見入つたりして、楽しい、しかし、何んとなし、うら悲しいやうな夜を更かしてゐました。

爲朝の船と、舜天丸の船とは、いつも三町、または五町ほど離れて駛つて居りました。

曉方近くなると、月は落ちて、海に、霧が立ちこめて來ました。

それが、見る／＼うちに深くなつて、朝になると、一寸の先きも見えぬほどの濃霧になりました。こ

れは、今も昔も、航海をする者に取つて、まことに怖ろしい厄介な

奴でした。よく船と船とが衝突して沈没したり、また坐礁したりす

るのは、こんな時なのです。

爲朝は、十年あまりも、伊豆の島々に暮らして、濃霧の怖ろしいことを、よく知っていました。それで、舜天丸の船の帆影が見えないやうになると、すぐに火を焚かせて、互に見失はないやうにしました。しかし、その火さへ見えないうやうになると、今度は、法螺の貝を吹いて、互に合圖をしやつて進みました。

午頃になると、霧は、だん／＼晴れて行きました。ところが、どちらを向いても、渺茫たる洋上——そこが、何處の沖だか解らなくなつて了ひました。そして、種子島、屋久島、喜界ヶ島——爲朝が心あてにした島影の一つも見えま

せんでした。

『おかしいぞ、潮に流されて、船が違つたのではないか。』

爲朝は、さすがに、心配になつて來ました。そして、少し慌てたやうな心もちになつてゐますと、鳥のやうに翼のある魚——あの飛魚といふ奴が、まるで秋の田に蝗の飛ぶやうに、無數に、波の上に飛上がつて、舷や舳へも、ぶつか

爲朝は、いよ／＼『いけない』と思ひました。しかし、舵を回して逃げようにも、どつちへ逃げたら港があるのか、それも解りませんでした。涯も知れぬ洋上に、木の葉のやうに浮んだ船——もう『運を天に任せるしかない』と、爲朝は、さう決心致しました。さうして、家來に指圖をして、帆を下ろさせ、舵を固めて、颱風のやつて來る用意を致しました。

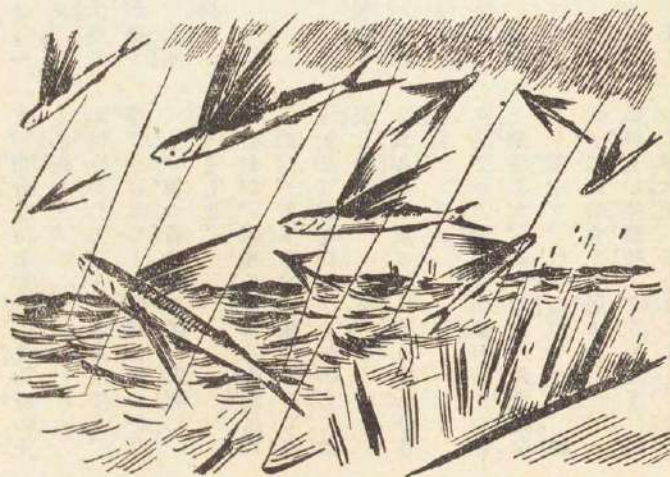
風が、だん／＼生暖くなつて來

颱風來る

西洋の人は、これを颱風と云つてゐます。この颱風は、昔から日本

その颱風がやつて來るのを知つて、白縫に颱風の話をして聞かせました。

三月になると、地の氣、南から北に行く。それで、常に南の風が吹く。
九月、霜が地に降ると、地の氣、北から南に行く。それで、常に北の風が吹く。
もし、この例にはづれると、必ず、風が暴れ出す。
この、風の烈しい奴を颶といふ。颶の、



もつと烈しい奴を、颶といふ。颶は、定つて、驟に吹出す。颶は、いつでも、だん／＼にやつて來る。
颶は、どつと、やつて來て、忽ちに止む。颶は、一晝夜、または、二日三日に渡つて、吹きつゞく。
颶は、正月、二月、三月、四月に多い。
颶は、五月、六月、七月、八月に多い。
渡海の船が、颶に遇つても、覆らぬことがある。しかし、颶に遇つては、大概覆つて了ふ。
颶が來ようとする、まづ、北の風が吹いて來る。それが、變つて、東南の風となる。また

變つて、南の風となり、もう一度變つて、西南の風となる。さうして、その前かたに、大空に帆のやうな雲が出て、雨が降つて来る。また、南海では、海水が泡立ち、海月が浮び、飛魚が飛ぶ。

爲朝が、かう話してゐるうちに、空の一角に、丁ど船の帆のやうな恰好をした、怪しい雲が現はれました。そして、その雲から、蟹が足を伸ばすやうに、スル／＼スル／＼と、また雲が出て、見る見るうちに、空ぢうに蔓つて行きなりました。

白縫は、舌を巻いて、海の威力に、怖れ、おの／＼しました。そして、

て、自分よりも、舜天丸の身の上を心配して、

「何うかして、どこの島にでも、漕ぎつけることが出来ませぬか。」

と、眞ッ青になつて、爲朝に、絶りました。

「それが、出来る位なら心配はないのだ。こゝは、何處の沖とも解らぬのではないか。おれの力には及ばぬ。」

爲朝は、突ッ放すやうに云ひました。

そこへ、舜天丸の船が漕ぎつけて来ました。紀平治は、舜天丸を肩に乗せて、仁王様のやうに、艀のところに立つて居りました。追ッつけ大荒になりました。今の

うちに、若君を、そちらの船にお移し申しては如何でござりましょう。」

「さうぢや、紀平治が云やる通である。若をこちらへ。疾う／＼。」

と、白縫は、舷から双手をさし伸べて、爆りました。

「そりや、可かん。」と、爲朝は、白縫を叱りました。「舜天は、その船の大將であるぞ。大將は、船が沈むでも、その船を去るものではない。況して、親子、一ツ船にゐては、この船が沈めば、諸共に沈む。網に入つた魚でも、十に一ツは脱れる。舜天に運があれば、その船が何處の島に漂ひ着かうも知れぬぞ。」

「それでは、御船と、こちらの船

とを、纜で繋ぎましては、如何でございましょう。」

紀平治は、かさねて、訊ねました。

「それが何んになる。こちらの船が沈めば、その船も沈むだけだ。それよりは、その船は、その船の防ぎをするが可い。」

爲朝は、言葉を勵まして、きつと云渡しました。

その時、びゆツと、一となく、惡魔の息のやうな風が、帆柱にぶつかつて来ました。そして、雨が、ボツリ、ボツリと落ちて来て、波の上には、飛魚が、のべつに跳上がりました。

「さ、命の續くだけ、やるのだぞ。」

爲朝の船でも、舜天丸の船でも、皆、思ふ存分に、颶風と戦はうとめい／＼氣を引きしめました。

しばらくすると、そこらは闇の夜のやうに、眞ッ暗になつて了ひました。雨は、ど、ど、どツと、瀧のやうになつて、船を叩きつける。颶風は、人の髪をむしり取るほどに、暴れ狂ふ——ごう／＼とどよみを作つて襲ひ来る風に、浪は怒つて、逆捲き立つ。そして、それが、峻しい山となつて、船に、おツかぶさつて来ました。その浪頭、浪のしぶきが、雨と亂れて、ど、ど、どツと船に打込むで来る——その潮水を汲出すだけで、家來たちの働は大變でした。

皆な、眼いては、仆れ、仆れては、軋り、息も絶えになつて、うごめき廻るばかりでした。

煤色の雲が、古綿を引ち断つたやうになつて飛ぶ。白浪が跳る。目に見える物といふは、それだけで、船は、浪のまに／＼煽られ、跳り、或は、逆落しになつて、何處ともなく漂ふて行きました。さうして、帆柱は、伐倒されて、流れて了ふ。舵は折れる、舷は破れる、船は、もう少しで、沈むばかりに、大破れに破れて了ひました。

そのうちに、晦い海が、一そう暗くなつて、日が暮れかゝつて来ました。それでも、颶風の勢は、少しも衰えません。

爲朝は、その時まで、帆柱を立てるところに、體を縛りつけて、家來たちを指圖してゐましたが、空を見上げて、

「ア、もう駄目だ。」と、ふと、さう叫びました。

浪と風とが、どよめくうちに、白縫は、ハッキリと、爲朝の聲を聞きました。

「ア、助かるお見込みはございませんか。」

白縫は、やはり、女でした。絶望の聲が、怖れと悲みに慄へてゐました。

爲朝の返事は、ハッキリしてゐました。

「舜天丸の船は、何んと致したでございましょう。」

「これとても、この通りであらう、或はもう、沈むだとも思はれる。」

「それならば、いッそ、この船で、一緒に沈むだが宜しうございしました。」

「然うであつたかも知れん。だが、舜天は、あの船の大將ぢや。俺とても、舜天のことは思はぬではないが……」

と、云つて、爲朝は、黙つて了ひました。

白縫も、ヒツとなつて、黙つて了ひました。その着物は、潮と雨に濡れて、びしょ／＼になつてゐ

ました。さうして、髪もまるで、お化のやうに亂れてゐました。

「日本武尊が、相摸から上總へ、海をお渡りになりました時も、やはり、難風にお出遇ひあそばしたと聞きました……」

しばらくしてから、白縫は、ふとまた、さう云ひかけました。

「さうだ。俺も聞いて居る。」

「その時、妹弟橘姫が、命を海神にさづけ、海に躍つて、お入りあそばして、それで、波が平かになる、尊は無事に、上總にお着きなされたと承はりましたが、白縫とても、八大龍王に、命をさづけましたら、この難風を……」

後の言葉は、びゅつと吹きつける風に、息をつまらせて、ふッ切



れて了ひました。

「いや、それは、尊に御威徳がおはしたからであるぞ。八郎が身には徳がない。まして、あれは、颯であつたらうと思はるが、これは颯風ぢや。八大龍王も、そちが命を受納あらうと思はれぬぞ。」爲朝の其の言葉が訖るか訖らぬに、白縫は、ふいに、物狂はしく立ちあがりました。とたんに、船は、大浪に乗つて、さながら、鞠が蹴上げられたやうに、ゆらりと中天まで揚がる。白縫は、一度、バツタリと轉んで、ヤツとこのことと舷に手をかけ、ふら／＼と立ちあがりました……と、今度は、船は、斜に傾き、千尋の底へ逆落しに落ち込むで行く……その千尋の底

を目かけて、白縫は、ヒラリと身を躍らせました。

「あッ……」

と、爲朝は、飛びついて、支えようとしたが、體が、縛りつけてありました。白縫の黒髪が、チラと浪間に見え、ました。しかし、それきり狂立つ白浪に吞込まれて、影も形も、見えなくなつて了ひました。

吹き狂ふ風と共に、空にも浪にも、いつか、夜の色が襲つて來ました。

舜天丸の船

舜天丸の船は、爲朝の船よりも、いッそ、むざんな有様でした。舵やなども、疾うに浪に没はれて了

つて、舷の破れたところからは、ドン／＼、浪が躍込む。そして、船ちふが、潮で一杯になつて、もう沈むばかりに危くなつてゐました。家來のうちには、浪に没はれた者もあれば、互に刺違つて死んで了つた者もありました。乳母の磯荻などは、とても船が沈むで了ふならばと云つて、眞ッ先に海に飛び込むで了ひました。つゞいて、その所夫の高間三郎も、腹を切つて死んで了ひました——これは、いやしくも武夫が、水に溺れて死ぬのを待つて居られるか、と、云つて、憤慨したのでした。

しかし、八町礫の紀平治だけは、素ッ裸になつて、まだ艦の方の小高いところに、頑張つてゐま

した。その大きな背には、舜天丸を、丈夫な布で、どんなことがあつても離れないやうに、く／＼りつけて、背負つてゐました。そして、いざと云へば、いつでも浪に飛込むやうに、大きな板子を一

枚、小脇にかゝへてゐました。舜天丸には、舜天丸の太刀をいよはせました、自分は、腰に、脇差だけ

を佩しました。「かたじけなくも、源氏嫡流の若君だ。海へなんか、お沈みになつて、たまるものか。」

紀平治は、堅く、さう信じてゐ

ました。そして、「若君、船が沈みましたら、爺と一緒に、泳の稽古を致しましう。面白うござりますぞ。」

と、さう云つて、舜天丸を隠しては、元氣をつけて、時々、眞ッ暗な空を睨むやうに見上げて居りました。

船は、もう一度、大浪をかぶつたら、ブクリと、沈むで了ひさうに沈みかけてゐました。けれど、紀平治は、落ちついて、なかなか浪に飛込まうとしませんでした。しかし、そのうちに、船はと／＼、覆つて了ひました。紀平治は、それよりも少し前に、すばやく浪に飛込みました。

紀平治は「石投」と共に、泳の名人でした。で、浪に乗つては沈み、沈むでは乗つて、板子一枚に、身をまかせて、するぶん、長く、泳ぎつゞけました。成べく體

を疲らせないやうにと、あらゆる術もつくしました。けれども、大浪と雨と大風と戦ふのでござい

す。それに、舜天丸をおぶつて、眞ッ暗な海を、あてもなく、浪のまに／＼泳ぐのです。紀平治とて、も、だん／＼に疲れて、だん／＼に手足がきかなくなつて來ました。いくら氣を張りつめても、手足が痺れたやうになつて了ひました。そして、つい、板子を浪に取られて了ひました。

「しまつた！」さう思つた時には、たよりにする板子が、もう手から離れて了つてゐました。

紀平治は、ハツとして、それで、反つて、いくらか勢がつきま

した。さうして、また少く夢中で泳ぎました。だん／＼、氣が遠くなつて行くやうでした。……するうちに、岩だか丸太だか解らないが、何んでも、ズルリとする物が手に觸れました。紀平治は、半分、夢中で、一生懸命に、そのズル／＼とする物に獅噛みつかうとしました。さうして、ズルリと滑つては、取りつき、取りついては、ズルリと滑つて、やつと、獅噛みついて、そいつに這上がつて跨りました……と、そいつが、ゆらくと動いて、進むやうでした。紀平治は、また氣が遠くなつて了ひました。

に、南へ南へと進むでゐましたが、進むにつれて、颱風の勢は、だん／＼衰えて行きました。少らくすると、浪の上が、チラと薄明くなつて來ました。浪も、だいぶ、靜になつて、風も、風ぎました。紀平治は、ふつと、我に返りました。不思議に、氣も、ハッキリしてゐました。そして、びっくりして了ひました。紀平治が乗つてゐたズル／＼した物——それは、すてきに大きな鰐鰯（沙魚）でした。鰐鰯は、人を喰ふ惡魚です。紀平治は、そいつの背に乗つてゐたのでした。

間が、きらく／＼と輝き出しました。そして、向ふの方に、青々した島が、旭に輝く、麗しい影を浮べてゐました。舜天丸は、ぐたりとして、死んでゐるのか生きてゐるのか、解らないやうになつてゐました。しかし、その體には、まだ温味のあることが、紀平治にも、よく解りました。鰐鰯は、紀平治等を乗せたまま、だん／＼、島の方へ涸いで行きました。島の近くには、二三艘の船が、高浪を乗りきつて、漁に出てゐました。程なく、この漁に出てゐる島の土人どもが、紀平治を見つけた。そして、紀平治は、不思議に無事に、島へ助上げられました。（つづく）



義齋大明神

鈴木木亨

水島爾保布畫

昔、攝津國の麻田村、義齋といふお醫者さんがありました。もう大分の年寄でしたが、どんな病氣でも治さぬと云ふことがないのと、良い藥を惜まず使つて、それでゐて少しもお金などを貰はないのですから、村の人達から大さう尊敬されてゐました。それに人の難儀を見通すことが出来る性質で、至つて貧しい人には、自分の方から米や薪を送つてやるとか、病氣のために財産を失した人には、資本を與へて生計を立てさせてやるとか云ふ風でしたから、みんな義齋先生／＼と云つてなじんで

ぬました。

ですから麻田の領主も、そのことを聞いて大さう
感心し、祿を與へて召し抱へてゐました。

二

ある冬のことでした。義齋は領主様が風邪をひい
たと云ふので、召されて診察に行きました。領主様
は義齋を見ると、大さう垢のついた着物をきてゐる
ものですから、氣の毒に思つて、

『義齋に何か良い着物をとらしてくれ。』とお側の
者に仰せられました。お側の者も義齋が好きなんも
んですから、早速領主様の着る綿の入った温い着物を
與へますと、義齋は無難作に直ぐそれを着て、領主
様を診察した上歸つて行きました。

義齋は自分の家に歸らうとする途中で、一人の年
とつた乞食に逢ひました。見るとその乞食は急病と
見えて、苦しうにうなつてゐます。義齋は可哀さ

うになつて来て、薬籠から薬を取出して乞食にやり
『この寒さに、こんな破れた着物では困るだらうか
ら、これを着たらい。』と云つて、たつたいま、
領主様から拜領して来た上着を脱いで乞食に着せ、
『明日もまた見舞つて上げるから、大事にしないで
はいけない。』といたわつて家に歸つて行きました。
その翌日のことでした。義齋は朝早く領主様を見
舞はうとして、昨日の道を通りかゝると、二人の領
主の下臣が病氣で悩んでゐる乞食を捕へて、太く打
つてゐます。それを見ると義齋は驚いて飛んで行き
ました。

『どうしたのだ。不憫さうに、病氣の乞食を打つな
んで……』

『何に、この乞食奴、領主様の着物を盗んで着てゐ
るから、いま打殺さうと思つてゐるところです。』

と云つて、かまわず擲つてゐます。義齋はそれを
聞くと、大さう濟まないことをしたと思ひました。

何故と云つて自分がそれを與へなければ、こんなこ
とになるのではないと思ひましたから。そこで昨日
自分が與へたのであると云ふことを話して、

『餘り寒かつたもんだから、下着を脱ぐのが臆怖な
ので、領主様からいたゞいた上着をやつたのだが、
それは私の失策で、決して乞食が悪いのではない。

それでは私の着物と取り替へたらいいだらう。』と
云つて、路傍で裸體になり、自分の着物を乞食に着
せ、自分は乞食の着てゐた領主の着物を着て、平氣
で領主様の診察に行つて了ひました。二人の下臣は
これを見てあつげにとられて了ひました。

三

義齋はこんな風でしたから、だん／＼領主様に仕
へるのが臆怖になつて来て、時々辭めると云つて訊
きません。が領主も惜しがつてなかく許さうとし
ません。そこで義齋はどうかして辭めやうと思つ

て、いろ／＼考へた揚句、病氣と云つていくら領主
から呼ばれても、行かすにゐました。そして四五日
してから、

『義齋は昨夜病死しました。』と下僕に届けさせま
した。

義齋はこれでもう安心だと、内々で歡んでゐます
と、下僕が歸つて来て、

『いま、檢視の役人が參ります。』と告げました。

義齋は俄に狼狽を出して、どうしたらいいかわから
なくなりましたが、不圖思ひついて急に棺箱を拵
へ、その中へ入つて死んだふりして坐つてゐまし
た。そこへ間もなく檢視の役人が入つて來ましたが、
もう棺に入れてあると聞いて、中を改めずに歸つて
行きました。

義齋はほつとしました。しかし、葬式を出さなけ
れば、どんなおとがめを受けるかもわからないの
で、急に葬式を出すことにし、そのことを下僕に傳

へました。村の人達も義齋の死んだことを聞き傳へて、大勢やつて来て棺を送つて火葬場へ持つて行き、火舎に入れて蓋を開けました。すると中から死んだ筈の義齋がひよこり飛び出して來ました。一同は幽霊ではないかと驚きました。義齋は、「私はいま閻魔王のところへ行つたところが、汝なんかくるところではないと云はれて、歸つて來たところだ。」と云ひながら、驚いて騒いでゐる村の人達を突き除け、火葬場を飛び出して、何處かへ行つて了ひました。

四

間もなく義齋は、麻田村から二三里離れた岡村と云ふところに居ることがわかりましたが、領主様はそこは他人の領分だからと云つて、咎めやうとしませんでした。

ところで岡村の人達は、義齋先生が自分の村に來

たことがわかったと、大さう歡んで、是非この村に永く住んでくれと云つて、みんなで家を作つてくれたり、家財道具を持つて來てくれたり、お米やお魚などを持つて來てくれたりしました。

義齋は、こゝでも貧しい村人達の病氣を見舞つてやつたり、困つてゐる人があると自分が喰べるお米をやつたり、着物をやつたりするので、こんどは領主から祿米を貰つてゐるのではありませんから、直ぐ困つて了つて、米屋とか、薪屋とか、呉服屋などに澤山の借金が出来て了ひました。

岡村の隣り村に奥新田と云ふところがあつて、そこに六右衛門と云ふお百姓の大金持がありました。

この六右衛門は金が小山のやうにあるのに、けちで、出すものなら自分の家の埃でもいやだと云ふ程のしまり屋で、そのくせ一人で威張りちらしてゐるもんですから、村の人達からひどく嫌はれてゐました。

ある

時この

六右衛

門は、

悪い病

氣にか

かつた

ので、

いろい

ろと手をつ

くしました

が少しも

驗目があり

ません。

それ

から良い薬

と云ふ薬を

取寄せて

飲んでみ

ましたが、

ちつ

とも良くな

りません。

六右衛門

の家では



目だらうと思つてゐるところへ義齋の噂を聞きました。それから早速使の者を出して、診察を頼みますと、義齋は直ぐやつて來てくれました。義齋は病人の容體を見ると、頭をまげてゐましたが、

「こりやもう駄目ぢや。」と、てんで薬をやらうとしま

せん。家の人は六右衛門が他の醫者からも見放されてゐるのだし、九分九厘生さられる望がなくなつてゐる場合だから、義齋の見立を聞いてがっかりして了ひました。

『どうしても駄目でせうか？』

『駄目だ。だが私にはこの病氣を治す秘法がある。』

それをやつて上げてでもいゝが、もし私がお前さんの病氣を治したら、お前は私にどんなことでもするだらうな！』

義齋は、こんどは變つたことを云ひだしました。

『どう云ふことでも、仰やる通りのことを致しますから、どうかお助け下さい。』六右衛門は命には代へられませんが、息も絶えぬに申しました。

『屹度だな。屹度私が云ふ通りのことをするな。それなら治して上げやう。』

義齋はかう念を押して、二服の藥を與へて歸つて來ました。

五

六右衛門がその藥を飲んで見ると、臭くてくても飲めさうありません。しかし命には代へられませんが、鼻をつまんで飲みますと、直ぐ心持が晴々として來ました。それから元氣がついて、毎日藥を飲んでゐますと、二十日餘りでけろりと全快して了ひました。

六右衛門は天へでも昇つた時のやうな歡び方で、直ぐ金子一兩を使者の者に持たせて、お禮だと云つて義齋のところへやりました。六右衛門は義齋と約束した時のことなどは忘れてゐました。

義齋は一兩の禮金を見ると、怒りだしました。

『六右衛門の命が金一兩とは安いものだ。そんなに安い命なら、私は澤山買つて置きたいから、一つわけてくれ。』と、使者の者に云つて、一兩の金を持たして返してやりました。

使者の者が歸つて行つてこのことを六右衛門に話しますと、六右衛門は約束したことがあるもんですから悪いことをしたと思ひました。それからどうしたものだらうという／＼考へた揚句、自分で出かけて行きました。

『このたびは私の命をお救ひ下さいまして、有難う御座いました。就きましてはどんなお禮を致しますたら、よろしう御座いますか伺ひに參りました。』と、申しました。すると義齋は、

『お禮と云つて別にむづかしいこともないが、私のところには米屋と藥屋に少しばかり借金がある。それを残らず拂つてくれ、ばい、のだ。』と云つて、別にむづかしい頼みでもないやうです。

それから六右衛門は、米屋と藥屋の借金を拂つて歩きましたが、かれこれ六十兩ばかりになりました。六右衛門は驚いて、義齋に話しました。

『お前さん一人の命が助つたばかりに、私のところ

へかゝつた貧乏人の命が二十も助つてゐるのだから、こんな功德はない。』と云つて平氣でゐました。義齋は、六右衛門がけちん坊なものですから、村の人達に代つてこらしてやつたのでした。

六

それからと云ふものは義齋の評判は、大したものです。まるで生神様か、生佛様のやうに云ひ振らすので、病人があると遠くの村からでもやつてくるやうになりました。それを聞いた麻田村の領主は、義齋が惜しくなりました。それから何とかして歸つて來て貰はうと、ある日二人の下臣を義齋のところへよこしました。

『領主様のいひついで參りましたが、領主様はあなた様をお慕ひして、是非お歸りが願ひたいと申して居ります。これから私共と一緒ににお出下さいませんか？』と丁寧な言葉で申しました。

義齋は、「またうるさい奴がやつて来た。」と思ひました。

「私は少し用事があるから、その用事をすましてから行くから。」と云つて、二人の使を一室に入れて待たして置き、そのまゝ何處かへ出て行きました。義齋の考へでは岡村もうるさいからまた遠くの村へ通れて行く決心だつたのでした。

使者の者は義齋をいくら待つてゐても歸つてくる様子がありません。夕方までも待つてゐたが姿も見せません。しかたがないのでそのまゝ領主様のところへ歸つて行きました。領主様もその話を聞いてあきらめて了ひました。

やがて近所隣の人も、義齋がゐなくなつたことがわかつたのですから大騒ぎになりました。それから何處へ行つたのだらうと、みんなで手別けして捜してみますと、刀禰山村と云ふところの知り合ひの家に、かくれてゐることがわかりました。岡村では

「是非歸つてきてくれ。」と云つて頼みましたが、どうしても歸るとは云ひません。村の人達もどんなことを云つても、歸ると云はないのですから、「それでは家財道具はどうしますか？」と尋ねますと、

「あれは村の人達に拵へて貰つたものだから、私のものではない。みんな村のものだからどうなりと勝手にしてくれ。」と云つて一向と合ひません。

村の人達もいろ／＼と相談した上、家や家財道具を残らず賣拂つて了ひ、又珍らしい薬なども賣つて、可也の金にし、それを義齋のところへ持つて行きました。

「私の捨てた家財を賣つた金は、私のものではないから、何か村のために使つてくれ。」

義齋はかう云つて、なか／＼聞きません。それではと云ふので、村の人達も持ち歸つていろ／＼相談をし、恰度その時貧乏な百姓で、田地を賣らうとし



て、買手がなくて困つてゐたものがあつたものですから、その金で田地を買ひ取り、貧乏な百姓に出来高の半分をやることにして、田地をつくらすことにしました。

ところが翌年になると、大した豊作で澤山の實入りでしたから、その半分の百姓に與へ半分の金に換へて、義齋のところへ持つて行きましたが、どうしてもとつてくれません。そこでしかたがないので、村の者が相談の上、酒や肴を買つて、村の老人や若いものを御馳走することにしました。みんなも、「それがよからう。」と云ふので、日を決めて御馳走になりました。ところが澤山御馳走があるもんで、それから、三日間も酒を呑んだり、歌をうたつたり、踊を踊つたりしてもまだつきませんでした。その翌年も、またその翌年も豊年がつゞいて、御馳走をしても金が残つてしかたがないもんで、それから、こんどは義齋を神様に祠することに、社を村に建て、義齋大明神と云ふ名前をつけ、毎年田地から上つた金の半分で、お祭をすることにしました。しかし義齋は、いつまでも病氣で難儀をしてゐる人や、困つてゐる人のためにつくしました。(おはり)



童謡

野口雨情選

(大人篇)

雀のお宿(賞)

名方 和郎 (大阪)

日暮りや

雀は

何處で寝る

雀や

河原の

竹藪さ

迷ひ子の

雀も

來てとまゐる

雀の

お宿は

竹藪さ

雀のおにごっこ(賞)

緒方 惟矩 (大阪)

學校通ひの

細道の

小笹ゆすつて

雀の子

雪をちらして

はちけてる

庭蟻

穴から

それ見てる

小雀

お屋根で

聞いてゐる

鳳仙花

それでも

はちけてる

うぐひす

阪野 義信 (大阪)

ホーホケキヨ

ホーホケキヨ

うぐひすアお背戸の

鏡の中

霜枯れ雀葉の

かげで啼く

ホーホケキヨ

ホーホケキヨ

うぐひすアお庭に

なせこない

お梅がつぼみで

まだこない

告天子

金森 武夫 (岐阜)

ちいちくちくちい

ちいちくちくちい

告天子が啼いてる

どこだい

すんすん高うなる

どこだい

ちいちくちくちい

ちいちくちくちい

お月さんもうし

村山俊太郎 (山形)

お月さん

もうし

何みてた

雁、雁ならんで

どこいつた

お月さん

もうし

何みてた

狐の嫁入

見えるかな

お月さん
もうし
いくつなの

お犬



十三七つて
ほんとかな

お犬

宮尾 進 (臺灣)

晝間も

ようとは 寝むらんに

夜通し

お犬は 目がかたい

晝間の あくびは

どこへやら

通る人ごつてに

ほえてゐる

お犬は

いつの間に

寝るのだらう

今夜も 夜通し

目がかたい



勇敢な少年樂手

四八

大戸喜一郎
寺内萬治郎畫

勇敢な少年樂手——
かう申し上げますと、皆さまは
きつと、あのナポレオンがイタリ
ーを攻めたときに、死ぬるまで進
軍の曲を打ちつづけた、勇ましい
少年鼓手のことを、想ひ起すでせ
う。ところが、私が申し上げよう
とするのは、そのお話ではないの

です。
ちやうど歐洲大戦争のときであ
りました。世界ちやうの國々は、力
をあはしてドイツの國を取りかこ
んで、一と攻めに打ち亡ぼさうと
思つて、ひし／＼と押し寄せて行
きました。ところがどうして／＼
ドイツは、なか／＼負けさうにも

ありませんでした。負けるどころ
か、あべこべに、攻めて行つた聯
合軍の方が、ともすると、打ち退
けられるといふ有様でした。おま
けに、ドイツの飛行隊は、非常に
勇ましくて、あるときはフランス
の都パリまで飛んで行つて爆裂
弾を落したり、あるときは遠く海

を越えて、夜の闇につけ入つて、
イギリスのロンドンまでも驚かす
といふ風でした。ですから、ヨー
ロッパの國々では、いつドイツの
飛行機が飛んで来て、恐ろしい爆
裂弾を落すかもしれないので、夜
は灯もつけしないで、まつ暗の中
に、不自由を忍んで、夜をあかし
てをりました。

ちやうど、かうして、ヨーロッ
パちやうの人々が、悪魔のやうにド
イツ、ドイツ、と叫んでゐるとき
でありました。ロンドンにある、
ある近衛聯隊の庭で、二人の少年
がヒソ／＼と話し合つてをりまし
た。二人ともまだ十三くらゐの少
年で、身にはまつ赤な服をつけて
をり、肩には金モールの房のつい

た肩章をのせてをりました。

「ねえ、ジム、いつたい僕たちの
聯隊は、いつになつたら戦争に行
くんだらうね。」

一人の背の低い方の少年がたづ
ねました。するとジムと呼ばれた
少年は、いかにも物知りらしい口
調で、かう答へました。

「駄目だよ、リュウ。この聯隊
は、何年にも戦争に行つたことは
ないんだから。」

「でも、ぐづ／＼してゐたら、負
けちやうぢやないか。それにね。
戦争に行かなければ、樂長さんに
だつてなれないつて。」

ジムは、かう聞いて、ふつと顔
を上げてリュウを眺めました。け
れども何の言も發しません。

樂長さんになる！これが、こ
の二人の一生の願ひだつたのであ
ります。ですから、樂長になれな
いといふことが、二人にとつて
は、どんなに悲しい言葉だつたか
しれないのです。樂長になれなけ
れば、行軍のとき、一番先頭に立
つて歩くことも出来ないのです。

教會へ行つたとき、立派な貴婦
人が、親しさうに話しかけてもく
れないのです。さう思ふと、二人
は、戦争に行けないといふことを、
を、どんなに情なく、どんなに悲
しく思つたかしれませんでした。
今日は郊外の聯隊に動員令が下
つた。ドイツの軍隊は、今にもパ
リを陥れようとしてゐる。さう
聞かたに、二人の少年の心はど

んなでありましたらう。

『今日こそ、今日こそ！』

さう思ひながら、日は、一日、一日とたつて行きました。

ところが、ある日の事でした。

リュウは大いそぎでジムのある部屋へ飛びこんで来て、いきなり手をつかまへると、ぐい／＼引っぱつて、いつもの庭の木のうへ、連れ出しました。

『いよ／＼出るんだ！』

リュウは、とつせん、かうどなりました。

『何ッ！戦争へ行くんだったて！』

『あッ！』

『萬歳！』

ジムは、をどり上がつて、叫びました。

戦争に行ける！樂長になれる！

いろ／＼な喜びに、二人の少年は暫くといふもの、手を取り合つて喜んでをりました。けれども暫くすると、ジムは、とつせん立ち止つて言ひました。

『それで、音楽隊も行くんだらうね。』

『そりやきまつてるぢやないか。聯隊の行く所へは、どこへだつてついて行くんだもの。』とリュウは得意になつて言ひました。そして心の中では、もう自分が打ちつづける大鼓の音に勵まされて、大せいの軍人が、突撃して行く勇ましい有様を想ひ浮べるのでした。けれどもリュウが、さうした考へにうつとりしてゐるとき、ジム

五〇

は、それは／＼大へんな事を想ひうかべたのでした。

『ねえ、リュウ。皆が行くぢやないやうに思ふよ。きつと幾人かがつれて行かれるだけだよ。』

この考へはリュウの氣持の好い想像をすっかりぶちこはしてしまひました。まつたく、ほんとの戦争に、十三くらゐの少年が行けるとは思はれないことなのです。

『うむ、さうかな。もし幾人かと言へば誰だらう。』とリュウはたづねました。

『第一に、あのトムの奴だ。彼奴は樂長さんの氣に入んなんだからな。』

『だが僕たちの方が、上手ぢやないか。』

ジムは答へませんでした。そしてちつと考へ込んでをりました

が、やがて何か思ひついたらしく、ふつと言ひ出しました。

『さうだ。トムさへゐなけりや、僕達が行くに定まつてるんだ。』

ジムは、さう言ひました。ジムの胸の中には、自分たち

だけが戦争に行けるために、早く樂長になれる

ために、いろ／＼な考へが、次々に浮んで來る

のでした。

『ねえ、リュウ、お前は戦争に行きたいんだらう。』

『そりや行きたいさ。』

『ぢやあね、いゝ事があるんだ。あのトムさへゐなけりや、僕たち

が行けるに定つてゐる。そこでね。あのトムを動

けないやうにするんだ。

く。僕は後から組みつくから、お



ね、いゝだらう。二人で押しかけて行前は前から、かゝれ。そして引き

五一

倒しておいて、蹴るんだ。それもあんまりひどくなく、手か、足にちよつと怪我をさせればいい。さうすれば、トムは奴は動けなくなつて、僕たちだけが、行けるんだ。ね、いゝだらう。」

リユウは、この飛んでもない考へに、暫くといふもの考へこんでをりましたが、人に少し位怪我をさしても、お國のために戦争に行けさへすれば、十分罪は消える、さう考へたのでした。そこでさつそく賛成して、二人は、手を取り合つて兵舎の方へ駆けて行きました。

けれども、國を愛するあまりに二人が考へ出したこの悪い企らみも、實行しなくとも好くなりま

した。

二人がちやうど庭を出ようとする時、向ふから聯隊長が歩いて來たのでした。何か考へこんで、靜かに歩いて來ます。

これを見たジムは、何か考へたらしく、急に駆けるのを止めて、聯隊長の近づいて來るのを待つてをりました。が、やがてつか／＼と歩いて行きました。そして聯隊長の前、二十ヤード位のところで立ち止り、また四歩あゆみ寄つて、擧手の禮をしました。

聯隊長は、ふいに現れた二人の少年を見て、笑ひながら、禮を返しました。そして、

「何か用かね。」と言ひました。

「ハイ、閣下。聯隊に動員令が下

りました。」

「うむ。さうだよ。それで……」
「私たちも是非行きたいのであります。」

二人は、聲をそろへて言ひました。

「ホ、オ。行きたい。だがお前たちは、行軍中に死んでしまふよ。」

「そんな事はないと思ふのであります。あのトムこそ、心臓が弱いんですから、死ぬのであります。私たちは今まで一ども病氣したことはないであります。ですから戦争に行つても決して病氣しないと思ふのであります。」

聯隊長は、ちい／＼と考へこみました。そして暫くしてから、言ひました。

「お前たちは兩親があるのだらうね。」

「いゝえ。私たちは二人とも孤兒であります。私たちがどうならうと、心配する者は、一人もないのであります。」

「ほう。それで、どうして行きたいのかね。」

と聯隊長も二人の熱心に動かされて、言ひました。

「私たちは、もう二年軍隊に在るのであります。軍人の務めを果さないことは、悲しいことであります。」

「よしッー 行けッ！ きつと連れてつてやる。」

二人の少年は、この言葉をきいて、どんなに喜んだかしれませ

ん。それでも聯隊長の前ですから靜かに擧手の禮をすると、大いそぎでその場を立ち去つてしまひました。

けれども二人が部屋へ入つたとき、その喜びは急に爆發しました。二人は仲間の少年たちに向つて、自分たちだけが戦争に行くのだといふことを大威張りで叫んだのです。他の少年たちは、どんなに羨んだことぞう。どんなに二人に先をこされたことを、口惜しく思つたことぞう。

かうして二人の少年は、聯隊といつしよに戦場に行く事になつたのでした。

二人の少年は、大せいの人々に見送られてロンドンの停車場を立

つたことを、また大きな汽船に乗つて海を渡つたことを、決して忘れることはできません。それからいく日もの長い汽車の旅は、どんなに楽しかつたぞう。至る所で人々は萬歳を浴せかけるのでした。その度ごとに二人の少年は、自分たちだけに挨拶してゐるやうに考へては、胸ををどらしたので

たうとう汽車は、最後の停車場につきました。見渡す限り廣い廣いフランスの平野です。そして果ての方に、國境の山々が見えてをります。負傷して戦場からかへつて來る勇士たちや、食べ物や積んだ車や自動車、ひつきりなしに行き交つてをります。その中で、

少年たちの聯隊は勢揃ひをして、いよいよ戦場に向つたのでした。まだ春の始めで、寒い風があたりを吹きまくつてをりました。それでも人々は戦ひに行くのだといふ心で、勇み立つて進軍をつづけたのです。少年の打つ太鼓の響きは、笛の音は、氣もちよく他國の空に、響きわたつたのでした。勇ましい樂の音！ 劍の閃めき！ 規則正しくそろつた靴の音！ おゝ、もうそれだけでも敵の膽をひしぐに十分なのです。けれども今は、命のやり取りをするほんとの戦争でした。美しい平和なロンドンの町を練つて歩くのとは、くらべものにならない苦しさ、待ち設けてゐたのです。



五四
二少年の入つてゐる聯隊が、戦線についたのは、その日のま夜中でありました。と、同時に、明朝、夜明けを期して高地に據つた敵を撃退せよといふ命令が傳へられたのでした。まだ着いて間もない近衛聯隊でした。かなり疲れてはをりました。それに夜明けまでには、もう幾時間もありません。それでも勇士たちは、元氣に溢れて、夜の明けるのを、待ちかまへてゐたのです。やがて東の空が次第に白みはじめました。人々はそれを見つめながら、進め！ の命令の來るのを、今か今かと待ち構へてをりました。と、とつせん、進め！ の樂の音が靜かな朝霧の中から、響

いて來ました。それといつしよに、忍びやかな人々の氣配がしました。待ちかまへてゐた人々は、我れ勝ちに、進みはじめたのです。けれど悲しいことに、この進軍は、命令された時間よりは十分早いのでした。ですから近衛聯隊が残らず進み出たときにも、聯合軍の兵隊たちは、ちつと動かなかつたのです。



まだ昨日ついたばかりの近衛聯隊です。戦ひに慣れてゐる人々は

一人もをりません。その慣れない、僅か一ヶ聯隊が、群がる敵の中に進んで行つたのです。これが開いてゐる獅子の口の中に飛びこんで行くのと何の變りがありませう。ほとんど一哩ほど進軍したときであります。立ちこめてゐた霧は次第に消えて行つて、眼の前には、思ひもかけない有様がひらけはじめたのです。右と左とは、高い丘になつてをります。そして近衛軍の進んでゐる道は、その間にはさまれた平たい所なのです。もし敵がこの丘にゐたとしたら、それこそ近衛軍は全滅しなければなりません。幸ひ敵のゐる高地は、その丘の盡きるところです。けれども、陽

が上がつてしまった今となつて、こんな平地に身をさらしてゐるのは、どの位危険だかしれません。と言つて今さら退くことが、どうして出来るでせう。その中にも、空を破るやうな大砲の音は響き出しました。やがて、機關砲の響が機關銃の音が、氣短かな音を立てはじめました。

けれども、どうしたといふのでせう。近衛軍がこんなに射撃してゐるのに、敵の歩兵は一向に發砲しないではありませんか。お、勇ましい。近衛軍の勇士たち！ いく足か進んではびたりと身を地面に横へながら、突き進んで行くその姿！

と、お、！ それまで姿さへも見せなかつた敵の歩兵が、まるで地からでもわいて出たやうに近衛軍のまん前に現れたではありませんか。バツと煙の帯が湧き上がりました。と思ふと、突撃にうつつたのです。穂さきをそろへたドイツ兵の銃剣が、朝日に閃きながら上つて來ます。恐ろしい叫び聲が、空を振はします。でも、今ま

ドイツ軍は敵があんまりすぐ逃げ出したので、伏せ勢があると思つて追ひかけるのを止めたのです。けれどももごらんない。ちやうど敵と味方のまん中に、二つの小さな姿が動いてゐるではありませんか。お、勇ましい進軍の大鼓の音が響いてゐます。突撃の笛の音が響いてゐます。勿論逃げ遅れた二人の少年、リュウとジムです！

二人は逃げて行く味方には眼もくれず、相變らず敵軍目掛けて歩みつゞけてゐるのです。その大鼓の打ち方は、笛の吹き方は、いつもとちつとも變らない落着きつたやり方です。しかも奏でてゐるのは古い近衛軍をほめたゝへた軍歌の一節です。どんな弱い兵隊もそ

の音を聞けば奮ひ起つほどの勇ましい軍歌です。その音が靜かに靜かに流れてゐるのです。暫くといふもの敵も味方も鐵砲一つ打たずに、二人の少年の音楽に聞きほれてゐるらしく思はれました。逃げて行く近衛軍の人々に、この樂の音がまあ何と響いたこととせう。お、！ ごらんない、引き返して來ます。逃げてゐた近衛軍はくるり向きをかへて、突撃に移りはじめたではありませんか。第一の一齊射撃が、近衛軍から始められました。

と、何といふこととせう！ 今まで大鼓を打ちつゞけてゐたリュウの姿が、こころ、うつ伏せに倒れたのです。いつしよにジムは、



幼年詩

編輯部選

川(賞)

京成日出
校(尋三) 河野 浩

川がとけた
お舟が
ういてる

梅(賞)

東京東盤
校(尋五) 鯨井卯太郎

梅がぼつとり
さいてたよ
雪がちいらり

ふつてたよ

てんき(賞)

山形盛澤
校(尋三) 山川 忠

てんきがくものすを
にらんでゐます
てんきがくものすを
にらんでゐる

暖い日

京成日出
校(尋三) 河野 浩

今日は少し
暖い
何だか櫻が
さきさうだ

にはごり

福岡矢部
川(尋四) 下永シヅ子

雨が

やんだら

にはとりが

ないたよ

一年生

千葉馬橋
校(尋五) 大川 ふみ

一年生はかはいせいと
おかつばさんを
ふさふささせて
廊下をかけて行きました

やなぎ

熊本荒尾
北校尋三 海達 公子

めの出た
やなぎ
かるさうに
ゆれてゐる

五八

さしや

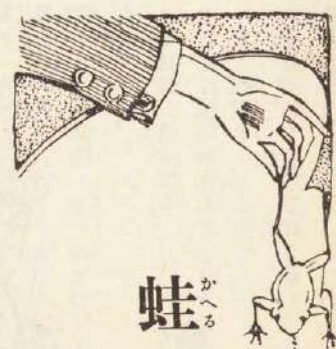
山形盛澤
校(尋三) 遠藤松次郎

ぼつぼつぼつ
さしやとほる
りんご田のかけ
さしや、さしや、さしや

お正月

秋田外旭
校(尋六) 小野 みや

若者は
お正月来たとして
あちらの家から
こちらの家へと
巻煙草を
ばく／＼させて
あゝいてる
お正月



蛙ものがたり

花村 浩 六

柳田 謙 吉書

スマイリイと云ふ男は、なるほど變チキリンな男
でした。人の顔さへ見れば、
「一番賭けやうちやないか。」
と、きつと來るのです。相手の氣なんぞ構つち
や居られない。そして終ひには、
「——ちあ、僕が君の側へ賭けるから、やらうや。」
と云ひ出して離さないのです。どつちがどつち
になつたつて構はない、賭さへ出來れば上氣嫌なス

マイリイでした。この男、どう云ふ譯かズバぬけて
運のいい男で、大抵の場合は勝つのでした。ですが
年百年中、賭ならいつでもござれと、手ぐすね引
いて待つてゐるのです。——スマイリイにかゝつ
ては、目に付く物、耳に入る話、なんでも、賭、
賭、賭、でした。——
若しも、競馬場でスマイリイの姿を見かけた人が
あつたら、それは札びらを切つてるスマイリイか、

でなきや素寒貧になつてゐるスマイリイに違ひありません。犬の噛合ひがある、ソラ賭だ。猫の喧嘩だ、ソラ賭だ。鶏が蹴合つてゐる、ソラ賭だ。それどころか垣根に鳥が二羽

とまつてゐても、どつち

が先きに飛

ぶ？ 右の

鳥か、左の

鳥か、サア

賭だ。と云つた

有様でした。

草鞋蟲が這つてゐる

のを見つけたスマイリイは、早速、

「此奴が行く所まで行き着くには、何時間かゝるか賭をしやう。」



と云ひ出しましたが、さすがにこればかりは相手になる者はありませんでした。何故と云つて、相手になつたが最後、草鞋蟲が歩いて行く限りメキシコ迄だつて

ついて行く

くんだか

ら堪りま

せん。

或時、

町の牧師

さんの奥

さんが病

氣になつ

て、今度

はとても助かるまいと云ふ噂がたちました。

ある朝、スマイリイは牧師さんに出會つて、御見舞を云つた迄はよかつたですけど、牧師さんが、

「大變によくなりました。神様のお恵みに浴して、家内は間もなく全快するでせう。」

と答へるすぐその後から、

「では、私はお助かりなさらないものとしてサア賭けませう。二弗半。」——と、もうこう云ひ出すのでした。

スマイリイは、又、小さなブルドックを持つてゐました。見たところ、間ぬけ面の能なし犬でしたが、いざ、喧嘩となると、まるで別物でした。下顎を船のやうに突き出して、齒はまるでお神樂の金具のやうにピカ／＼光つてゐました。併し、一寸見たところでは、これんぼちの小犬位、どんな弱い犬が相手になつたつて、手もなく噛み伏せる事が出来さうでした。アンドリユー・チャクソンと云ふのがその小犬の名前でしたが、名前だけは一人前でも、わけもなく相手の犬に嚇されたり、噛まれたり、幾度も幾度も突つところがされたり、打のめされたりする

のでした。けれども、アンドリユーの奴一向平氣なものでした。かう負かされるのがあたりまへだと諦めたやうな顔をしてゐるのです。だもんだから相手方の賭金は二倍になり、三倍になり、終ひには持金みんな賭け切りと云ふ乗るか反るかの大賭になるのでした。するとだしぬけにアンドリユーは相手の犬の後足の真中どこかに噛みつくのです。噛みついたが最後、槍が降らうが、蛇が落ちやうが、決して放すものではないのでした。

スマイリイの大將、この犬では何時も勝ちました。

が、或る時、機械鋸で切られて、後足のない犬と立ち合せた事がありました。アンドリユーは、例の通り、有金全部賭け切りと云ふ所まで來たのを見て取り、得意の急所を狙ふ早業に移りましたが、これはしたり、相手の犬には肝腎の後足がないのでした。勝手が違つて拍子抜けのしたところを、アンド

リユーは散々にやつつけられて負けてしまひました。そして「旦那、うらめしい。此方の得意は後足なのに、その後足のない片輪と立會はせるなんて、なんと云ふ事です。」と如何にもうらめしさに、負けたアンドリユーはスマイリイを見上げ、二三歩ヨロ／＼したと思ふと、可哀さうにそのまゝ倒れて死んで仕舞ひました。

此のスマイリイの奴さん、テリアでござれ、軍鶏でござれ、雄猫でござれ、何んでも持つてゐるので始末に負へませんでした。

或る日、スマイリイの大將、蛙をつかまへて來ました。

「大いに仕込んでやる積りだ。」

——それから三箇月の間と云ふもの、飯を食ふのも忘れて、裏の庭で蛙に「跳上り」を教へ込んでおりましたが、いつの間にかたうとうものにして仕舞ひ

ました。尻をちよつとつツつくとドウナツツを放り上げたやうにびよこんと飛び上つて、そこでひよいと見事に宙返る。落つちて來ても、猫と同じで、ちつとも怪我はしないのでした。スマイリイは得意になつて、今度は「蠅捕り」を仕込みました。

「蠅だよ。ほら、蠅だよ。ダンル（蛙の名）ほら。」と云ふと、ダンル先生眼玉をぐりつとさせると同時に飛び上り、そこいらぢゆうの蠅共をまるで仇討でもするやうに捕りつくすのでした。そしてどさりと重い音をさして土の塊みたいに床へ落ちて來るのでしたが、格別な自慢顔もしないのでした。キョトンとした顔つきで、前足で横髪のあたりを撫でて居る。ダンルを實際に見て驚いた人々は、

「あれだけの藝を持つてゐて、あんなに勿體ぶらない、おとなしい蛙も、滅多にないもんだ。殊に幅飛びなんぞは天下第一品だ。」

又、方々の國々を旅をして來た誰れ彼れが一樣に

「全くこんな蛙は始めてだ。」と云ふのを聞いても、

スマイリイは自慢で自慢でなりませんでした。

スマイリイは蛙のダンルを小さな鳥籠に入れて大事にしてゐました。そして時々この秘藏の鳥籠を提げては町へ出掛けて行きました。勿論、賭をするために——

或日、

「その籠は何んだね？」

そう云つて籠を覗いたのは、つい見たこともない旅の男でした。スマイリイは態々張合ひのない顔付をこしらへて、

「鸚鵡か、それともカナリヤか——と思つたら當違ひ。さうぢやない、たゞの蛙さ。」

聞いて旅の男は、眼をバチツカせ、改めて籠の周圍をぐる／＼廻つて居ましたか、

「うむ。本當だ。違えねエ。——だが物好きにも何んだつてこんな蛙なんか大事さうに飼つておくんだ

い。」

「それかい。」——スマイリイは春の風のやうに氣輕にポケットに手をつ突つ込んだ儘答へました。

「そいつにや、たつた一つ能があるんだよ。飛びつこをさしたら、此奴に勝つやうな蛙は、恐らく此の廣いアメリカには一匹も居ないて。」

旅の男は感心したやうに籠を取上げて、暫くはしげ／＼と眺め込んで居ましたが、

「それにしては、一向他の蛙と變つた所も無いやうだが……」

「何をお前さんは云ふんだね。分りもしないで。一體お前さんは蛙の鑑定はつくのかね。どつち道、俺は嘘は云はない。此奴以上に飛べる蛙が、若しも此のアメリカに居たら、居たら早速賭ける。四十弗がとこ賭るがナ。」

旅の男は腕を組んで考へ込んで居たやうでしたが、やがて本意なさうに呟きました。

「俺は旅の者だから、蛙は持つて居ないが、若しどんなのでも手に入れば、こいつは是非一番賭けるところなんだがナ。」

スマイリイは聞洩しませんでした。

「よしきた。おやすい御用だ。お前さんさへ此の蛙を番して呉れりや、お前さんのを一匹つかまへて来てやらう。ちやあ一寸待つて。」

そこで旅の男は籠をあづかり、スマイリイの四十弗と、自分の四十弗、合せて八十弗の賭金をそこへおいて、スマイリイが、もう一匹の蛙をつかまへて来るまでちつと待つて居ました。

待ちながら旅の男は、獨りでくすくす笑ひをして何か考へ付きました。見てゐると籠の中から、スマイリイの蛙を引っぱり出して、無理に蛙の口をこち開け、鶉散弾をいっばい匙ですくつては、何杯も何杯もダンルの腹の奥から臍まで詰め込んだのでした。

——スマイリイは沼の中へ入つて、泥まみれになつて、たうとう一匹の蛙を捉へて戻つて來ました。

「さあ、お前さんの蛙と此のダンルと並べた。前足を揃へて。では、俺が號令を掛けやう。」

——ワン——ツウ——スリイ——

スマイリイも、旅の男も、おの／＼自分の蛙の尻を一生懸命つツ突きました。すると其時、ビーンと威勢よく跳んだのは、彼の有名なダンルではなくて、新米のはや／＼蛙でした。ダンルはと見れば、ふふふと腹をふくらませ、フランス人みたいに弓のやうに肩だけは張つても一向ダメでした。後ざすりすら出來ません。まるで教會堂のやうに堅く突つ張つたまゝです。

面喰つたのはスマイリイです。これ迄一度だつてこんな事はなかつたのに、これは又どうした今日の風だらう。まるつきり分りませんでした。

旅の男は賭金を懷ろに收めて、さつさと立ち上り

ました。そして頭をひねつて、も一度思案するやうに呟きました。

「どうも一向外の蛙と違つた所も無いやうだが……」

スマイリイは頭を掻き乍ら、長い間、只ボンヤリ



と動かないダンルを見詰めるばかりでした。

「どうも得體が分らない。さら／＼合點がゆかないどうして此のダンルが負けたんだらう——どうかしてるんかな。ダンル恐しく膨れてゐるやうだが。」

で、スマイリイはダンルの頭筋のところを持つて、吊るし上げてみました。

「ややッ、これは又どうした事だ、重い何んのつて、一貫五百匁もあらア！」

獨り言を云ひながら、試しにダンルを逆さにしてみると、口からざら／＼と片手に一杯になるほどの散弾を吐き出したことでした。大將、うま／＼旅の男に一杯も二杯も喰はされたことを初めて知りました。——スマイリイは西半球が陥没するばかり地團駄踏んで口惜しがりましたが、ハツと氣付いてダンルをそこへ叩きつけるが早いか、旅の男の後追つ掛けました。が、もう、駄目でした。野と山があるばかりでした。(をばり)

紅い汗青い汗

古宇田 傲太郎
寺内 萬治郎 畫



あるお医者さんと、熊さんの對話。熊さんは魚屋さんです。

熊「え、今日は。今日は。」

熊「お、誰れかと思つたら熊さんか。暫く見えなかつたね、さアさアこつちへお上り。」

熊「へえ、ありがたうございませう。では御免蒙りまして……。」

「熊さんは汗を拭き／＼上つて参りました。」

熊先生。暫くお目にかゝらない間に、めつさり暑くなりましたですね。かう暑くちややりきれやしません。」

熊「元談云つちやいけません、何が見事なものですか！ 私は一體

汗つかきの性で、腋の窩から脊中

から、ぐつしよりなんです。氣持が悪くて仕方がありません。先生、なんとかその先生の妙術で、汗の出なくなる法はないもんでせうか。」

熊「汗の出なくなる法？ 六ヶし

い事を云ひだしたね。そりや無い事はないがね。併し、そんな事をしたら身體に毒だよ。」

熊「身體に毒ですつて？ そりや又どうしてです。」

熊「その譯は六ヶしいがね、まア一通り話してあげやう。お前さん聞かい？」

熊「伺ひませう、私はさう云つた話を聞くのが大好きなんです。」

「熊」ちやア話すから、よく聞いて

おいで。」

熊「聞いてゐますよ。」

熊「えへん。」

熊「えへん。」

熊「一體、汗と云ふものは何故出るか、それから話すことにしよう……」

人間は三度／＼御飯を食べる。

その食べた御飯が胃へ這入つて消化され、身體の滋養分となるのであるが、その滋養分になつた残りの物は、大便小便となつて、身體の外へ出されるのです。え？ ナニ？ それくらゐの事は知つてゐる

つて？ それはあらいい！ だがね、その不用の物質は、全部、大便や小便となるのではないんです。その中の幾部分は、皮膚の表面から、

水のやうになつて、にじみ出るのです。これが汗と云ふ奴です。ホラ、熊さん、一寸この圖をござんなさい。これは、人間の皮膚を縦に切つて、その切り口を見せた所です。

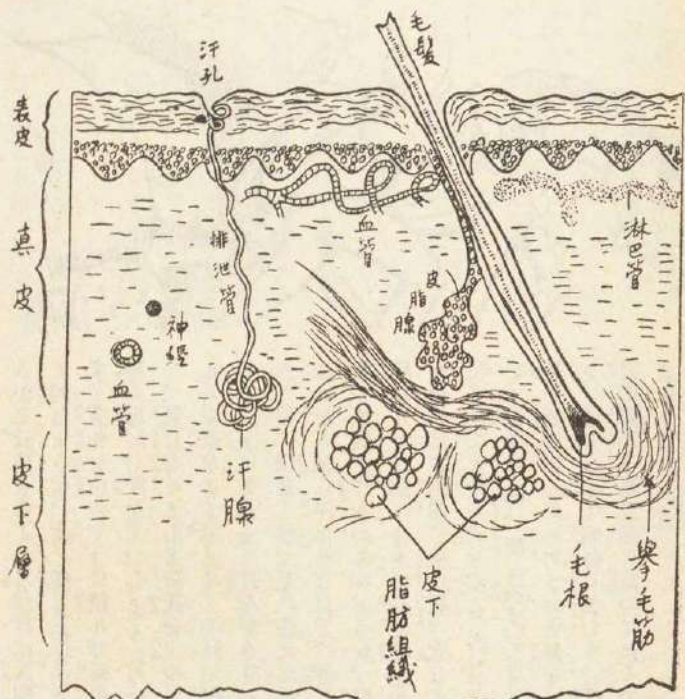
圖の示す通り、人間の皮膚は、

「表皮、真皮、皮下層」の三つの部分から成り立つてゐます。真皮と皮下層の境目の所に、汗腺と云つて、蛇がトグロを巻いたやうなものがあるでせう。こゝで造られた汗が、排泄管を通じて、皮膚の外へ出るのです。」

熊「へえ、氣味の悪いもんですね。私の皮膚は、そんな汚いもんぢやありませんせ。スベ／＼の上等ですせ。」

「熊」ちやア話すから、よく聞いて

(面 断 縦 の 膚 皮)



「体の熱がとれるのです。水が身体の外へ出る時に、熱と一緒に持って行つてしまふのです。ですから、夏、暑くなつて来ると、我々の知らない間に、自然と汗が多く出て、体温を調節してゐてくれるのです。つまり、汗と云ふものは、二つの大きな役目を持つてゐる。その一つは、
 『身体の中の不潔物を外へ出す。』
 もう一つは、
 『体温を調節する。』
 この二つの大きな役目を持つてゐるのですから、汗と云ふものも中々馬鹿には出来ません。さて、これは人間に就いてのお話ですが一般の動物に就いてはど

「暑いや、誰れだつて同じことです。ところで、その汗の中には、どんな物が含まれてゐるかと云ふと、第一に尿素、それからアシモニア、尿酸、食鹽、中性脂肪、脂肪酸、クレアチニンと云ふやうな、汚い／＼ものが這入つてゐる……」
 「熊、ちよ、ちよ、ちよと待つて下さい。そう立て續けに云はれたつて分りやしない。えーと、第一に、妙素、それからアンバンヤ……」
 「アンバンヤぢやない、アンモニアだ。……ところで、さう云ふ不潔物は、身体の中に貯めて置いたつて、何んの役にも立たない。かへつて害をするばかりだから、

どん／＼身体の外へ出してしまつた方がいゝのです。だから、汗が出るのが厭だから止めてくれなどと云ふのは、大馬鹿です。汗はどん／＼出した方がよろしい。どうです、熊さん、分りましたか？」
 「熊、分つたやうな、分らぬやうな……だがね、先生、一つ妙な事がありますよ。そんなに汗が出た方がいゝのなら、冬の寒い時はどうするんです。冬は、ちつとも汗なんか出やしませんせ。」
 「熊、なるほど、いゝ所へ考へつた。熊さんも中々偉い！」
 「無偉いでせう。私はね、かう見えてもね、……」
 「まア、自慢はあとで聞くとして、何故、冬になると汗が出なく

なるかお話しませう。
 汗の中には、百分中九十八分まで水分が含まれてゐて、その水分が身体の外へ出る時には、それと一緒に体温を奪つて行つてしまふのです。ですから、冬寒い時に、汗が澤山出るようでは、益々身体が寒くなつてしまひます。我々を造つた神様は、その所を考へて、冬はなるべく汗をかかないやうにしたのでせう。汗が出ると、何故、身体が温かくなるか、それは我々が風邪をひいた時よく分ります。我々は風邪をひくと、アンチピリンだの、ヘブリンだのと云ふ風邪薬を飲むでせう。あの薬をのむと、グツン／＼汗をかきます。あの汗をかくために、身



うかと云ひますと、馬だけは人間と同じように、よく汗をかきまゐる。荷物を山のやうに積んだ荷馬車の馬が、汗をぐつしよりかい、氣息奄々として坂道を上つてゐる光景をよく見ます。それに較べて、牛はあんまり汗をかきません。猿、猫などは、毛の生えてゐない足の趾に汗はむだけで、豚に至つては、汗をかくかどうか、疑問になつて居ります。全く汗をかかぬのは、山羊、兎、鼠、犬などです。ですから犬をこらんなさい。犬は暑い時、汗を流すかはり、長い舌を出してハア／＼と息を吐き、水分を早く体外に出して、體温の調節を無意識に計つてゐるではありませんか。

併し、この汗もあんまり多く出過ぎるのは、病氣の一つで、醫學上ではこれを「多汗症」と云ひます。たとへば、全身的に虚弱な人、結核性の人、神經過敏、ヒステリー性の人などは、汗が多く出過ぎる事があります。これと反対に、汗が少なすぎる人、或ひは全く出ない人がありまして、これは「發汗缺乏症」と云ひます。糖尿病、癌腫、老人などは、時々この缺乏症になる事があります。どうです、熊さん。面白いですかね？」

「こらんなさい、先生。私の額を……この通りの汗です。」

「『おやッ！これは妙だ。これは不思議だ。熊さん、お前さんの頭から、黒い色をした汗が流れてゐますよ。ハテナ？』」

「『えッ、黒い汗？……成程、ほんとに黒い。』」

「『あ、分つた！熊さん、貴方、白髪ぞめをつけてゐるんですね。白髪ぞめを……その色が汗で流れだして來たんですよ。ハハ、ハハ、こりや可笑しい。熊さんは年の割に髪が黒いと思つてゐたが、なんだ、白髪ぞめをつけてゐたんですか。』」

した。面目次第もございませぬ。」

「『ハハ……いや、その黒い汗で思ひでしたが、色のついた汗の出る病氣があります。色汗症と云つて、赤だの、青だの、黄色だの、色んな色の汗が出るのです。ペスト、黄熱などの熱病にかゝつた時、汗が赤くなる事があります。これは、汗の中に血が混じるためです。又、黄疽と云ふ病氣になると、黄色い汗が出る事があります。癰、疔を病んだ時、腫物の中へピオチアネウス菌と云ふ微菌が這入つて、その菌が産生した色素の爲めに、青い汗が出る事があります。』」





薬としては、亜鉛華、滑石、澱粉を、各々同じ分量にまぜ合せて、それを絶えずふりかけるようにしたらいいでせう。この薬は、薬種屋へ行けば賣つてくれます。」
 熊「先生の所に出来合ひはありませんか？」
 醫「あります。さア、これです。これを一箱あげませう。」
 熊「ありがたうございます。頂戴します。では、先生。今日はこれで失禮致します。」
 醫「まア、よいではないか、熊さん、そんなに急がないでも……今、水でも取るから……」
 熊「え、でも今日はゆつくりして居られませんか。早く家へ歸つて、この汗とり粉をつけてやりま

せう。可哀さうに泣いてゐるかも知れない……では、先生、ごめんなさい。」
 (熊さん、アタフタと出て行く)
 熊「熊さんは、子供の事となると、夢中になつてしまふんだね……」
 (熊り言な云つてゐる處へ、又熊さんが歸ってくる。)
 熊「熊さん、どうした、忘れものか？」
 熊「へえ、先生、どうも済みません。あんまりあせつたのですから、先生の靴を穿いて來てしまひました。」
 (をばり)

かり食べてゐたところが、到頭しまひに、皮膚の色が黄色くなつてしまつたさうです。又、或る所に、西瓜を澤山食べる人があつて、その人の腋の下から赤色の汗が出て、シャツや、下着が赤く染まるものですから、血と間違へられた事がありました。
 又、汗の色には變りがなくて、その性質が變つてくる病氣があります。俗に云ふ腋臭で、夏季になると殊に甚だしく、主に、腋の窩に悪臭を放ちます。西洋婦人には、腋臭に以た一種特有の臭ひがあり、印度人又亞弗利加の黑人にも、その人種獨特の臭ひがあり、葱、韭、胡のやうな臭氣の高い食物を食べる人には、また其の汗に

その臭を移します。これらを總稱して、醫者の方では、臭汗症と云ひます。小供の乳臭き、婦人の女臭き、爺いやおやち臭き、此等は病氣とまでは云へますまい。」
 熊「魚屋の魚臭いのは病氣ですか？」
 醫「そんな病氣はありません。」
 熊「あのー先生。一寸伺ひますが、私どもがはん臺に一杯魚を入れて、坂道をエツチラオツチラ上つて行く時、額のところからネチネチした汗が出てきますが、あれは何んと云ふ汗でせうか？」
 醫「それは、膏汗と云つて、困難な仕事をする時出るものです。その中には、バルミチン、ステアリン、コlestリンなどと云ふ脂肪

が含まれてゐます。膏汗は實に、神聖なる勞働の尊い結晶であります。我々のやうに机にばかり嚙りついてゐる者には、そんな汗は出たたくても出やしません。」
 熊「ちやア、先生より私どもの方が偉いといふ譯ですね。」
 醫「イヤ、マア、ウン、さうだ。」
 熊「なんて妙な返事をなさるんです。ところで先生、うちの一番下の子供が、この頃あんまり汗をかいたので、アセモが出来て困つてゐるんですが、何かいい薬はありませんでせうか？」
 醫「さうですね、アセモが出来たら、なるべくそこを掻かないやうにせねばなりません。掻くと濕疹になつたりしますからね、そして

スピートレスキ

大木雄三

岡本歸一畫



ビエールが、ある日、學校から

泣き顔をして歸つたのを見た兄さんのフランクは、大へん叱りつけました。

「何といふ弱虫なのだ。また喧嘩して負けたのだらう、意氣地がないね。兄さんなんか、生れてから一度だつて、他人に負けたことなどありやしないよ。」

「だつて、僕、だつて。」

ビエールは、赤くなつてゐる目の周囲を撫でながら言ひました。

「だつてぢやないよ。確りしてお呉れ。兄さんなんか、今日の仕合にもきつと勝つて来るよ。さうだ、お前も見においで、すこしは元氣が出るよ、はは、は、は。」

フランクは笑ひながら、むくむく力瘤の盛り上つた兩腕をウンと突張つてから、鐵のやうに丈夫な胸をドシンと叩きました。

ビエールは、くりくりと目を動

かしながら、

「いゝな、兄さんは強くて。」

と、羨しさうに言ひました。

「はは、は、は、でも今日は油斷出来ないよ。」

「ジョウツて人、そんなに強いのだ。」

「うむ、これまでに有名な拳闘家を何人も倒してゐるのだからね、それにあの男は馬鹿力があるといふ話だよ。」

「だつて、兄さんだつてすいぶん力があるでせう。」

「それはさうだ。お前のやうな弱虫や拳闘はやれないからね。」
そこで、ビエールはまたもとの泣顔に戻つて、長い睫毛をしばしばつかせました。フランクは面白さ

うに、

「さあ、泣くのはやめておくれ、兄さんがいけなかつたな、氣嫌を直して、競技場へ一緒に出かけやうぢやないか、ねえ。」

と、言ひました。

ビエールは黙つて合點さしました、がその時、大きな涙の粒がひとつ、ぼろつと手の甲へ落ちたのです。

ビエールは、ほんとに弱い少年です。自分でもそれが残念で、いつも強くなりたいなりたいと思つてゐるのです。それにひきかへて、兄さんのフランクは普通の人、何倍も強いのです。力は二十人、力もあるし、身体は大きくて立派だし、その小さい時から拳闘を

練習したので、いまではどこを探しても相手になる者があるまい、といふ世間の評判でした。

「兄さんのやうに強くなりたいなあ、どうして僕はこんなに弱いのだらう。」

ときどきビエールは、かう呟いて、自分の腕を擦つて見ることがありました。けれどもいくら眺めても擦つても太くならない腕でした。力も出て来ないのです。

ビエールは、強くなりたいと思ふのを諦めてしまひましたが、その代り、兄さんだけは世界一の拳闘家になつてくれるといい、と考へるやうになりました。

二人は外出の仕度が終ると、自働車に乗り込んで、競技場に定め

てある拳闘倶楽部へ走らせました。

自働車はすばらしい爆音をあげて、フランクの首途を祝ひながら、賑やかな街の中を、蟹のやうに走って行きました。

「兄さん、今日も勝つて下さい。」
「うむ、負けるものか。」
兄弟はにつこり笑つた顔を見合せました。

二

まだ仕合の時間には間があると
いふのに、拳闘倶楽部は動くこと
もできない大入満員の入出です。

フランク對ジョー。

二人とも有名な拳闘家です。その
二人がこんど初めて仕合をする

といふのですから、拳闘好きな人
たちの人氣は大へんです。これを

見通すことはできません。そこで
倶楽部の建物に、ビビがいるほど、
大勢の人が詰めかけたのでありま
した。

ビエールは、フランクに、

「すいぶんな人ですね。」

と、囁きました。

「あゝ。」

「みんな兄さんが勝てばいいと思
つてゐるのでせうね。そら、兄さ
んの方を見てゐますよ。」

「さうかもしれないね。」

フランクはそれからビエールに
言ひました。

「僕はもう時間だから、向ふへ行
かなくちやならない。お前はこゝ

で見てください。」

そしてビエールは、大勢の見物
の中へたゞ一人残されてしまつた
のです。

あちらでもこちらでも、どちら
が勝つかといふ話かはじまつてゐ
ました。

「フランクの勝ちにきまつてゐる
さ、あの男は負けたことがないの
だからな。」

ビエールのぢき傍にゐた、頭の
禿げた老人が言ひました。

「いや、そうも言へまい。何しろ
ジョーの力はすばらしいのですか
らね、大ていの相手が、最初の一
撃で参つてしまふといふことです
よ。ひよつとすると、こんどはフ
ランクがやられますぜ。」



老人の連れらしい、若い紳士が
狡さうな目つきをして言ひまし
た。どうもこの二人は、フランク
とジョーの勝負に賭けをしてゐる
らしいのです。しかしビエールは
そんなことを知りません。

兄さんを悪く言つてひどい奴だ
……と思つて、ぢつと紳士の横顔
を睨みつけました。

チリチリ……

激しいベルの音が、隅から隅ま
で鳴り渡りました。それまで雀の
やうに饒舌つてゐた大勢の人たち
が、急に啞のやうに黙つてしまひ
ました。幾萬の目が、建物の真中
の土俵のやうなところへ注がれま
した。

晴れの大切な勝負をする、二人

の勇士が兩方から現はれました。
一人はフランクで、他の一人が相
手のジョーです。二人は附添ひの
人たちに護られながら、獅子のや
うに悠然と落ちついて顔を見合せ
たのです。

ジョーはにたりと笑ひました。

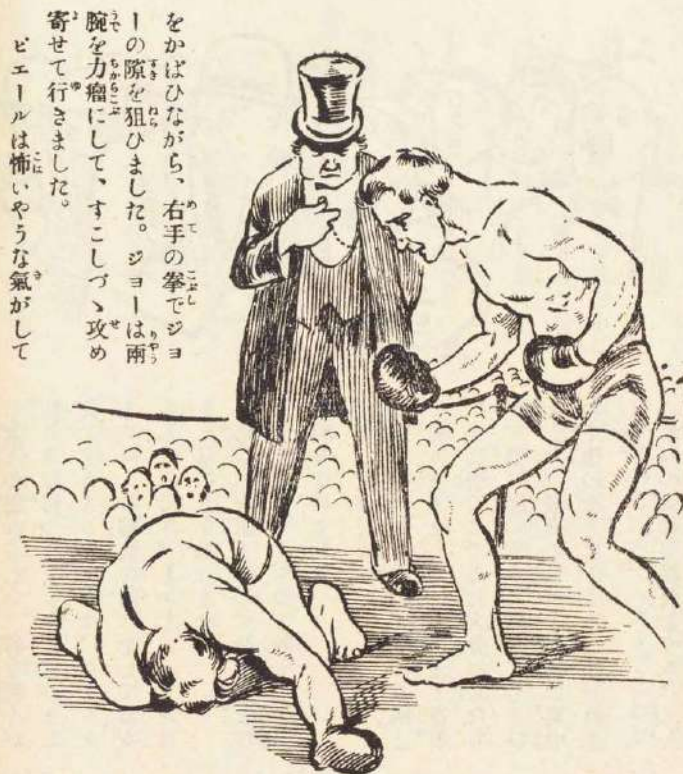
フランクは口をゆがめて笑ひま
した。

けれども、二人とも物凄くほど
真剣な目つきをしてゐました。

ビエールの胸はわくわく躍りま
した。

「兄さん勝つて下さい、勝つて下
さい。」

と、心で叫びつゞけたのです。
合圖がありました。勝負がはじ
まりました。フランクは左手で顔



をかばひながら、右手の拳でジョーの隙を狙ひました。ジョーは両腕を力瘤にして、すこしづゝ攻め寄せて行きました。ビエールは怖いやうな氣がして

七九

思はず目を閉ちてしまひました。わつ、といふ大勢の聲。ビエールははつと目を開けてみて、びっくりしました。倒されてゐたのが兄さんのフランクだつたからです。

「一ツ、二ツ、三ツ」
審判官は指を上げて數へました。十まで數へるうちに起き上がる事ができなければ倒された者の負になる規則です。

ビエールは氣が氣ではありませ

「五ツ、六ツ……」
審判官の聲は續いて響きました。すると倒れてゐたフランクがむつくり起き上りました。激しい闘ひが繰返されました。

こんどは、ジョーが倒されました。しかし間もなく起き上りました。

するとそれを待つてゐたやうに、フランクの右腕がジョーの胸先をツツと突いたのです。ジョーはばつたり倒れてしまひました。たうとうフランクは勝つたのです。

「萬歳。兄さん萬歳。」

ビエールは叫びました。夢中だつたのです。

三

その晩のことです。

仕合に勝つたフランクは氣嫌よく、ビエールにいろいろな話をして聞かせた上、

「弱くてはいけないよ、お前もすこし強くおなり。」
と、優しく言ひました。

「えゝ、僕、いまに強くなりま

す。」

ビエールは答へました。
床についてからも、ビエールは強くなることばかり考へてゐましたが、いつかうとうと眠つてしまひました。

カタツ。
妙な音がしました。そしてビエールの目がさめたのは、靜かに夜が更けてからのことです。

二度目の音は、たしかに部屋の入口らしいのです。ビエールは氷の中へ投げ込まれたやうにぞつとしました。兄さんと呼ばう、と思つても聲を出すことができません。たゞ身體が震へるばかりです。
「盗人だ、どうしよう。」

「兄さん、泥……」
ビエールは言ひました、けれども聲が出なかつたのです。
「どうした、拳闘の夢でも見たのか。はは、はは、」
フランクはさう言つて、眠い目をこすりました。

「……」
ビエールは一生懸命です。しか

七九



八〇

び下りると、その勢でドアの方へ馳け寄つたのです。ビエールは、ほつと安心しました。

「兄さんは強いのだ、もう大丈夫だ。どんな奴だつて怖かないぞ。」

ビエールはかう思ひました。ところが大へんなことになつてしまつたのです。フランタが勢よくドアを開けると、その目の先へピカリと光つたビストルの筒口つきつけられてゐたので

「誰だ、お前は。」

静かにしろ。」ビストルは覆面の男が言ひました。

「何ッ。」

フランタには、やうやく容子がわかつたので、素早くベッドを飛

し聲を出すことができません。しかたなく首を振つて、震へる手で入口の方を指したのです。

「あッ。」

ビエールは思はず聲を立てました。ビエールが驚いた筈です。それは晝間、フランタと闘つて負けた拳闘家のジョーではありませんか。

「卑怯者ッ。勝負に負けたので、こんなことをするのか。」

フランタは肩を震はして言ひました。

「卑怯者だつて、ふん。」

ジョーはにたりと笑つたのです。今日の勝負は大切な勝負だつた

のだ。お前は知るまいが、俺は今日の勝負に、ありつただけの財産を賭けて、そして敗れたのだ。だから俺にはもう歸つて行く家もない、おまけにお前の爲に肋骨を折られたと醫者が言つた。もう拳闘場へも出られないのだ。俺をこんな目に合はせたお前へお禮だ、この引金さへ引けば弾丸が飛び出すのだぞ。」

フランタは、これをきくと、困つたやうにジョーを見詰めた。『知らなかつた、そんなにひどくやつたつもりはなかつた。』

「は、言わけても無駄だ。」

ジョーの目が獸のやうに鋭く光りました。ビストルを握つた指が、すこしづゝ引金へかゝりました。

ズドン……と弾が出ればそれきりです。フランタは死んでしまつたでせう。しかしビエールは、それを見てはゐられなかつたのです。兄さんが危いを見ると、怖いのも何も忘れ、そこにあつたスタツキを振り上げて、ジョーの身体をめちやめちやに叩きつけました。

「馬鹿、ジョーの悪者。」

ビエールは泣き聲を振り絞つて叫んだのです。

ジョーの顔色がさつと變りました。變つたかと思ふと、何を考へたのか、さつとドアの外へ出て、その儘どこかへ逃げてしまつたのでありました。

いつたいたうしたといふのでせう！それはフランタにもわからなかつたのです。勿論ビエールに

わからう筈はありませんでした。

翌日、フランクは一通の手紙を受取りました。開けて見るとジョーから寄越したもので、次のやうに書いてあつたのです。

フランク、昨晩はほんとにお前を撃つてやるつもりだつた。自分と同じ不具にしてやるつもりだつたのだ、けれども俺を打つたお前の弟の心を思つたので、急に心がふつた。つひ引金を引くことがでなくなつてしまつたのだ。

お前はよくあの小さい弟にお禮を言ふがよい。

弟といふものは可愛いものだ、

俺にも弟があるからよくわかる。お前の勇ましい弟を大切に
してやるがよい。 ジョー

読み終つてから、フランクは暫く考へてをりました。

ビエールは心配さうに、フランクの顔を覗きました。

『ビエール。』フランクはビエールの肩を抱いて言ふのでした。

『ビエール。お前はちつとも弱くないぞ、兄さんよりも、ずつとお前の方が強いのだ。』

『どうしたの、兄さん。』

ビエールは何だか、すこしもわからなないのでした。

『昨夜の悪い奴はね、お前が打つたから逃げて行つたのだよ、だから

八二
らお前は兄さんよりも強いといふのだ、有難うよビエール。』
と、フランクは言ひました。

『をかしいですね。』

ビエールは、部屋の隅においてあるステッキの方へ、ちらちらと目をやりながら呟きました。

『あのステッキで打たれると、そんなに痛いのでせうか。』

『違ふ。やつぱりお前は弱虫ぢやなかつたのだよ。力はなくても、お前には強い心があるのだからそれでいいのだよ。』

フランクは言ひました。そして軽々とビエールを抱き上げたのであります。

窓に明るい陽の照る軽快な朝であります。
(をほり)

三日月さん (推薦)

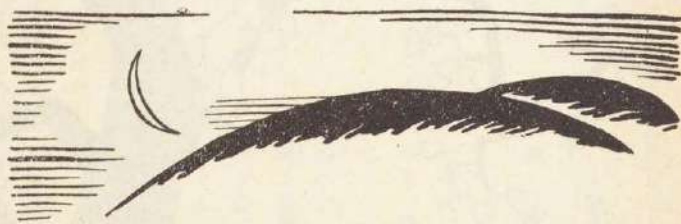
北川 清

三日月さんは
お空にひこり

友だちやなくて
ぼつちりひこり

三日月さんは
お山の上に

友だちやなくて
ぼつちりひこり





ビツクリ兵助

小 林 喜 久

水 島 兩 保 布 畫

昔、京都に兵助と云ふ男が住んで
おました。

體の大きな力の強い、負けず嫌ひ
な、「俺に勝つ者はない。」と、いつ
でも威張つて居る男でした。ですが
兵助は神様や鬼や幽霊などといふ
ものは信じたことがありませんでし
た。或時は、社の御神體を持ち出し
て、川へ放り込んだことさへありま
す。

「あんならばほう者は、今にこりる
事がありますわな。」

と、町の人の中には眉をひそめる
人も澤山ありました。

或日兵助は、近江まで用事が出来

たので朝早く出かけました。所がどうしたのか道を
ふみ迷ひ、行つても／＼人里へ出る事が出来ませ
ん。その内に日は早くも西に沈んで、あたりは暗く
なるし、お腹は減る、足は棒の様になつてしまひま
した。

「しかたがない、今夜は野宿としよう。」

兵助の事ですから、氣味わるくも思はず、道端の
林の中へはひつて、ごろりと身體を草の上になげ出
しました。段々夜が更けて來ますと頭の上では鼻が
ホー／＼と厭な聲で鳴きますし、夜露が冷く身にし
みて來ます。しんとした中に聞えるのは狐や狼の
聲ばかりです。いくら兵助でも餘り良い氣持はしま
せんでした。

と急にバタ／＼と羽ばたきがして、澤山な鴉が目
の前の草むらへ下りました。何事かしらとのび上つ
て見ますと、そのあたりに白々と散らかつて見える
のは、まあ骸骨ではありませんか。そのうちに、妙

に腥い陰氣な風が吹いて來たかと思ふと、バラ／＼
と雨が降つて來ました。晝間の様にバツと、稲光が
したと見る間に、物凄いな雷が響き渡りました。する
と今迄倒れてゐた骸骨が一勢にむくむく起き上り、
樹の下に兵助を見付けて馳け寄つて來ます。兵助は
夢中で樹へ攀ち上りましたが、骸骨は怒つて口々に
何か／＼云ひながら、樹の下を去りません。

さすがの兵助も、樹の上でブル／＼震へてゐまし
たが、その中に雷は収まり雨は止みました。明るい
月の光がさして來ました。ふと向ふを見ますと、飛
ぶ様に走つて來るものがあります。段々近よつて來
るのを見ると、繪で見覚えのある頭に二本の角の出
た、身體も顔も眞青な夜叉なんです。夜叉は何かつ
ぶやきながら木の下へ來ると、そこらに散らかつて
る骸骨を摘んでポリ／＼と音を立て、甘さうに食
べはじめました。お腹一杯食べてしまふと、ごろり
と横になつて、地も震へるほどの大きな鼾をかきな

から寢込んでしまひました。

どうなる事かと、ちつと息を殺してこの様子を見てゐました兵助は、三十六計逃げるにしかすと、そいつと樹から下りて、後をも見ずに一目散に駆け出しました。かれこれ二丁ばかりも来てから、やれやれとホッとして後をふり向くと、さあ大變、眠てるものとばかり思つてゐた夜叉は、もうすぐ後へ、追ひ駆けて來てゐます。で兵助は幸ここにあつた一軒の古寺へいきなり飛びこみました。

二

荒れはてた本堂には、木造の、怖いほど大きい、本尊が只一つ坐つてゐました。どこかかくれる所はないかしらと、ぐるりつとその木像の後ろへ廻りますと、背中に大きな穴がありましたので、兵助はこれ幸とすつぱりその穴へ飛び込んでしまひました。『先づこれで安心。』と云ひながら、やつと腰を下

さうとしますと、その佛像がお腹を抱へて笑ひ出しました。身體をゆすつて笑ふ度に兵助はころ／＼とお腹の中をころがります。と佛像は大きな聲で、『あの夜叉の奴め、折角追ひかけて逃げられおつた。俺様はちつとしてゐて御馳走の方から飛び込んで来る。棚から牡丹餅とはほんにこんな事だらう。お線香臭いお供物ばかりちややりきれないからな。』と一人言を云ひながら、どつこいしよと立ち上りました。が、お腹が重いのでよろ／＼とやつと十足ばかり歩くと、今まで坐つてゐた佛像が立つたのですから、頭が門につかえて通れません。それを無理に通つたので、古い木像の悲しさ、ガラ／＼とくすれて、木片や泥が落ち、兵助はお腹の外へころがり出てしまひました。

『へん、取つて食はうもないものだ。佛像さん、食べなければ食へて御覽。さようならだ。』

兵助は恐がつたことをもう忘れて、こんな憎まれ

口をきゝました。

さうかうして

ゐる内に、

月も落ち、

あたり



は眞ッ暗にな

つてしまひまし

た。何處が道だか野

原だか、手さぐり足

さぐりで行くと、とうと

う大きな穴へするつとす

べり込みました。一生懸命に、草につかまりましたが、草の根はすつぱりぬけて、すつてんころりと穴の底へほうり出されました。兵助が、ひよいと目をあくど、さあ驚きました。

赤鬼、青鬼など澤山の鬼が車座になつて話をしてゐる最中です。右を見ても、左を見ても、前も後も鬼ばかり、その鬼どもは、どれもこれも今にもかみつさうな恐ろしいのばかりです。

鬼どもは降つてわいた兵助を見て、『此奴だ、此奴だ、いつも俺達を馬鹿にする奴は……』と青鬼が云ふと、『日頃の腹いせを、思ふ存分にしていやう。』と、赤鬼が嬉しさに云ひました。

そして鐵の縄で兵助を縛り上げ、鬼の王様の前へ兵助を引出しました。

『人間の世界に居て、鬼や神を惡口致し居ります横着者で御座います。』と申しますと、王様はハッタ

と睨んで、

『貴様は何處を捉へて鬼神は無いものなどと云ふのか、今、鬼神のありがたみをよく見せてやるからさう思へ。』

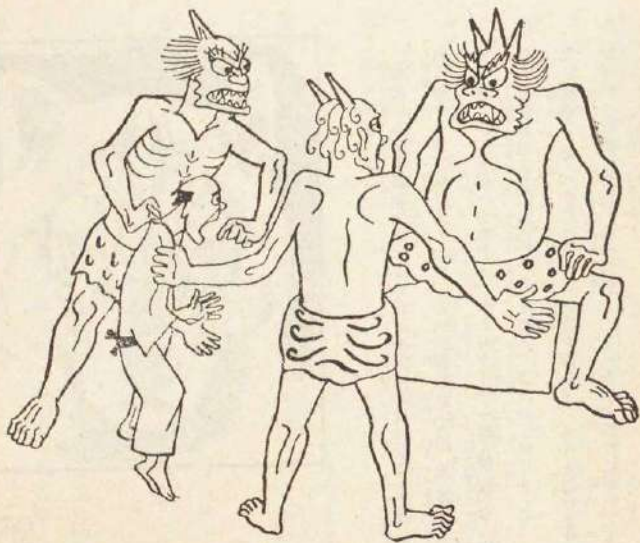
と部下に指圖して、兵助を裸にして長い鞭でビシビシ打ちながら、

『こんな事は人間でもする。人間で出来ない事を見せやう。此奴の身體を三丈の長さによせよ。』

と鬼共に王様が命じますと、待ちかまへてゐた鬼達は、兵助を石床の上へのせ、温鈍でも打つ様に、延ばしたり、裏がへしたり、寄つてたかつてゐると成程、見る間に兵助の身の丈は三丈の長さになつてしまひました。さすがに強情我慢の兵助も泣き聲を出して、

『どうぞもと通り小さくして下さい。』と慄えながら云ひました。

よしきたとばかり皆んなで又、石床の上でお團子



を握るやうに丸めると、たちまち一尺ばかりに縮まつて了ひました。横にばかり張り出して大きな蟹の様な姿です。鬼共は、

『やあ今度は蟹の化物が出来たぞ。』と手を拍つて大笑ひです。兵助が歩いて見ると土をなめる様で、

その苦しい事と云つたらありません。それを見るに見かねて、一人の年寄りの鬼が、

『どうだ、もうこの位にして勘辨してやらうぢやないか。』

と云ひながら、四五遍兵助の身體を振り廻すと、やつと元の身體になりました。

『では、貴様が折角此處へ來た土産に何をやらう。』

さうさな、俺はこれにする。』と、その年寄りの鬼は、自分の二本の角を兵助の頭へニユツと向ひ合せつけました。

『俺はこれにする。』と赤鬼は兵助の唇へ鳥のやうな喙をつけました。一匹の鬼は兵助の頭の髪を、ば

う／＼と逆立て、色は火の様に赤くしてしまひました。

『俺は眼玉をやらう。』

と、一匹の青鬼は、二ツの青い珠を兵助の目の中へ入れると、兵助の目はガラ／＼と青く光り出しました。

『まあ大事に往かつしやれ。』

兵助はやつと人間の世界へ還されましたが、家へ歸つても妻子は恐れて逃げ出しますし、町の人達は化物が來たと、わい／＼騒ぎ立て、黒山の様な人ばかりです。

で、しまひにはとう／＼兵助は、うちに閉ぢ籠り、戸を締めつきりにしてゐるよりほかに仕方ありませんでした。

(をはり)



(傳説巡禮)

へいぼう太郎

織田小星
寺内萬治郎畫

九〇

前號に『金紙銀紙』と言ふ傳説が石橋宗雄氏に依て大變面白く紹介されて居りましたが、これに似た話で信州並に遠州にまたがつて傳へられたものがあります。一體傳説中にはよく同じ話の筋が諸國に形を變えて傳はつて居りまして、その起源に溯つたなら面白い研究が出来るだらうと思ひますが、私は此處に皆傳説參考資料として『金紙銀紙』に似た、もう一つの傳説を御紹介しようと思ひます。

信濃國と言へば山國、その山の中に諏訪湖が鏡の様にまろく光つてゐますが、西南の山脈の切れ目から湖水の水はすさまじい勢で伊那の平野へ流れ下り、天龍の地峡に飛沫をあげて、やがて遠洲の野を南に太平洋と合します。その伊那の平野の中頃、赤穂村に今柳山と言ふ山があります。見上ぐれば透き通つた碧い西の空に駒ヶ嶺の峻峯

が、今谷、木挽の峯を抱いて、脚下には數條の清流が山腹の樹蔭を寫し、さながら仙境にゐる思を人にさせますが、むかし本聖上人が此處に七堂伽藍を建立し名づけて寶積山光前寺と稱へました。さて話はそれから後に下り、花園帝延慶年間のことであります。ある朝光前寺の寺男が門前を掃除しようとして外に出ますと何處からともなくクンクン仔犬の鳴く聲が聞えますので、

『おや、どこで鳴いてゐるのかしら。』とあたりを見廻すと、堀ぎはの浅い溝の中に土佐種らしい灰色した仔犬がよろ／＼動いてゐました。『これは可哀そうに、誰が捨てたのか知らないが、まだ生れてはともない様子、犬だとして親は戀しかろ、よし／＼わしが育てゝあげるから。』と、人のよい寺男はそのまゝ抱えてつれ戻り、それから我が子の様に可愛がつて何くれとなく世話をしてやりました。

犬の大きくなりまゐるのは早いもので間もなく立派な親犬になりましたが、さて其身輕な事は驚くばかり、山や野を鳥の様にかけ廻り、近處の犬と喧嘩をしても一度も負けた事はなく、野獸すらその姿を見ると一目散に逃げて行つて了ふほどで、寺中の者はその毛色が灰色な處から灰毛太郎と名をつけて、こよないものゝ様に可愛がつてゐました。

ちやうど其頃のこと、遠洲府中の驛(今の見附町)はづれ、こんもりとした森の中に天神様が祭られてありました。毎年の世からかその天神の森には怪神が住んでゐて、毎年祭日に美しい娘を人身御供にあげないと、きつと恐ろしい祟りがあると言ふので人々は其日には涙と共に可愛い娘の一人を白木の櫃に入れ、供へて來ましたが、而も櫃は翌朝はめちやくちやに壊され、娘は何處へか攫はれて、決して二度と里へは歸つて來ないばかりか、若し誰か附近に隠れて怪神を見様とした者は、きつと殺されてしま

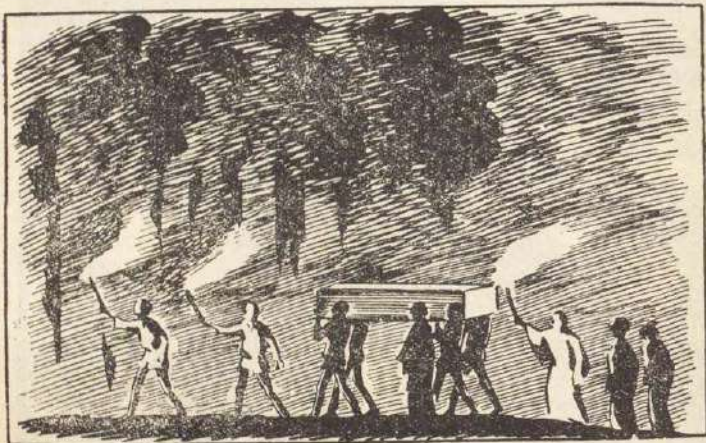
うので、今だにその正體を見極めた者もないので
す。

その頃、天神様の社僧に一實坊辨存と申しまして
人の難儀と見ればまるで自分の身の上の事の様に心
配し、世話をする、至て心のよい坊さんがゐました
が、幾度かくり返される人身御供を面のあたり見、
その歎きを聞かされては一刻も黙つてゐる譯には行
かなくなりまして。そこでどうにかして怪神の正體
を見現はし、里人の難儀を救ひたいと人知れず神佛
に祈願をこらし難行苦行を重ねましたが、恰度その
満願の晩に、何處ともなく聲がして、
『辨存、々々、お前の願は無理ならぬ願により聴き
とゞけてやる。次の祭禮の夜廟社の床下に潜んで祈
願を怠らすにゐよ。』と言つたと思ふと、はつと夢
から醒めた様な氣持になりました。辨存はこれはき
つと神佛のお告げに違ひないと喜んで心ひそかに祭
の日の来るのを待つてゐました。

九二
その中にその恐ろしい呪の日はやつて來ました。
里人はもの狂はしい氣持の中にも一通りの儀式を済
ませ、いよいよ人身御供を献げる時刻が來たので、
櫃に入れられた美しい娘は親兄弟と別れを告げ、泣
きむせぶ親戚や知人に送られ、晝なほ暗い天神の森
へ、松明にかこまれながら昇がれてゆきます。やが
て櫃が神前に置かれると、人々は後髪引かるゝ思ひ
しながらも祟を恐れ、後も見ずに引きあげてしまひ
ました。

ちらりほらりと松明の灯が森の外に消えてしまつ
た時、突然物陰から現れた黒い人影、四邊に氣をく
ばりながら、いち早く神殿の床下にもぐり込みまし
た。それは言ふ迄もなく辨存です。夜は段々と更け
ゆくまゝに床下にひそんだ辨存は一心に祈願をつゞ
けながら、どんな變化が現れるかと、とどろく胸を
押し鎮めて待つてゐますと、やがて真夜中、森の奥
の梢がザーと鳴り渡り何か怪物がのそりと來る

氣配がし
たと思ふ
と、突然、
社前に、
夜目には
しかと見
分けのつ
かぬ黒い
影が三つ
四つめつ
くと立ち
ました。
それを見
た辨存は
背中から
冷水をあ
びせかけ



られた様にゴツと身の毛がよだちましたが、今が太
事な處と一心不乱にお經の文句をくり返し息をこら
して外の有様をうかがつてゐますと、其怪物の一つ
が神殿の扉に手をかけギョーと鈍い音をきしらせなが
ら左右に開き、娘を入れた櫃を輕々と持ち出しまし
た。其時他の一つは物凄聲で、
『オー、有るな、入つてゐるか。』と言ふと又別の
『ある、若い娘のうまさうな臭が櫃の中からも
れて來るわい。』と嬉しうに言ひます。すると他
のが、

『おい、近所に誰も隠れては居ないだらうな。どう
もさつきから少し變に思ふんだが。』と言ふので、
聞いた辨存は見つかつたら一大事と夢中になつて祈
願をくり返します。その時又怪物の一つは、
『フン、誰が隠れてゐようと、へいばう太郎さへ
ゐなけりや、何も恐れる事は無いぢやないか、見つ
け次第一息に殺して了ふまでよ。』と言ひながら櫃



九四

の蓋に手をかけ、
メリ／＼と引きは
がし、怖ろしさに
死人の様になつて
ゐる娘を引き出す
と、小鳥を抱く様
に小脇にかゝえて
森の奥へと姿を消
して了ひました。
一部始終を見て
ゐた辨存は漸く床
下からはひ出し、
人目をしのんで急
いで自分の家に戻
りました。耳に
残つた事は怪物が
「へいばう太郎さ



九五

へひなけりや何も
恐れる事は無い
。」と言つた其言
葉です。いろ／＼
考へました未辨存
は、へいばう太郎
と言ふのはきつと
武藝に秀でた勇士
に違いないと、そ
れから近所近在は
もとより心當りの
所は全て尋ねて見
ましたが、どうも
そう言つた名の武
藝者は見當りませ
ん。其うち、
「何でも、そんな

名前の人が信濃の伊那の平野に住でゐる。」と言ふ事をふと聞き込み、飛び上る程喜んで、早速旅仕度をととのへ天龍川の激流に添ふて北へくと信濃路へ入つて行きました。

ある日、とある村の掛け茶屋に腰をおろし、奥から出て来たお婆さんとよもやまの話をしながら、「……所で、お婆さん、外でも無いが、この伊那の平野にへいばう太郎と言はれる立派な武藝者は居られないかね。」と尋ねますと、婆さんは一寸小首を傾けて、

「へい、左様な武藝者はついぞ聞いた事は御坐いませんが、赤穂村の光前寺にそれはくかしこい犬が居りましてね、人の言ふ事をよく聞き分けまするし、それに大變早しつこい犬で、何でも不動様が乗り移つてゐらつしやるに違ひないなんて申しましてあがめて居りますが、その毛色が灰色なので皆へいばう太郎と呼んで居ります。その犬の事とは違ひま

すので御座いますか。」

「ほう、これは初耳だ。ふむ、事によると其犬の事も知れぬ。のうお婆さん、よい事を教へてくれた。早速行つて尋ねて見る事に致さう。」

と拂ひをすませ、辨存は又旅をつゞけて、やがてやつて来たのは今柳山の光前寺でありました。

「はい、御免下さいまし。私は旅の僧で御座います折入つてお頼みが御座いますので、當山の御住職にお目にかゝり度いので御座います。」と案内を頼み人をさせて天神祭の夜の一部始終を住職に話しました處、住職も非常に驚いて、

「ほう、そんな事が御座るのか。もとより人の命を助ける事は出家の道、よろしい、どうぞへいばう太郎をお連れ下さい。」と快く頼みを受け入れてくれたので辨存の喜びは一方でありません。早速その犬を連れて天神祭に間に合ふ様にと歸りを急ぎました。

二

月日は車の様に廻つて又あの嫌な呪はしい天神祭が府中の里に來ました。娘持の親は誰しも安心もなく、供身のしるしの白羽の矢が自分の屋根に立たない様にと日夜祈るのでありました。然し其犠牲は誰か拂はねばならないので、とうとう里で一番美しいと言はれてゐた娘のある家に矢が立ちました。

災危をまぬがれた家は、ほつと一息つきました。が、それはど皆が心配してゐたゞけ又其不運な家に集る同情も一通りではありません。さればと言つて其悲しい運命から救ひ出してやる方法も無いので只ひそくと歎き合ふだけであります。

その頃辨存はもう旅から戻つてゐて、へいばう太郎を自分の家に隠し、そしらぬ顔して居りました。が、いよいよ祭りの日が來たのでいつもの様に一通り祭祀を営み、やがて人身御供を供へる時刻に近づ

くと、瓢然と何處へか姿をかくして了ひました。

話かわつて里の人たちは、もう御供を供へる時が近づいたと言ふので、不幸な家にぞろぞろと集り、くやみやたら、慰めやらを交るゝ言つてゐましたが其中遠寺の鐘がボーンと響いて來て、手にく松明はとぼされ、娘の入つた白木の櫓が持ち出されました。

魔ものゝ住む、真黒い天神の森は、そよとの風もなく、何處やらで啼く鳥の聲がホー／＼と、あちらこちらにこだまして、もの淋しくも聞えます。やがて白木の箱は社殿に置かれ、人は里に戻り、夜は死の國の様に音なく更けて、娘の命は風前の燈火の如く此の世の最後に近づきました。其時森の奥から現れた、いつもの怪物、四邊を見廻し、すばやく社殿に飛び込んで持ち出した御供の櫓、

「おい早く、蓋をはがせ。」と言ふとメリ／＼と音がして、黒い影の怪物が片手の中に差入れたとた

ん、ひらりと躍り上つた小さな黒い影、飛鳥の様に怪物の喉に飛びつく、^{「ラーッ」}と魂切の叫びが森をゆすりました。それを見た他の黒い影は、やには其小さな影に突進しましたが、ひらりひらりと身を交はせて敵に飛びつく有様は鬼神の業かと思はれるばかりです。今迄鳥の聲より聞えなかつた森は忽ち阿鼻叫喚の聲もの凄く、曉近くまで絶えませんでした。かとうく小さな影は大きな黒い影を全て倒して、かすかな最後のうめき聲が黒い地面から土の下に吸ひこまれる様に消えた時、初めて半ば壊れた櫃の中から顔を出したのは辨存でありました。小さい影は言ふまでもなく、光前寺のへいほう太郎で、其夜辨存と共に娘の身代りに人知れず櫃の中に身をかくして居たので有つたのです。へいほう太郎は人々の怖れた強敵を美事に噛み殺しました。自分も身に重傷を負ふて、吐く息も苦しげに辨存の足もとにかけもどり暫し別れを惜しむ様にしておりましたが忽ち身を躍らせると森の奥へと姿をかくしてしまひました。

話かはつて里人は、娘はどうなつた事だらうと漸く東が白々とあける頃森にやつて來ましたが、見れば思ひもかけず其處に顔色青ざめた辨存がぼつねんと佇んでゐて、少し離れた地上には見るも恐ろしい數百年の齡を経た銀色の狒々どもが喉喰ひ破られ朱に染んで死んでゐました。人々は辨存から其夜の話を聞き、初めて怪神の正體を知りましたが、これでもう人身御供の災危も無くなつたとその悦は替ふるものもなく、これと言ふのも一重にへいほう太郎のお蔭と皆して近所を尋ねました。がどうしても犬の姿が見當りません。其處で人を方々に出して問合せたあげく、へいほう太郎は其夜重傷を負ふたまゝ、したゝる血汐を土に残し信州の光前寺に歸ると其まゝ死んだとの知らせに、辨存の歎は此の上もなく、せめて報恩の爲にと大般若經六百卷を六年越しに書き寫し光前寺に納めました。が、寺でも其話を聞いて本堂の南に懸ろにへいほう太郎の死骸を葬り、犬塚と名づけて、今でもなほ人々のお詣りするものが多いと言ふことです。(をばり)

熊坂長範の最期

西川喜平

寺内七郎画



熊坂長範は、加賀の國の住人、野武士の頭領で、剛勇の名は世に隠れもなく、國々の手下は數千人に上つて、その威勢は近國に肩を双べる者もありませんでした。絶えず、京洛や、東國へ、間謀の者を出して、上り下りの旅人のやうすを探り、海道へ手下の者を出して、高荷馬へつけて通る國々の貢ぎ物や、金銀財寶、兵糧、武器などを、奪ひ取つておきました。もう春も末になつて、昨日の花も若葉になり、野も山も青々として、山ほととぎすの鳴く頃、京洛へ出してあつた、間謀の者の一人が歸つて來ました。

間謀の者は、長範に向つて、『三條の吉次信高が、數多の金銀を高荷馬へつけ、近い中に海道を奥へ下るとのことです。馬の數は凡三十頭、人數は吉次、吉六の兄弟を首として、馬士、小者に至るまでで五十人餘り。最早出發に間もないと見え、今支度最中です。』と告げました。長範はこれを聞いて大層喜んで『三條の吉次信高は、世に金賣吉次と呼ばれる大商人、これは近頃にない獲物であるわい。海道の足場をはかつて、高荷馬ぐるみ、奪ひ取らう。』と、早速國々の手下共を、呼び集めにかゝりました。そこで長範は、手勢を引き連れ、美濃の國へ出て來ます中に、

國々から、追々に走せ集まつて來た手下には、越前の河取波の松若、三國の九郎、都からは、三條の衛門、壬生の小猿、そのほか、河内の覺紹、摺針太郎、高瀬の四郎など、音に聞えた者を頭として、總勢五百餘人になりました。長範は海道の宿々は元より、野にも、山にも、斥候の者を出して、吉次の一隊の下つて來るのを、今かくと待ち受けました。やがて斥候の注進があつて、『吉次の一隊は、いよく今夜、赤坂の宿を泊りとする。』とのことでありました。これを聞いた長範は勇み立つて『赤坂は垂井、青墓と、青野が原の原つゞき、青墓、こやすの森も

あれば、これ屈意の足場ぢや。今夜を外づして、又よい機會は得られまい。』と、急に命令を下して、總勢を、二手に分け、先手の勢は三百餘人、後には長範が頭となつて二百餘人を引き連れ、宵闇の曇り空を幸に、赤坂の宿へ押し寄せました。

長範は赤坂の宿外れに、勢を止め、斥候を出して見せますと、『吉次の一隊は、晝の疲れか、寢靜まり、ヒツソリとして音もない。』との注進がありましたので、仕合せよしと、小跳りして、『ソレツ』と先手に命令をしますと、先手の勢は、一齊に松火を點し、ドツと揚げる鯨波の聲と共に門内へ攻め入りました。

先手の眞つ先に進んだのは、摺針太郎、次郎の兄弟です。これは『火振りの親方』と云ふ役で、松火を兩手に高く、勢よく振つて、續け續けと、聲を掛けながら進みますと後に續く手下の勢は、松火をバラリ／＼と門内へ投げ入れました。

此所、彼所に投げ入れられた、松火の火は燃え上つて、廣庭の隅隅までを照らしました。この時、正面の板戸をサツと開いて現はれたのは、年の頃、十五六と見える一人の少年、庭へ飛び下り、小太刀を抜いて突つ立ちました。摺針太郎は、これを見るなり、一本の松火を、ヤツと聲を掛け、

少年を目掛けて投げつけました。投げられた松火は、流星のやうに焰の尾を引いて飛んで行き、少年の顔に當るかと見るまに、左手へバラリと斬り落されました。續けざまに投げつけた、二本目の松火も、少年は跳り上つて踏み消しました。

そこで弟の次郎が苛だつて三本の松火を投げつけますと、松火はクル／＼と舞ひながら、少年の頭上に落ちかかりましたが、少年は左手にカツキと受け止め、そのまゝ投げ返しました。それが進んで來る太郎の甲頭巾にあたつて、火花がバツト散りました。赫々と怒つた太郎は『次郎か、れツ』と聲を掛け、スラリと太刀

を引き抜きさま、兄弟が左右から少年目かけて切り込みました。

少年は一足後へ下つたやうに見えましたが、エイッ、／＼と二聲の下に、兄弟は忽ち、バタ／＼と左右へ倒れました。

これを見た、三國の九郎は、者共掛かれつと云ひながら、白刃を振つて少年に向ひ、無二、無三に斬りかけましたが、アツと叫ぶ聲と共に、少年の前に斬り伏せられてしまひました。

多勢をたのむ手下の勢は、ドツとおめいて、競ひかゝりました。白刃はキラ／＼、キラ／＼と松火の火影に光つて、物凄く見えましたが、少年がエイ／＼と聲をかける度に、二人、三人一度に倒され

ました。この手の勢は残り少なくなつて、とう／＼散り／＼になつて退きました。

その次ぎは高瀬の四郎を頭に、手下の勢は百人餘り、切ッ先を揃へて進んで來ましたので、少年は獅子奮迅の勢で、この勢に斬り入りました。

少年が目之餘る多勢をものともせず、五人、十人の頭上を飛び越え、跳り上つては打ち下ろす小太刀の鋭さに、さすがの高瀬の四郎も驚き恐れて、戦ふ勇氣も失せて、

『鬼神だ、鬼神だ。』と聲を上げて、バラ／＼と逃げ出したので、浮き足立つた手下の勢は、たまらずワツと聲を立て、一度にドツと崩

れました。

二

長範は先手から、一丁ばかりの後ひかへて、先手の知らせによつて討ち入らうと、手具すね引いて待つてゐました。

すると、俄に先手に叫び聲が起つて、やがてドツとはかりに崩れて、逃げて來る勢のために、長範の勢も共崩れになつて、二丁餘りも退きました。

長範は逃げ來る勢を漸くに支へ止め、勢を立て直しましたが、先手の頭、壬生の小猿から、鬼神のやうな少年の働きを聞いて、齒嚙をして、

『憎／＼く小童奴、この長範の長

刀にその素頭を刎ね、討たれた者共の供養をせねばならぬ。』と、立ち上りましたが、何を思ひましたか、壬生の小猿に向つて、

『投げ松火の占手はどうであつた。』と訊ねました。

壬生の小猿は、太息を吐いて、『搦鉢太郎の投げました一の松火は斬つて落し、二の松火は踏み消し、代つて次郎の投げつけました三の松火は、左手にシツカと受け止めて、そのまゝ味方へ投げ返しましたが、三つが三つながら消へました。』

これを聞いた長範は、倒れるばかりに驚いて、床几にドツカと腰を下しました。

『松火の占手と云ふは、一の松火

は軍神、二の松火は時の運、三は我等が命である。三つが三つながら消えるとは、今夜の夜討ちは……』と、目を瞑り、腕を組んで、暫く思案に耽つてゐましたが、やがて突つ立ち上つて、

『松火の占手を見ても、今夜の夜討に勝利を得ることは覺束ない。

盗みも命あつての上ぢや。長居は無益、引け／＼ッ』と、大聲に命令をしましたので、今までの戦に、怖れ氣のついた手下の勢はドツと大波の引くやうに、一度に引いて歸りました。

長範も手勢五十人餘りを従へて、す／＼と歸りかけましたが、キツと思ひ直して立ち止まりました。

『イヤこの長範は生れてから六十年の今日まで、一度も敵に不覺を取つた事はない。今小童一人に負けて、逃げ歸つた』と云はれては、長範が末代までの名折れぢや。まして、この後は國々の手下共も長範の下知を聞くまい。たとひ命を捨るまでも、その小童と太刀を合はせ、最期の腕を見せねばならぬ、者共進めッ』と引つ返したので、手勢の者も是非なく、後にひいて、勢もなく引き返しました。

長範は大聲に、

『高の知れた小童一人、鬼神ではあるまい、討ち入れ／＼』と烈しく命令しましたので、これに氣を得た手下の勢は、また門内へ亂れ入りました。待ち受けてゐた以前

少年は、入り込んで来た勢を迎へ撃つて、四方へ八方へ斬り立てましたので、手下の勢は堪え切れず、バツト散りました。そこを、時をはかつてゐた吉次の一隊が、物陰から駆け出し、得物を振つて追つて立てましたので、戦ふ氣も失せた手下共は、先を争ひ門外へ逃げ出しました。

長範はたゞ一人踏み止まつて、大長刀を脇にかい込み向ふをキツと見渡しますと、廣庭の古木の松を小楯に取つて、少年は小太刀を持つて立つてゐました。折から吹く風に、雲足はやく亂れ飛んで、かくれては暗く、現れては明るく、月は四邊を照らして、物凄いい光景でありました。

やがて長範は、今が最期と覺悟を決めて、錦の頭巾を取つて投げ棄て、鐵の足駄を踏み脱いで、大鳥の歩行くやうに、大股にのつし、／＼と、少年に向つて進みました。

少年も惶てす、小太刀をかざして構へましたが、長範が一閃、二間と近づくと、後退りのまゝ、ヒラリと椽へ飛び上りましたので、長範は、

『逃ぐるは卑怯。』と叫びながら、大長刀を大地へグワリと投げ棄てました。そして五尺三寸の大太刀をするりと抜いて、椽へ上り、少年に打つてかかりました。

二人はしばらく太刀を合はせましたが、少年の素速さは、前かと

一〇四
見れば、後へ廻り、宙を切れば頭を下げ、足を拂へば飛び上り、目にもとまらぬ稲妻のやうな働きに、長範はヤツキとなつて、

『たとひこのまゝ斬られて死ぬとも、小童の首を引き抜き、冥途の道連れにせねばならぬ。』と大太刀を庭へ投げ、大手を擴げて、手捕にしやうと飛びかかりました。少年は右へ逃げ、左へ遁れ、脇をくさり、背を飛び越えます。長範は逃がしはせぬと追ひ廻す中に、フト少年の姿が見えなくなつたので、彼方、此方と探してゐると、思ひもよらぬ後から、腰の番をザツクと割りつけられました。さすがの長範も堪らず、椽から眞逆さまに大地へドト落ちました。



少年は、年は續いて飛び下り、眞向から斬り下ろさうとすると、長範は、『待てッ。』と止めて、『長範が最後の一言聴いてくれえ。海道一の名を取つたこの

長範を討たうとする汝は何者だ。名乗れ。』と叫びました。少年は立ち上つて、名乗りました。

『我は源の牛若丸。』

これを聞いた長範は、

『さては義朝の御子か。源家の嫡流、大將軍ともなる、御方の及にかゝるは、この長範の最期の譽れだ、ムハ、ハ、ハ、』と、聲高く笑つて、大太刀を拾ひ上げ、自分の首に押し當てました。

天下無双と云はれた、熊坂長範は、此所に勇ましい最期を遂げました。



童謡

野口雨情選

(子供篇)

お山のからす(賞)

山形 林 利子 (尋三)

お山の鳥

なきなき行つた

みんなでならんで

ないてつた

日暮れ(賞)

熊本 宮本のり美

お日さん

お山へ

お歸りだ

とんぼよ

ふる巢へ

歸らんか

ゆうやけこやけ(賞)

青森 戸館 かつ (尋四)

ゆうやけこやけ

日がくれる

日がくれる

からすがあゝ

ないてゆく

106

しいの實

東京 相川 千二 (尋五)

上野でしひの實

ひろつてこ

しひの實上野に

おちてゐる

白い帽子

朝鮮 河野正三郎 (十四)

野原のたんぼ

白帽子

どこで買つてきた

白帽子

すましてかぶつてゐる

白帽子

風

東京 福島

(正夫)

こがらしふく

かせふく

むこうのやまの

まつのが

さむいさむいと

なきだすぞ

牛

北海道 市川

誠市

もうく牛よ

よだれ牛

よだれかけ

はしいと

云つて見な

虹の橋

北海道 浅 綾子

雨が上つた時

虹が出た

きれいな虹の橋

だれがわたる

椿の花

大阪 中村 速生 (十五)

椿の花の

花輪は長い

椿の花は

皆んな皆んな赤い

山家

熊本 宮本 學 (尋五)

朝からからつば

山の家

こけこが

お山の鳥



ゆり

豊橋 大島 健吉

雨にうたれた

ゆりの花

ゆみの様に

まがつてる

ろり火

東京 加藤 政一 (尋五)

いりり火

とろり

夜がふける

お星様ひとつきり

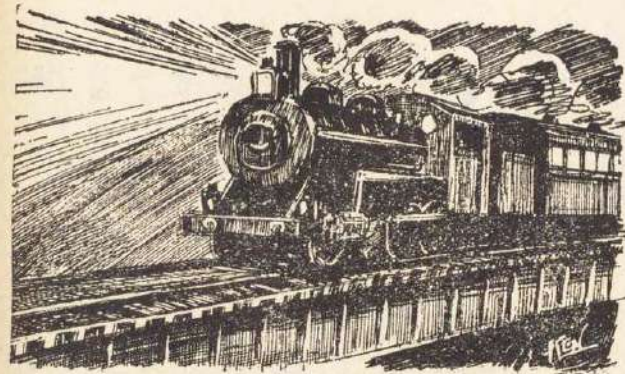
いりり火

とろり

夜がふける

ある驛長の話

青柳 和夫
柳田 謙吉 畫



「さあ、私にも何か話せよとの仰せですが、それでは一つ、私が北陸の或る驛に勤めて居た頃のお話を致しませう。」
年取つた驛長はかう前置きして語り出しました。
「さう、丁度私が新潟の方に居た頃のことです。私が勤めて居た驛のすぐ傍に、一つの鐵橋がありました。かなり長い鐵橋で、おまけにその下の川と云ふのが、すばらしい激流なのです。それで、もし、此の鐵橋な人が渡つて居る時、汽車が来ようものなら、それこそこへも逃げ道が無いのです。ですから、ふだんは鐵道員ですら、めつたにこは通らなかつたのです。」

此の町に、一人の孝行な娘さんが居ました。お父さんは長い間、病氣で床に就いて、弱ひの娘の女手一つで、家を支へて居たのです。此の孝行な娘さんの評判は、大變なものでした。その中に冬が来ました。寒さは日に日に加はりますし、とても娘さんは、父を養つてゆくことは出来なくなつてしまひました。

「お小夜や。」
「ハイ、お父様。何の御用でござぬます。」
「あ、お小夜。今夜は、もう薬が無くなつてしまつたよ。お前御苦労だが、ちよつと、行つて来て呉れないか。」
「ハイ。」



お小夜は、急いで父の薬取りに出かけました。そして、今の鐵橋の所迄、やつて来たのです。
「早く、お父様にお薬を上げたい。」かう考へ

たお小夜は、道はずつと通り道になつて居るものですから、丁度、汽車も来ないやうなので、大急ぎで、その鐵橋を渡り始めました。けれど、それは失敗でした。一足、一足、まくら木の上を渡つて行くのは、随分手間が取れました。それも、なれて居る人ならとも角、女の足では、なか／＼はかどりません。やうやく半分迄来た時でした。ゴトンゴトンと云ふ聲が、レールを傳はつて来るではありませんか。

「アッ！」
お小夜は、無事で、急ぎました。ゴトンゴトンと汽車の響は、次第に近づいて來ました。あせればあせる程、道ははかどりません。とう／＼機關車のヘッドライトの光が鐵橋にさして來ました！
その時です。私がこちらの道に立つて、それを見て居たのは。
「危ない！」と叫びましたが、どうすることも出来ません。お小夜さんは、私の方を見ました。まるで幽霊のやうな、眞蒼な顔をして。

こんな事件があつて、半月程後のことでした。
「鐵橋に、幽霊が出る。」
こゝ云ふ噂が、たちました。

「私は、今こうして皆さんにお話して居ても、身に寒けがするやうです。それから私達は、その驛をやめさせて貰ひました。あの、お小夜さんの顔が目について、とてもあの鐵橋を通ることは出来なかつたのです。」
驛長はかう話を終ひました。聞いて居た人達は、暫くは何んとも云ふ事が出来ませんでした。

要さん辨さん上京の巻

沖野岩三郎

寺内萬治郎畫



110

三

お正午になりました。相變らず二人に四つのお膳が出ました。お銚子も盃も出ました。

要さん辨さんは、又たお酒をのんで、御馳走をたらふく食べました。

女中さんが下へ降りて行つたあとで、辨さんは、「ヤ、チンチン、ツンテン、シャン」と云つて三味線をひくまねをしました。要さんは村の人形芝居で聞覚えた淨瑠璃のまねをしました。

要さんは絹蒲團の上に坐つて、脇息に片肘ついて、假聲をつかひながら、

「こりや、辨の野郎。ゆるす、近う寄れ。」と申しました。すると辨さんも負けてはゐません。同じく脇息にもたれて、

「要の野郎、容赦はせぬ。手打にするぞ。」と云ひました。

脇息にもたれた二人の殿様は、黒檀の机を真中にして威張り合ひました。

「腕押をしよう。そして勝つたものが殿様になつて、此の坐蒲團を二枚重ねて敷くんぞ。負けた者は下郎と。いゝか。」

要さんの發議に、辨さんは直ぐ賛成しました。けれども賛成した辨さんは、もろくも要さんに負けました。

「さア、僕が殿様で、辨さんは下郎だぞ。下郎その蒲團をこちらによこせ！」

要さんは起上つて辨さんの敷いてゐる坐蒲團を取りに行きました。けれども辨さんは容易に坐蒲團を渡さうとしません。

「こりや下郎、約束だぞ！」

要さんは辨さんを突轉がして、其の蒲團を奪はうとしました。辨さんは轉がりながら、其の蒲團を掴んで頭の下へ押へました。

111

さあ、大變です。お酒に酔つた田舎育ちの若者二人が、力一杯坐蒲團の争奪戦をやつたので、衣桁が倒れ、屏風が倒れ、脇息が毀れ、お茶盆が引くり返りました。

二人の組打が長く續いて、辨さんは要さんを床柱へ押つけました。其時丁度要さんの頭が、床柱に取つてあるベルのボタンを押へたので、呼鈴が帳場で、リリリン……とひどい音をたてて鳴りました。

けれども、要さんも辨さんも、そんな事は知りませんから、辨さんは力一杯、要さんの頭をベルのボタンに押つけてゐました。

帳場では番頭さん始め、みんなびつくりしました。女中さんが三階へ走つて来てみますと、大變な騒ぎです。

「まあ、どうなすつたんです？」

女中さんは呆れながら、二人の方を見ました。辨さんも、やつと手をゆるめて、頭をかきながら蒲團

い親切な言葉をきいて、要さんも辨さんもホツとしました。

女中さんが新しく、くんで呉れたお茶臺のみながら、要さんは誇らしく、

「辨さん、兄さんは大ぶんうまくやつてゐるんだなあ。われ／＼を、こんな立派な坐敷へとめて、あんな御馳走をしてくれた上に、酒まで飲ますぢやないか。こんな調子だつたら、直ぐどこかの學校へ通學させてくれるぞ。」と申しました。辨さんもうれしうに、

「よかつたネ、東京へにげて来てよかつたネ。紀州に居たなら、一生蛙切りの蚯蚓殺しで終るんだつた。」と云ひました。

二人は又た縁側の簾椅子にもたれて、珍らしい大通りの往來を飽かず眺めてゐました。

女中さんに勤められて、又たお風呂に浴りました。一日に二度もお風呂に入るといふことは、二人にと

二二
の上に坐りました。要さんも汗をふきながら、くすくす笑ひました。

女中さんは衣桁や屏風を立直して、散ばつた茶器を盆にのせて下へ降りて行きました。

「君が、あんな事を云ふから悪いんだ。」

「君が、僕を押つけるから悪いんだ。」

争つてゐるところへ、番頭さんが上つて来て、次の室から襖を少うしだけ開けて、

「唯今警視廳の海谷さまから、お電話でございました。海谷さまは、今夜宿直に當りますので、お歸りは明朝八時でございますから、どうぞ、今晚は御ゆ

つくりとおやすみ下さいますやうに。明日は一日お休めでございますので、上野淺草日比谷を御案内いたします……との御傳言でございました。」と云つて、平蜘蛛のやうに頭をさげました。

あんまり大騒ぎをしたので、うんと叱られるのかと思つて、びく／＼してゐたところへ、思ひがけな

つては贅澤極ることだと思ひました。

「おい辨さん。脇息にもたれる殿様は、違つたもんだなあ。一日に二度もお風呂に浴るんだぞ。」

要さんは着物を脱ぎながら言ひました。

「下郎の僕は、お風呂までお供とは、なさけないネ。」

辨さんは、そんなことを言つて笑ひました。それから二人はお風呂にはひつてゐると、風呂番が来て、要さんの「流し」だけとつて、辨さんの「流し」は取らないで、さつさと外へ出て行きました。それを見た要さんは、

「どうだい、下郎。殿さまの御威光を見な！」と威張りしました。

夕御飯は、おひる飯よりも、更に御馳走でした。

相變らずお酒をもつてまゐりました。要さん辨さんが、いゝ氣になつて、お酒を飲みながら、御馳走をたべてゐると、又た番頭さんが来て、

「唯今海谷さんから、お電話がございました、お二人様は御酒をお好きでゐらつしやいますから、十分に差上げるやうにとの事でございましたから、どうぞ、ごゆつくり……」と言つて、下へ降りて行きました。

女中さんが、二人の前にきちんと行儀よく坐つて、お給仕をしてゐるので、要さんも辨さんも、田舎言葉で話すのが恥かしいから、なるべく黙つて、頻りに飲んで食へ、食へては飲みました。

女中さんがお膳を引いたあとで、酔つぱらつた辨さんは、

「おい、要さん、えらけりやあ、その呼鈴を押して見い。」と云ひました。

「よし押して見る。呼鈴を押すぐらゐ、何でもないので。いくら田舎者だつて、こつちは警視廳巡查海谷亮太の實弟だぞ！」

要さんは大膽さうなことを言つて、呼鈴の所まで



「まあ、それはお困りでございますネお熱がございませのか知ら？」と云

行つて、右の人さし指をボタンに近づけたが、「いやだ、はづかしい！」と云つて、頭をかきました。

「駄目だなあ、僕がおしてやる。」

辨さんは大きな蛇の頭のやうな親指で、ぐつとペルを押しました。すると間もなく、とん／＼と段梯子を登つて来る足音が聞えました。

「来たぞ来たぞ、僕は知らないよ。」と云つて、要さんは仰向に寝ころびました。

「何か御用でございますか。」

襖を細目に開いた女中さんは、次の室からいねいにきつました。要さんは黙つて空寝をしてゐます。辨さんは困つたやうに頭をかくてゐましたが、「海谷君は頭痛がするさうですから、風邪薬を一瓶もつて来て下さいませんか。」と、出たら目を云ひました。すると女中さんは驚いた顔つきで坐敷へ入つて来て、

つて、要さんの額に一寸手をあてゝみました。要さんは、わざと苦しさうに唸りました。

「私、検温器をもつて來ますから、お熱を量つてごらんないまし、もしお熱がございましたなら、アスピリンかヘブリン丸を差上げますから……」

女中さんは坐敷を出しましたが、間もなく検温器をもつて來ました。

要さんも辨さんも、検温器といふものを見たことがありません。村には七十近い年とつた漢法醫が一人ゐます。けれども其のお醫者さんは、検温器など使ひません。病人の額に手をあてゝみて、それから舌を出させてみるだけです。

「これを腋の下へ五分間程、おはさみ下さいまし。私、直ぐまゐりますから。」と云ひおいて、女中さんは出て行きました。あとで二人は検温器をサツクから取出して、燃くりましてゐましたが、硝子の管を腋の下へ、そのまゝはさむのは冷たくて、いやで

したから、要さんは、火鉢で検温器をあふりました。
「さうだ、さうしたなら、冷たくないネ。」

辨さんも要さんの頓智に感心しました。元々要さんは、風邪でも何でもありませんから、熱のあらう筈はありません。ところが、女中さんが上つて来て、要さんから検温器を受取つた時、

「まあ、大變です！ お熱が四十度を越えてゐます。」と云つて、そのまゝ、帳場の方へ、あわてゝかけ降りしました。

まもなく番頭さんが入つて来ました。お妻さんも入つて来ました。丁度其頃、東京の町中には、千人近いチブス患者があつたので、警察から旅館へは、特に厳しいお達しを出してありました。

「四十度のお熱では大變です。警視廳の海谷さんへお電話をかけて、繰合せてお歸りを願ひませうか。」おかみさんは心配さうに、要さんの顔をのぞきながら申しました。けれども要さんは、こんな所へ兄

さんに歸られては大變ですから、

「電話はかけないで下さい。ほうつて置いて下さい。直ぐ治りますから、これは僕の持病です。」と、出たらめを申しました。

「さうですか、海谷さんも御心配なすつてはいけませんから、お電話はかけないで置ませう。でもまあ、お医者さんだけはお招きいたしませう。」

おかみさんは番頭さんの方に對つて、さう云ひました。すると番頭は、直ぐ外へ出て行きました。が、半時間程たつて、でつぷり太つたお医者様が入つて来ました。それまで、おかみさんは要さんの枕もとにつききりでした。

お医者さまは検温器を要さんの腋にはさみしました。要さんも仕方なしに、病人らしく唸りました。辨さんは大變な事になつたと思つて、全く弱り込んでしまひました。
お医者さんは要さんから検温器を受取つて、首を

かしげて言ひました。

「三十六度五分ですよ。平熱以下です。」

「だつて、これ此の通りですよ。」

おかみさんは自分のうちの検温器を、お医者さんに見せました。

けれどもお医者さんは、ふふんと鼻さきで笑つて、

「それは粗製濫造品ですよ。

素人はよく、そんな検温器に、脅かされます。……チブスでもインフル

エンザでも、何でもありません。」と云つて、さつさと歸つて行きました。

「駄目な検温器ネ、これは……御病氣でなくて、まあ宜しうございましたワ。」



おかみさんは笑ひ乍ら出て行きました。要さんは小聲で、

『あの醫者は馬鹿だね。僕が検温器を火鉢であぶつたことに氣づかないんだよ。』と云ひました。辨さんも下唇を突出して、

『ねえ、あんな冷い硝子の棒を、火であぶらずに腋の下へはさむ馬鹿があるかい!』と云ひました。

とんでもない大騒ぎのあとで、女中さんが寢床のべに來ました。二人は不思議さうな顔をして女中さんの方を見てゐましたが、

『ごゆつくりおやすみなさいまし、御機嫌宜しう。』と云つて出て行つたあとで、要さんは直ぐ言ひました。

『辨さん、なんとでつかい寢巻だなア!』

『ねえ、僕もこいつには驚いたよ!』

二人は呆然として寢床を眺めてゐました。二人が寢巻だと思つたのは、袖のある『夜着』です。『夜着』

ん。

『要さん、困つ、なあ、帯をしめてくれないか。』

『馬鹿言へ、僕は起き上りも出来ないぢやないか。』

『だつて、困るぢやないか。』

『呼鈴を押せ押せ。そんな時のための呼鈴だ!』

要さんは厚い襟の中から、顔を半分出して言ひました。夜着の袖のさきに、大きな手が白く見えてゐます。

『よし、押すぞ!』

『押せく、押して押しまくつてやれ!』

辨さんは思ひ切つて、又たベルを押しました。まもなく入つて來た女中さんは、二人の姿を見て、座敷中を這ひ廻つて笑ひました。

要さん辨さん、上京後の失敗の一夜は明けました。警視廳で宿直勤務をした、海谷亮太さんは歸つて來て、先づ自分の室に入つて、制服を脱ぎまし

は關東で用ひますが、關西では用ひません。まして要さん辨さんの生れた村では、袖のあるお蒲團があるなどと云つたなら、氣ちがひだと云はれます。だから要さんも辨さんも、其の『夜着』を寢巻だと思ひつめたのです。

『えらいこつちや。僕が先きに、この寢巻を着るから、辨さん、すまないが、ぎゆつと帯をしめておくれよ。』

要さんは大きな『夜着』を着て立つてゐます。

『よし來た。しめてやるぞ!』

辨さんは『夜着』の上から、帯をぎゆつ! としめました。

『おい、僕はねるから、上へ蒲團をかけてくれたまへ。』

要さんは、お相撲さんのやうに、蒲團の上へころがりました。ところが困つたのは辨さんです。夜着を着るには着たが、帯をしめてくれる人がありませ

た。そして和服に着替へました。

亮太さんは『堺と海谷が來た。』といふ電話を受けた時、亮太さんの生れた村の、堺藤左衛門といふ大金持と、海谷房右衛門といふ同じく大金持の村長さまが來たのだと早合點してしまつたのでした。だから、出來るだけ御馳走をして、お酒を出して、ていねいに扱つて下さいと、番頭さんに頼んだのでした。要さんと辨さんとは、もうお風呂から出て、相變らず朝つばらから二の膳つきで、お酒をのんでゐます。

自分の弟が、お友達と村を逃げ出して來たのだとは、夢にも知らない亮太さんは、紋付の羽織を着て、三階へ上つて行きました。そして次の室から、うやうやしく、

『御免下さい。』と申しました。其の聲を聞いた要さんは、變だなあ……と思ひ乍ら、

『はい。』と云つて奥の方を見ますと、やがて、襖は

静に開きました。と、同時に、
『馬鹿！ 要次ぢやないか！』と呶鳴る聲が聞えま
した。

要さんも辨さんも蒼くなりました。
『貴様たちだつたのか、おれは堺の旦那と村長様と



だとばかり思つてゐたんだ。だから御馳走するや
うに宿へ言ひつけたんだ。貴様たちにそんな真似を
されちやあ、一晩でおれの月給が飛んでしまふぢや
ないか。考へて見てもわかりそうなものだ。おれの
月給は十五圓ぢやないか。青二才のくせに、朝つば
らから酒など食ひやがつて……』

亮太さんは蒼くなつて、怒りました。お給仕をし
てゐた女中さんは、笑ふにも笑へず、呆れ返つてゐ
ました。

暫くして、亮太さんは、女中さんの方に向直つて、
『お菊さん、すみませんが、おかみさんに一寸來て
いただくやうに。』と、申しました。

おかみさんは腹をかゝえて笑ひました。亮太さん
は苦笑しました。辨さんも要さんも、鹽をまぶされ
た蛭のやうに、へたばつてしまひました。

『では、奥さま、誠にすみませんが、二人の宿賃を、

『さういふ事にして、』とは、全體どういふ事でした
らう？

夜着を着て寝ようとした一等のお客様は、二の膳
つきの朝御飯を三分一も食べないで、直ぐ下男部屋
へ追ひ下げられました。そして、早速要さんは、蹴
足になつて廊下の雑巾がけ、辨さんは竹箒をもつ
て、お庭の掃除をはじめました。

兄さんに頼んで、學校へ通はせて貰ふどころか、
一日一晩二の膳つきで、飲んだり食べたりした宿賃
を拂ふために、二人は手足に輝をさらして、三
ヶ月をこで働かされたので、さすが元氣な要さ
ん辨さんも、すつかりまゐつてしまひ、上野の櫻が
ちらほら咲き初めた頃、東京といふところには、何
の未練も残さず、おかみさんから旅費をもらつて、
さつさと紀州の山奥へ歸つて行きました。

(おしまひ)



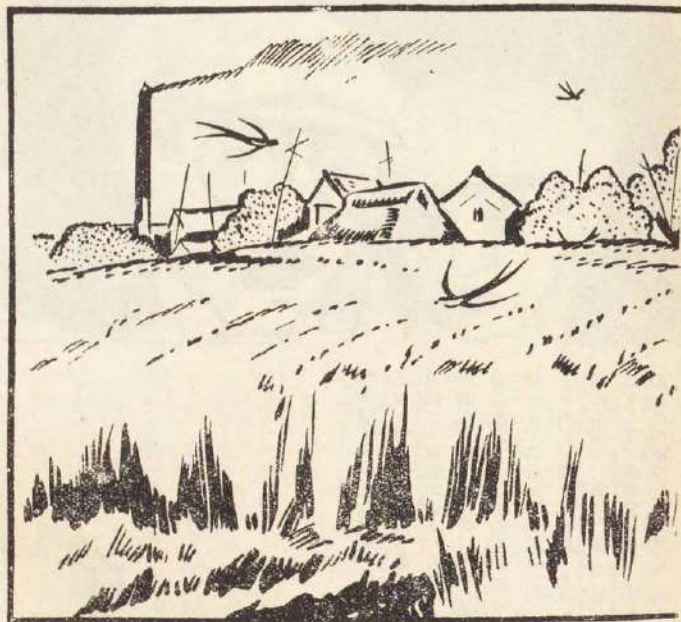
さういふ事にしてすましてやつて下さいまし。』
亮太さんは拜むやうにして頼みました。おかみさ
んは笑ひ乍ら、
『では、お氣の毒だが、さういふ事にいたしませ
う。』と、申しました。



五月の唄

達崎 龍

軒の古巢の
ふるさこに
矢車草が
咲きました
昨日おごゝひ
つばくらは
古巢たづねて
來てました



ラヂオの棹は
すいすいこ
麥の穂花も
伸びました
菖蒲の風に
乗せられて
ふるさこつばめ
來てました

寺内萬治郎畫

五百七號室

三井信衛

寺内萬治郎畫



【前號までの梗概】 東京市内には、毎夜七軒づつの盗難が起つた。滋の店でも、七個づつ、寶石が盗まれた。フランスから三年ぶりで歸つた父が、突然行方不明になつた。支配人の松本も、少年店員の夏雄も、一も、亦行方不明になつた。ある日恐ろしい男が、滋の家に襲つて来て、滋はその男に負傷し、養心堂病院に入つた。滋はそこで、偶然奥原といふ店員が入院してゐるのを知つた。奥原は、あの怪人の襲

つて来た夜、店から逃亡したのだが、奥原はその病院で、秘密に手術を受けた。奥原の腹部からは、滋の家で盗まれた、ダイヤの一個が、手術に依つて出て来た。奥原が突然死んだ。滋の家からは、守屋といふ青年が来た。守屋と滋が、奥原の病室を調べてみると、そこから出て来たのは、一枚の紙片であつた。そこにはクロス・ワードが一つ書いてある。守屋と滋は、店に歸つてそのクロス・ワードについて、いろ

いろと考へて廻らせた。その最中、悪漢の手から逃れて歸つてきたのは、誰一であつた。誰一は神岡ビルディングの地下室に、監禁されてゐたのだと断る。守屋と滋は、神岡ビルディングに行つて見た。その時、その建物の恰好が、あの奥原の残したクロス・ワードの恰好と、同じであることが發見した。折しも、その建物の七つの窓には、灯がついた。その七つの灯のついた窓が、クロス・ワードの黒い所と同じ位置であることも發見した。この七つの窓に當る部屋には、誰が住んでゐるのだらう？

その六 銀鈴は鳴る

1 七つの窓

「さすがに滋さんだ。これは意外な大發見をしましたね。成程、七つの窓に違ひありません。」

一心に見つめながら、守屋青年

はかう繰り返してゐました。
「ね、守屋さん、あの七つの窓には、どんな人が住んでゐるのですね、うか？ これから二人で、そつとビルディングの中へ、入つて見ようぢやありませんか？」
「それは駄目です。早まつてはいけませんから、暫く様子を見ることにしませう。」
さう言つて守屋は、尙も七つの窓明りを眺めてゐましたが、俄かに鋭く目を光らせて來ました。すると、滋の目もまた、不意に異様の光を帯びて來ました。
「おや、灯が一つ消えた。」滋は嚇きました。が、守屋は黙つて、懸命に見つめてゐる。
ほつつりと、急に一つの窓の明

りが、消えてしまひました。すると、それから五分か十分経つた後、ほんの微かではありましたが、自動車の爆音が長く餘韻を引いて、そのビルディングの裏口から聞えて來たのでした。
「變だ、自動車の音がする。」
聲を合して、さう二人が嚇いたのも、ほんの一瞬間で、又ほつつりと、もう一つの灯が消えました。その上もう一つ、又もう一つ。五分おき十分おきに、七つの窓は順々に、まるで星空に雲がかつて行くやうに、すつかりとその灯は、消されてしまひました。
そして、灯が一つ消えれば、一つの自動車が、二つ消えれば二つの自動車が、次々に建物を出ます。

かうして七臺の自動車は、黒瑪瑙のやうな暗闇の中を、何處へか走り去りました。南へ、又北へ、その自動車の行術を眺め、二人は長い間黙つて佇んでゐました。

「やつぱり滋さん、あの七つの窓に當る部屋には、七人の男があるんです。」と、守屋は注意深く、沈黙を破りました。

「僕もさうだと思ひます。あの七人の人たちは、てんでに恐ろしい悪事を働くために、思ひ／＼の方面へ、出て行つたのかも知れませんがね。」

「多分さうでせうね。」

「あの人たちが留守なのを幸に、そつとビルディングの中へ、入つて見ませうか？」

「まあ、お待ちなさい。早まつてはいけません。もしあれが悪い人だとすると、その部屋には、どんな恐ろしい仕掛があるかわかりませんからね。」

さすが考へ深い青年だけあつて、守屋は冒險の血にはやる滋を、強く押し止めたのでした。けれど、彼はまた直ぐに囁きました。

「全ては明日のことです。」

「さう、明日。」滋もさう言つて思はず兩手の拳を握りしめました。

2 八階と二階

一緒に連れて下さいと、熱心に謙一は頼みましたが、用心に用心をする方がいゝといふので、強ひ

二六
て後に残すことにしました。明る目の午後でした。守屋も滋も、今日はすつかりと姿をかへてゐます。まづ守屋は、眞黒な口髯をつけて、その上、まん圓いセルロイドの鼻眼鏡をかけ、さうして

滋は、右の目に白いガアゼをあてて、黒い珠の養生眼鏡をかけてゐます。かうして二人は店を後にしました。

「滋さん、よつほど氣をおつけなさいよ。」

二人が昨日のビルディングの前に來たとき、守屋はさう言つて、滋を振り返りました。

「え、大丈夫です。」さう答へた滋の聲も、微かではあるが、必死の思ひが籠つてゐます。『さし當



り、守屋さん、どういふ風にすればいいのでせう？」
「とにかく、あの昨夜見た七つの窓が、概そどんな部屋で、そして何ういふ人が住んでゐるか、それを第一に確かめなくてはなりません。まづ、二階三階四階と、順々に調べて行くことにしましょう。」
さすがに滋は、だん／＼と氣味が悪くなつて來ました。あの滋を

襲つた怪人が、何者であるかは無論わかりませんが、せんか、もう顔を見覚えられてゐるのですから、何處で捕まるか、



考へれば危険なお話です。

「滋さん、あなたは昨夜の、七つの窓の位置を、お憶えになつてゐるでせうね？」そつと守屋は囁いたのです。

「え、はつきりと憶えてゐます。もうその窓が、あのビルディングのどの邊の部屋に當るか、大概の見當もついてゐます。」

「そんなら、怪しまれるといけませんから、あなたと僕と、別々に調べて行きませう。僕はエレベータであの八階に昇つて、上から順に調べて行きませう。滋さん、あなたは二階から、上へくと調べておいでなさい。そして途中で會ふことにしませう。」

把手を、刻一刻と左に捻ぢようとしましたが、案の定、鍵が掛つてゐます。

滋はもう一度邊りを見廻し、そつと腰を屈めたかと思ふと、その小さな鍵穴から、片目を閉つて、内部を覗いて見ました。

——ほんの三坪くらゐの小部屋で、その中程にはテーブルが一脚と、お粗末な椅子がこれも一脚、その外には何一つありません。言ふまでもなく、どんな人もゐないのです。

がつかりとして、滋はそこを去りました。さうして又もう一階、階段を上つて、あの二階の窓に當る部屋を、やうやくに探し出しました。

3 父の姿

ビルディングの内部は、いろいろな人が、うろ／＼と歩いてゐました。あの丸の内の、或るビルディングなどとは違つて、一番下もこゝでは、商店などは一軒もなく、どれも皆普通の事務室や俱樂部ばかりでした。

曲りくねつた階段を傳つて、滋は只一人二階に昇りました。さうして恰度あのクロス・ワードの、一番下の黒い所に當る部屋を、やうやくに探し出したのです。

「さうだ。確かにこの部屋に違ひない。」

心の中で呟いて、滋は暫く足音を忍ばせながら、その邊りを往きた。

然しこれも亦、鍵が掛つてをります。覗いて見ても、怪しいものはありません。

次は三階で、ドアの番號は「二〇」それから、その次は四階で、番號は「一四」

本當にこれでは、只部屋の番號だけを、調べてゐるやうなものです。豫期に反してそれ等には、怪しい物も怪しい人も、何一つ見られません。

「滋さん。」

その時不意に、カサ／＼とした囁き聲が、滋の直後から聞えしました。黙つて振り向くと、守屋青年が額に細かな汗を浮べて、切りに

來してゐました。四五人の事務員や女タイピストなどが、時々彼方此方に姿を見せるほかは、別段怪しいと思ふやうな者も見えませんでした。

不圖滋が、その部屋のドアの上にある、摺硝子の欄間を見ると、そこには黒字で「二〇」とありました。さうしてドアには金文字で、「中井法律事務所」とありました。それを眺めてゐると、廊下には不圖、人の往來が途絶えました。

「今の内に調べてやらう。」

滋は思ひました。そして、同じやうに足音を忍ばせて、そつとそのドアに手をかけました。

一心に、自分一心を勵ましなが

口を擦るやうに、びく／＼と動かしてゐます。

「どうしました。守屋さん。」

「大變です。」

守屋の眼は異様に光つて、その聲は、細かい慄へをさへ帯びてゐます。

「え？ 八階の方に、何か變つたことでもあつたんですか？」

「お父さんのお行衛がわかりました。」

「お父さんのお行衛が、知れたのですつて？」

滋の目は、さう言ひ終らぬ内に、強く輝いて來たのです。

4 五百七號室

「それは一體何處なのです？」



「五百七號室です。」

「五百七號室といふと、何の邊の部屋に當りますか？」

「八階の頂上です。八階の一番右に見えてゐた窓ね、あの窓に當る部屋ですよ。」

「解りました。それでは一時も早く、助けに行きませう。」

と早くも一歩、飛び出した滋の腕を守屋は両手で止めました。

「お待ちなさい。直ぐに救へる位なら、何も問題はないのですが。」

「どうして？」

「とにかく、こゝで話をしておて、見つかるといけません。表へ出てしまひませう。」

言はれるまゝに滋は、ビルディングを去つて、再びお深端の方を

歩いて行きました。

「まあ大變なんですよ、滋さん。五百七號といふあの部屋にはね、

恐ろしい仕掛があるんです。それに愚圖々々してゐて、折角見つかったお父さんを、又何處へか移されでもしたら、それこそ大變ですから。」

「どんな仕掛があるんです？」

「僕はお約束の通り、エレベータで八階に昇つて、あの部屋の前まで來たのです。ドアには「お」とありまして。それから僕は、人の絶え間を見計つて、そつと鍵穴から覗いて見ました。すると滋さん、お父さんがその中にゐらつたやうなでせう。」

「それから？」

「僕は思はず、ドアの把手に、手をかけようとした。すると、ビリビリツと右の手を傳つて、身體全體に感電しかけたのです。もう少しで僕は、大變な目に會ふところだつたんです。」

「把手に電流を通じてあるんですね。」

「さうです。」

「お父さんは何うしてゐました？」

「部屋の中は薄暗くて、よくは見えませんでした。ちつと椅子に腰かけて、時々胸に手を組んでは、何か一心に、お考へになつてゐました。」

「だが守屋さん、外から見えるあの窓は、すぐに開閉が出来るので

はないでせうか？ どうしてお父さんは、逃れようとならないんでせう？ 又何とかして、ドアの外や下の道路を行く人に、合圖をなさうと思へば、出来ないこともないのに。」

「僕も最初はさう思ひました。けれども、第一、ドアの把手にだつて、あんな恐ろしい仕掛があるんですもの、たとへ窓の開閉は自由に見えてゐても、どんな仕掛になつてゐるか、想像もつきません。きつと逃れるに、逃れることも出来ないんでせうね。」

何かしら滋には、得心の行かないところがあつた。では昨夜、あの五百七號室に當る窓の灯が消えて、同時に自動車が出て行

つたのは何故でせう。

けれど、兎に角にかうして、お父さんの居處がわかつた以上は、何を措いても、第一に救ひ出さねばなりません。

果してそれが實際の父であるか何うか、ひよつとして守屋青年が、店長のことを思ひつづけてゐる餘りに、何か錯覺のやうなものでも、見たのではあるまいか。それともう一つは、その五百七號室の模様を、確と見ておくために、二人はもう一度八階に昇りました。だが、もう部屋の様子には、恐ろしい人相をした男が、二人三人と見張りをしてゐるのです。『駄目だ。もうかうなれば、外部からお救ひするより外に、道はあ

りません。』守屋は決心の色を深めて、かう囁きました。

「外部から？」

「え、もう到底、部屋に入つて行くことは出来ません。と言つて、これも非常な冒險かも知れませんが、あの五百七號室の硝子窓を壊して、そこから何とかして、お救ひしようかと思ふんです。何うでせう、滋さんのお考へは？」

「……」滋は答へる代りに、ちつと守屋の手を握つて、その強い決心を示しました。

5 屋上の冒險

父が八階の五百七號室にゐるといふ、確めを得た二人は、刻一刻燃えるやうな冒險の血に溢れ、父

を救ふ堅い決心は、矢のやうに迫つて來るのでした。

父が末に

逃れないのを
見ても、如何
にその部屋に
恐ろしい装置
が施してある
かは、二人の
想像にも及び
ませんでした。
外部から救ふ



も、同じやう
に恐ろしい冒
険ではありま
す。然しながら、内部へ躍り込む
よりは、まだしもその方が、幾ら

その日の夕方、守屋と滋とは、大勢の人にまぎれて、神岡ビルデ

かでも危険が少いやうに思はれました。

イングの中へ入りました。さうして一番頂上の九階にある、屋上庭園に上りました。

五百幾つかある事務室の雇人も歸りを急ぐのか、こんな屋上の庭園に上つてゐる者は、誰一人とてありません。

「まあ何うです。東京中が、一目に見渡せますね。」

暫くの間は、何事も忘れたやうに、二人はちつと下の方を見降しました。

「守屋さん」滋は囁いたのです。『あのストオブの煙突の蔭に隠れてゐませうか。』

「ストオブの煙突、これは恰度幸です。」

二人は、大きな四角いストオブ

の煙突の後に、直ぐ身を縮めて、思ひ／＼に踞りました。

密度の細い夜の霧が、闇の中を厚く蔽ひ、もう何時間かは過ぎ去つて、遙か下に見える東京全市の灯影は、まるで夜光蟲の光のやうに見えました。それも亦、次第次第に消えて行つて、都會のどよめきともいふ、一種の物音も、いつの間にならなくなりました。滋は、そつと煙突の蔭を出ました。守屋もまた、這ふやうに姿を現しました。忍び足に手をとつた二人が、あの五百七號室の眞上に來たとき、言ひ合したやうに首を突出して、その下を覗いて見ました。

ばうつと窓には、棒色がかつた



電話(賞)

綴方

藤澤佐次郎選

神奈川県平塚市海岸

木藤浦子

(十五才)

『チリンチリン』電話だ。『お前かけて見て』とおかあさんに言はれましたが、いやなので急いでおけいさんを頼んだ。私は又こちらで本に目をおとした。するとおけいさんが『浦子さんにですつて』と言はれてびつくりしてしまつた。私はまだ二三度しか先にかけた事がありません。それに私にか

明りが、點いてゐます。今夜はどうやら、灯の點いた窓は、この五百七號室だけらしいのです。

守屋は直ぐさま、用意して來た太い綱を、屋上庭園の石柱に結びつけました。

『さあ、滋さん、早くこれに捕つて。』

『ようし。』滋はいかと、その綱を手に取りました。綱は刻一刻と、五百七號室の、カーテンの掛つた窓に向つて、下つて行きました。それにぶら下つた二人は、兩足を強く綱に絡ませ、一尺二尺、三尺四尺と降り、やがて五百七號室の、黄色い窓明りの側まで、懸命の努力で下つて來ました。綱を握りながら、

一三四

片足を窓の框にかけて、側面から眺めると、一寸程カーテンに隙があります。そこに父の姿が見えてゐました。『お父さん。力いっばい綱に頼り、思はず滋が、さう叫ばうとした時でした。可笑しなこともあるものです。その父が、左手に銀色のペルを提げ、右手に細い合金の棒を握つて、壁の方へ歩いて來たのです。のみならず、その白い壁と戸棚との間には、小さな一つの放送機が見えてゐます。その途端に、はつきりと鋭く、そのペルが鳴りました。かん——かん——かん——。父の右手は金屬製の棒で、ざら／＼と光るペルを、放送機の前に打つたのでした。』

(次號完結)

かつて來たことなど一度もないのですから、ほんとに胸がどき／＼し出した。おけいさんに始め言つて貰はうとしますと、少しも向ふからかゝつて來ません。いくらチリ／＼鳴しても、ちつとも向ふから來ない。私はもう誰からかとかわくわくしてゐる。平賀さんか知ら

東京に行きなかつたさうだから、きつとおかけになつたのだらう、と一人で想像してゐますと、やつと向ふからチリ／＼とかゝつて來た。心配さうに私が出た。『どなたですか。』『わたし高橋です。』『高橋さん。』『え、あそびにいらつしやい。』あ、高橋さんだつたのか。でも高橋さんが珍しいこと、とやつと胸がすうつとした。そしておかあさんにおことはりして遊びに行つた。高橋さんのお家に着く

弟を思ふ(賞)

神奈川県高座郡大野小学校高一

河本守正

去年の正月の事、方々で、大へん、はしかがはりました。

四番目の弟は、運悪くその病氣にかゝつたのです。まだ小さかつたので、病氣にかゝれば苦しがるからそれを見るのはすいぶん可哀いさうでなりません。私は大正十四年を迎へたので、朝早く起きてお父さんと二人で山王様へおまゐりに行きました。其の時はまだ暗かつた。おまゐりして歸つて來た



文正田保久 縣野及飯町田 (賞)「日の冬」

らあまり家の中がさばがしいので、お父さんは「これは何か變事でもあつたのか」と言ひながら家へ入つて行くと、おばあさんも起きてゐて「林造は早く歸つてくれはよいが」と心配さうな顔をして言つて居られたところだつた。お父さんは「何處かへ行くのか」とたづねた。

へいつて「末、苦しいかあ」と言つたが何のへんじもなく苦しがるので、可愛い弟を見てなみだが出て止らなかつた。其の中にお父さんと一つしよに山形さんがきて弟の身體をみて「少さいから氣をつけないとあぶないで」と言つてかへつた。お母さんは心配さうな顔をして弟をだいてゐた。私はお母さんのそばへいつてなぐさめ

た。其の中に近所の人に来て色々心配してくれた。おばあさんは「元日から何の事だんべえ」と言つてゐた。其の日はすぎて丁度三日の晩、弟は死んでしまつた。家中の者は「林造がやく年だから、子がやくを持つていつたアとあきらめなければしょうがねへ」と言ひました。弟は四日の日にとむらひました。丁度おないどしの友達文夫さんを見ると、弟の事が思はれる。昨日も文夫さんの遊んでゐるのを見て、弟のあはれな事である事をなきました。

歸つてきたエス(賞)

大阪市東區東雲町二丁目一七八

中村速生 (十五才)

エスがあまりほえるので、たうとう練兵場へ捨てることになりました。

した。つないであつたくさりをはどくと、エスは捨てられることもしらないでお母さんの方へ走つて



「三浦三崎」(賞)

東京本郷本町

内山秀郎

行きました。僕は「もうエスと遊べないのだ」と思ふと何だか悲しくなつて、いつまでもエスの後姿を見送つてゐました。その中に高木君がお風呂へ誘ひにきたので一緒にゆきました。お風呂でもエスのことが氣にかゝつてなりませんでした。一時間程してお風呂から歸つてくるとお母さんももう歸つてをられました。僕は「おづ／＼しながら」お母さん、もうエスを捨てゝきたの」ときくとお母さんは笑ひながら「捨てただけで今歸つてきたんだよ」と言はれた。僕はなんだか嬉しくなつて思はず裏からエスがかけてきて尾を振つて僕にとびつききました。僕はエスをだきあげて「歸つたか。歸つたか」といつて頭をつよくなでてや

ると、エスはクインクインと小さく鼻をならしてゐました。お母さんは「やつぱし内がいのね。もうほらない、ほらない」と言つてをられました。

可哀さうな子

岩田三田四國町二番地二號

千代田愛三 (十四才)

昨日の事でした。夕方、學校がひけてから、僕は岸君や山田君達と一緒に、がや／＼話をしながら歸つてきました。丁度、僕達が芝公園のさびしい廣い通りを歩いている時でした。ふいに右の方から一人の十ぐらいの男の子が、飛び出してきて、すばやく左の方の林の中にかけてゆきました。續いて後から五六人の男の子が口々に「正公! やい待て!」と叫びな

「家の犬」(賞)

東京大久保百人町

竹田 八千代



がら追ひかけてゆきました。『何んだらう。』岸君は立ちどまつて言ひました。『けんかだ。』僕はさう言ひ

ました。その時、左の林の方から人ののゝしる聲や泣き聲が聞えてきたので、僕は急いでその方へかけてゆきました。するとそこには、さつき逃げた男の子がしくしく泣いてゐてそのまわりには五、六人の男の子が何かのゝしつてゐました。そして僕達が来るのを知ると男の子達は驚いた様に僕等の方を見ました。『どうしたんだい。』山田君はその中にわりこんで言ひました。僕も、むこうの方はみんな十ぐらゐだからえはつて『けんかなんかよせ。』と言ひました。『正公が、あたいの弟にでつかい石をぶつけたんだい。』と木の枝を持つてゐた一人の男の子が、泣いてゐる子をにらみながら僕達に言ひました。『このくらゐの石。』と又その子は言つてそばに落ちてゐ

た石を拾ひ上げて見せました。すると岸君も山田君も『悪い奴。』と泣いてゐる子に言ひました。僕もその子が小さい子に石をぶつけた悪い奴だと思ふと、なんだか泣いてゐるのが、こきみよい様な氣がしました。そしてその子をうんとあやまらせてやりたいと思ひました。『正公の弱虫！小さいもんばかりいぢめてゐやがら。』『おぼえてゐろ！正公。』なぞと五、六人の男の子は口々にのゝしりながら、おぼつてむこうの方へ行つてしまひました。けれどその子はだまつて泣き續けてゐました。僕は、一人の子を五、六人もたかつていぢめるなんて、ひけうな奴等だと思ひました。そして僕はだん／＼その子が可哀さうになつてきました。僕はその子をその子の家まで一緒につ

れていつてやらうと思つて『君の家、どこ。』と聞いてみました。けれどもその子はたゞだまつて泣い



「先生の顔」

北海道苫小牧町

渡邊 キ 田

てゐました。その内、岸君と山田君が『早く行かう。』と言ふので僕も仕方がなく一緒に歩き出しました。しばらく行つて僕は後をふりかへつて見ました。けれど、もうさつきの子は家へ歸つたのか、何所にも見えませんでした。

床についてから

岡山縣眞庭郡三川村維新校尋五

池田 二郎

私と兄とは炬燵にあたつて雑誌を見てゐたが、一枚一枚と見て行くうちにねむくなつたので『兄さん、寝ようではないか』といふと『まあ、まつてをれ、もう少し見てから寝るから——』といはれたので、少しの間、辛棒してゐたがどうしてもねむくなるので『もう辛棒が出来ないから寝るよ』とい

ふと、『それほどねむければねるがえ』といはれたので、ふとんをかけて、ねむりかけた。すると、『二郎、これから面白いことをするのだから少うし待てよ』といはれたので、ねむい目をこすりながら待つてゐると、兄は私の傍にねて、ふとんを頭からかぶつて『ふとんの中が真暗いだらう？これから、鼻を抑へやいこをしようではないか』といはれたので、『それは面白からう、それでは僕から先にやるよ』といつて、鼻を抑へてやらうと思つて手を出すと、『そこは目だ。鼻はその下だ』といつたので、こんどこそはと思つて抑へると、『そこは口だ』といつたので、今度は、どこともなしに抑へてやると、漸く鼻を抑へたので私は聲をあげて喜んだ。『どうだい、うま



「景風」 市田 四渡 板倉史郎

た。それから何度
もくくり返して
ゐるうちに、ねむ
さを忘れてしまつ
た。

さみしかつ た夜

山梨縣北都留郡廣
里東校尋五

河西 元江

からういふと私がいふと「お前は、
ひいさか、つて抑へたから五十點
だ。さあこんどは僕の番だ」とい
つて、兄は僕の鼻の上を抑へた。
僕は「ホーラ兄さんも下手だらう」
といふと、負きらひの兄は「今度
こそは！」といつて僕の鼻を抑へ
た。兄は「ソーラ今度はどうだい
お前より早く抑へたから、僕は八
十點だぞ」と、じょうんさうに言つ

私はまいばん渡邊さんへとまり
に行きます。おちさんが信州へま
るごのようであつてゐるので、お
ばさんがさみしいからです。この
間の晩のことです。家ではおはん
をたべおはつて、みんなでおこた
へあたつて色々の話をしてゐるう
ちに時計はもう八時でした。いつ
もはやねの専造は、ねむたくなつ

たときみえて、おこたへうとくんと
ねてしまひました。おとうさんは
「専造、かさをひくからふとんへ
ねるだよ」といひました。専造は
「元江ねえちゃんもねよう」とい
ひましたが、私は渡邊さんへ行く
だからいやだといふと、おつかさ
んがちひさいころで「せんぞうは
ふとんへ入ればちきにねるから、
きがすむまでねてやれ」といひま
した。そこで、いつしよにねてゐ
るうちに、私もいつのまにか、せ
んぞうとねてしまひました。
ふいに「元江元江」と私をよぶ
聲がしたので、はつと思つておき
あがると、おつかさんが「もう十
時だよ」といひましたから、おど
ろいてねむいめをむりやりにおほ
きくあけながら急いで渡邊さんの
所へゆきました。私のかつこうが

吾が家

和歌 縣伊都郡妙寺町十四
齋 藤 邦 一

おかしいと云つて、おばさんはわ
らつてゐました。つねをさんはひ
るまのつかれでいびきをかいてね
てゐました。上に上るとおばさん
が私にさきほしをかつてきておく
れといつて、光つた二十錢ざんか
を私の手によこしました。私は二
十錢をにぎりしめておもてへでま
した。ふだんおくびやうの私は、
もうむねをどきどきさせながら軌

道會社の長屋の前をとほりまし
た。長屋の前には光ちやんのおし
めであらうか、月にてらされてう
すぐろく光つてゐました。あたり
はしんとしたたゞ川のざあざあと
流れる音がするばかりです。暗い
九五のへいのかけを通る時、清月
の牛肉をにるよい匂が、ぶんとか
ほりました。いそいで古屋へいつ
て、二十錢おちさんに渡して、ふ



「んやちねみ」 山梨縣東校 子宮芳雨

くろへいつぱいの
きりばしをもらつ
て、渡邊さんの家
へとんでかへりま
した。そしたらお
ばさんが「どうも
ありがたう」とい
つて、私にさきほ
しを六つくれまし
た。私はそれをた
へながら床の中へ
入りました。

僕の家は北から南に長い家であ
る。前には大きな製絲工場があつ
て三月頃になると、女工等は内の
裏に美しく咲いて居るじんちよう
の花を折つて頭にさす事がある。
また、吹く風、女郎花の香をふく
む七八月頃になると、すぐ前の女
工部屋で盆踊りをやる。眠りなが
らうつつに歌の聞くのも又一つの
おもむきがあつた。其の頃は僕の
内に時計がなかつた。そして僕は
度々時計を見に行つた。父はそれ
から銀行へ行へ爲に、驛へ行くの
であつた。僕、内に關係の深い製
絲工場も、三四年前からやめ、今
ではすつかりこぶつて、ぼう／＼
と生えてゐる草の間にスチームの
管や、かまや、煉瓦などが残つて
ゐる。そこは、わんぱく小僧の根
據地となつてしまつた。



通信

自由畫選評

山本 鼎

久保田正夫君の『冬の日』(推薦首席)は面白味のある繪だ。ペーパーの立木は色も繪の具くさくさしていないしデッサンもよくないが、枯木の方はなかくいい。全體に省略がうまくいつて居る。前景の草土堤は平板にすぎる。

内山秀郎君の『三浦三崎』(推薦次席)實感の躍動して居る繪である。泡を立て、砂岸に押し寄せて来る波の感じがよく出て居る。

竹田八千代さんの『家の犬』はしつかりした素描だが、面の觀察がないので丸味が

見えない。脚は棒のやうだ。

坂倉史郎君の『風景』松の木の雄々しい姿勢がよく出て居る。

渡邊キヨ子さんの『先生の顔』キヨ子さんは色彩家だ。スケッチ風の運筆も輕妙であるが物は描けて居ない。

兩宮芳子さんの『みれちやん』は馴れない描きぶりだが、眞實味のある繪で、顔がよくかけて居る。(十五年四月)

綴方の選後に

齋藤 佐次郎

▽今月は大きい、作もありませんでした。先月にくらべると、かなり見劣りがします。しかし、入選作は、いづれも相當の出来ばえである事は嬉しい氣がします。

▽木藤浦子さんの『電話』は前月號に掲げた管だつたのが、紙面の都合上今月號に廻つたのです。感想は前月號で述べた通りです。

▽河本守正さんの『弟を思ふ』神奈川縣大野小學校の投書ですが、いゝ作が深山にあつた中で、これだけを先づ選び出ししました。たゞしい中に、しみみりとした情

緒をこめた純な作です。この學校の人達は非常に上達されて居る。

▽中村連生さんの『歸つてきたエス』可愛いい、エスに對する心持を、短い文字の中によく現してゐます。くどくどと書かないのがいい事です。最初の悲しみと、後の喜びとが、上品といひたい位に餘計ものを云はないで、その思ひが述べられてゐる點を推薦します。

▽千代田愛三さんの『可哀さうな子』これは、書ききれない爲のくどくどしさがありますが、進み方としてはいいと思はれます。自重なさい。

▽池田二郎さんの『床についてから』大變に上手な作です。

▽河西元江さんの『さみしかつた夜』圓満な作です。齋藤邦一さんの『吾が家』どこか藝術味を感じさせられる作です。小口審子さんの『故郷へ』前號で述べたと同じやうな感じですが。

童話の選後に

齋藤 佐次郎

○大變に面白と思つて選び出した『飛行機と狼』は、伊澤幹夫氏の作で、前月號で推薦したばかりなのでしばらくお預りとして置きます。何れ機を見て發表しますが、この作者は相當な表現力を持ち、しかも、

内にこめた力を持つてゐる事に敬意を表したいと思ひます。今後ますます勉強されん事を望みます。

○次で、面白く感じたのは中村信郎さんの『一塊の土』でした。アンデルセンでも取扱ひさうな題材で、また此の作者自身も、ア

力がないと、美感が出ないと見えます。

○岩下末吉さんの『嘘つき太郎』といふのも上手に書けてゐました。しかし、よくある筋で、それから一歩も出てゐない爲めか面白さが足りないのは止むを得ない事でした。さきよりきつた話の多いのはちと開口で

金の星誌友募集

金の星の誌友を募集致します。誌友には色々な特典や便宜がありま

すから、振つて御加入下さい。ハガキで本社へ御申越次第、早速誌友規則を御送り申上します。

誌友には毎月『小馬』と云ふ美しい小雑誌を無代進呈致します。『小馬』は誌友諸君の研究室であり、娯樂室であります。誌友の方々の、童話童謡に關する研究や、自作の童話童謡や、其他隨筆消息等あらゆる種類の原稿を掲げます。誌友の方々は、どしどし御投稿下さい。

アンデルセンなどかによれてゐるらしい想はせるところも見えますが、兎に角相當の力をもつて追ふ作です。しかし、肝心の主人公が『土』であるだけに美感が非常に低しく、讀んだ後に、矢張り土をかんじやうなバサ／＼した物足りなさが残ります。

『土』といふやうなものを扱ふには、餘程に

す。『ある處に』××助といふお爺さんがありました。『とか』ある處に××吉といふ馬鹿な子供がゐました。とかいふ書き出しで、まあそれいゝとしても、その先きが

ありふれた童話から一歩も出てゐないので、おさまりの型にはまつてゐるのは、またかと讀む方でも閉口です。元氣な諸君に

編輯室より (記者)

○青葉の季節にふさはしいやうに、今月號はスガ／＼しいものにしました。

○河盛久夫先生の漫画芝居はいよいよ大評判となつてゐます。新進漫画家として今や第一の評判を持つてゐる方だけに、今後はいよいよ面白くなりませう。

○今號ではじめて皆さんにお目にかゝる作家の紹介をいたします。『居夫の孝行』の作者西尾千賀子さんは菊池寛先生のお弟子さんで、同先生の推薦になつた作です。また『ピツクリ兵衛』の作者小林さよ子さんも小島政二郎先生の推薦になる女流作家です。こども醫學『紅い汗青い汗』の作者古宇田徹太郎先生は醫學博士、有名な方です。

新らしく出た本

一四四

新らしく出た本

○水滸傳物語

東政二郎(京都)	藤井 謹古(京都)
石原 孝(東京)	渡邊 幸四(北海道)
森本 三雄(熊本)	山村 加枝(熊本)
尾關二三郎(滋賀)	齊藤 好治(歌山)
齋藤 邦一(歌山)	深井 博重(秋田)
桑名 正城(三重)	田中 義明(歌山)
河合 正二(愛知)	永岡 武三(歌山)
竹田八千代(東京)	中筋 定雄(京都)
河西 良子(長野)	沖津 幸知(東京)
藤文 理作(静岡)	大石 良也(静岡)
岡本 一子(愛知)	齊藤 房(歌山)

幼年詩揭載外佳作

島身	末吉(千葉)	久保田曉藏(東京)	山田	佐藤	吉田たけの(山形)	石澤	山村	戸籍	武田
龍三(山形)	千代田龍三(山形)	斯藤茂治(山形)	富子(秋田)	善子(福島)	初美(山形)	知葉(群馬)	一郎(熊本)	たけの(東京)	宗光(山形)
篠原	はつ(千葉)	菊池ゆき子(東京)	鶴崎	林登男(山形)	海上正男(長野)	鵜崎公雄(福岡)	杉原	根本悦子(千葉)	櫻潮(明)(東京)
千可(千葉)	はつ(千葉)	岡崎正雄(山形)	ナガラセイ二(東京)	花菱ミツ(福島)	佐藤政夫(神奈川)	築治岩手	千可(千葉)	松原	浅井

縱方揭載外佳作

廣石	卜口	山口	進藤	卓三	秋田	鶴崎	公雄	福岡
小杉	キヌ	長野	末廣	朝人	山口	反田	務山	
金子	正	神奈川	世古	定雄	三重	岩本	順喜	和歌山
安達	和盛	大分	山本	知恵子	山口	飯島	光男	長野
栗田	繁雄	秋田	深井	博真	秋田	菊池	養治	岩手
西澤	政二	京都	佐藤	武男	秋田	岩本	順喜	和歌山
佐藤	金也	秋田	上沼	トキ	長野	岩本	順喜	和歌山
北原	民雄	長野	飯島	光男	長野	岩本	順喜	和歌山
村西	義雄	北海道	反田	務山		岩本	順喜	和歌山
久保田	曉雄	東京	鶴崎	公雄	福岡	岩本	順喜	和歌山

童話揭載外佳作

中村	信耶(東京)	東	政二郎(京都)
石橋	宗雄(福岡)	柴田	純三(愛知)
上田	道平(靜岡)	稻並	桃子(東京)
杉山	金湖(神奈川)	粕	運一(香川)
茂木	千鶴(東京)	藍田	保(茨城)
野澤	鶴峰(新潟)	川西	英雄(廣島)
中村	造生(大阪)	大橋	孝(兵庫)

童謡掲載外佳作

都築 保二(愛知) 森 ぼたる(愛知)
 中西みよ子(山形) 野坂 浩(福岡)
 福永幸次(東京) 河野 砥吉(朝鮮)
 岩谷 貞三(秋田) 平澤 哲男(青森)
 中村 武男(東京) 阪野 潤(大阪)
 梅瀬よし子(和歌山) 葛本 和夫(高知)
 村山俊太郎(山形) 二 關 昌榮(岩手)
 川口 秀雄(東京) 河邊さみ子(神奈川)
 山島 洋二(東京) 古村 徹三(大阪)
 山照二郎(大阪) 比田耕佐(東京)
 北田つよし(東京) 西岡さかえ(長崎)
 北田馬 英二(神奈川) 村上 麗草(岩手)
 江藤 健二(神奈川) 岡本たか子(兵庫)
 守本 芳華(大分) 三浦 清湖(山形)
 宮本 純吉(熊本) 宮内伴三郎(新潟)
 橋本 暮村(群馬) 松井 隆二(神奈川)
 嶺川光太郎(東京) 森本 清一(山口)
 坂口 正彦(千葉) 若沼 義郎(岩手)
 千葉 仁郎(東京) 若西 光郎(京都)
 内山よし路(東京) 島本 夫二(愛知)

樹原 延夫(長野) 影山しく子(東京)
 西村 太一郎(神奈川) 新海 勝兵衛(山梨)
 四村 浩信(和歌山) 綾部 玉樹(不列)
 細川 公正(石川) 岩下 米吉(長野)
 佐藤 幸信(大分) 近藤富士雄(京都)

童謡掲載外佳作

【大人篇】

大分
子供

[illegible]

新誌友名簿

舞鶴	惠美子	京都	河野	祇吉	朝鮮
豐原	園子	東京	都築	保二	愛知
高山	好己	青森	鈴木	敬子	宮城
中村	武男	東京	治部	直	兵庫
服部	良一	青森	(以下次號)		

○水滸傳物語

少年少女世界名編物語の四編です。これは有名な支那四大奇書の一つで、伏魔殿からは出て来た百八人の魔王、即ち一百八人の豪傑物語です。篇中の悲しい話や、勇ましい物語は、如何に讀者の心を誑かせるでせうか。装幀、挿畫に例により、この叢書版の美しきです。四六判一八四頁、三紙版外挿畫數葉、定價九十錢、東京市外上駒込

○ラムラム王（武井武雄著併に繪）

かつ「金の星」で、大好評を得たラムラム王は、髪を更め一冊の本となつて出た。著者獨得の輕妙な筆は、文に隨に、他に眞似の出來ない面白味がある。殊にその奇抜な描寫は、よくラムラム王の一生を現してゐる。この本も、永く世の坊ちやん、嬢ちやんに待たれただけに、定めて多くの歡迎を受けけるであらう。(四六四一—四六四三頁) 三色版外挿畫十數葉、定價壹圓四拾錢、東京牛込區神樂町二ノ一、義文閣發行。

○ひなどり樂譜（第一集）

三、樋口朝影、作歌は酒田廣介、村形長善

○母を尋ねて三千里（金の星社編）

原書は伊太利文豪アマミナスの世界的名作で、母を尋ねて三千里（ニ維威國—父ちやんのか病）（少年斥候）（少年策士）（少年英雄）（少年の看病）（少年の血）（少年敵手）等、少女ローマニヤの血（少年敵手）等、少女の讀み物として、一應讀んだら實に忘れぬ物語りばかりです。そして表紙の繪と口繪は、寺内萬治郎先生の腕振振れた油絵に、三色版で、篇中の挿圖も同先生の傑作ばかりです。本篇は好評を受けてゐる、世界少年少女名著大系の二十一編として、金界少年少女の自費の書であります。四六判八頁、三色版外挿畫數葉、定價九拾錢、東京本郷區動坂町、金界社發行。

○勞働の少年（沖野岩三郎著）

「父、三郎と一弟の如くは下賤にて、オオノ貴族の三嗣とて出たのは本非ずです。破出に暴動の起つた時、殺された坑夫の二兒の思ひで語ります。さすがにこの著者ならではと思ふが、全篇思ひつけの面白さで、その面白さの中に多大の教訓を含むてゐる。大人も子どもも讀んでためになる本です。兒童教養にとても大膽なものである。著者の意見を見せる著者の一つ」に現はれてゐるのを見送してはなりません。四六判二二三頁、三色版外挿函數集、定價壹圓貳拾錢、東京市神田區板町、金の星社發行。



讀者だより

▼櫻もそろそろ散る頃となりまし
たね。緑に輝ゆる初夏を迎へるの
も遠くない事です。一年の四季から
永遠に冬の一字を除きたいと思ふ
事もあります。その冬さへ去つて
しまへば、すべて若や春が来ま
す。そして、今吾々の眼前に横は
つて居るのは夏です。雄壯な夏
です。「金の星」もまた、進むで
せう。「金の星」童話欄を改革せ
よ、の聲を聴きますが、全然今の
童話欄を改めると言ふのなら反對
します。現在の童話欄に真を増し
そして多くの童話作家を紹介せよ
と言ふのなら賛成です。掲載外佳
作に幾度か名を見せ置きたい中
に、その名を消してしまふ人が餘り
に多い様です。私は、たとひ拙く

とも、それで終りたくない者であ
ります。その望がいつ果せるや
ら。東京 川島秀雄
▼川島さんの議論は、始めは大へ
んな元氣でしたが、終りでなんだ
か、なげなげなうたて来しね。
(給付)

より少し薄い紙に書くといけませ
んか。又鉛筆や墨で書くといけま
せんか。それから書方は出しま
す。それなら山田加枝子
▼自由書はなるべく高麗紙に大き
くお書き下さい。墨でも鉛筆でも
クレヨンでもなんでも構いません
が、青インキだけは避けません。
書方は募集して居りません。併し
よい字が出来ましたら、是非拜見
下さい(係り)

願正寺内 中筋定夫
▼記者様、私の妹が金の星の愛読
者なの。もうそれはずつと前三年
も前からなのです。私の話の種な
らそれは、うたさん持つてあま
す。もう記者さまに負けない位で
す。今度は大さう面白い「不思議
な鐵の棒」といふのを出しますか
られ。ぢやあさうならバすみ千
年十五歳)

▼金の星社誌友諸君、もうやがて
夏が来ますね。諸君の奮つて居るの
を私は今兵營内の僅かの餘暇に拜
見して居るのです。八月まで兵隊
さんです。オイチニ、オイチニ
で暫く童話も怠けて居ます。九月
からは又大聲を出して、諸はうと
思つて居ます。お手紙下さい。小
倉歩兵十四の三の六中村暢一 名和
暢児です。

▼東北の片田舎の我等の村へも、
あのすさまじい吹雪がなくなり、
暖かい春風がそよめいて来ました
野にはタンポポが咲きました。樂
しそうに小鳥の聲も聞えます。山
に於ては此の村へも春が来た
のです。あ、春だ！ 春だ！ の
んびりとした春だ！ 皆さん「金
の星」を輝かせませう(秋田 岩
谷貞三)

▼記者様お變りございませんか。
三月號の金の星の童話掲載外の佳
作と云ふ所に私の名が出て居りま
したので、ほんとうにおどろきま
した。私のやうなあんな下手なの
が佳作となる程よかつたのかと思
ひます。何だか夢のやうな心持
がいたしました。これから一生懸命
に毎月投稿いたしますからどうぞそ
よろしく(小山けい子)

▼東北の田舎にもボー／＼暖い春
が訪れて来ました。春が来ると同
時に、僕等も學校を卒業し今年か
ら國家の重要な農産物を作る農
夫となりて自分の爲、村郷、國家
の爲、ひいては世界の爲に働かれ
ばならぬ身となつた。其の働きに
重要なものは慰めである。私の働

房々とした毛と可愛い目の持主
である幸と、毛織編む無心な少女
の表紙がほんとにうすです。き
つと寺内萬治郎先生でせう。小人
の國にある様なある雲が静か
に流れてゐます。自由な此の春を
元氣よく過ごしませう(長野 飯
島光男)

差上げたので可愛い目ですが何に
しても紙上へ出せないのは遺憾に
おもひます。終りにのぞみまして
「金の星」の御繁栄と愛読者の皆様
の健康をいのりつ、筆をおきます
(東京 中村錦喜子)

な上げて下さい(長野 山口生)
▼金の星五月號、すばらしい五月
號、美しい繪、面白い繪おはなし
で、バイです。寺内先生の表紙、
岡本先生の口繪ほんたうに立派で
すね。沖野先生の要さん、おさん上
京の巻は中々面白い。其他水守先
生の五月の友、久米先生のあゝ無
情等は、ほんたうによいお話だと
思ひます。それから懸賞創作の中
で綴方の「金の星」が出るまで「弟
さんの有様」中々よくかいてある
ので感心致しました。僕にも経験
が有りますから特に感じました。
自由書の當選の農家は私が書いた
のです。名前をわすれて済みませ
ん(東京 津浦清)

金の星誌友の創作募集

規定

「金の星」は毎月童話、童話、及
児童創作の研究雑誌として、四六
例二倍大の美しい雑誌「小馬」を發
行致します。就いては下記の規定に従
ひ、特に「金の星」誌友の方々の創作
研究を募集いたします。どうぞ苦心の
お作をどし／＼御投稿下さい。

- 原稿の肩の所に、必ず「小馬原稿」とお記し下さい。
- 童話(十五字詰、百行以内)
- 童話、幼年詩
- 綴り、童話、隨筆
- 研究、論議、隨筆
- 編 輯 部 選 定

▼段々暖くなつて来ましたが、御社
の皆様には御變りありませんか
時に本日は私の拙い童話に對して
賞金を御送り下さいまして誠に有
難う御座いました。厚く御禮を申
し上げると共に今後益々「金の
星」の爲に努力することを誓ひま
す。甚だ略儀ではございますが葉
書か以て不取敢御禮申上ます(東
京 田賀かづな)

くは唯一の慰めとなる物は何んと
云つても金の星に及ぶものはない
まいと思ひます。さうなら(秋
田 池原卓三)

▼「金の星」の皆様、ごきげんよ
う。私はいつからか知らないけれ
ど御禮が好きになりました。「金の
星」を見ると讀書好きの私は本當
に愉快になります。今度の誌上、
コード座に私は大いに感謝致しま
す。それで私はお祝の記念に幕を

になる事でせう(記者)

▼「金の星」の皆様、私は金の星を
みるの一番たのしみにしてゐま
す。殊に三井先生の五百七號室と
小島先生の愛犬物語はこの上な
いよみものとしてゐます。これか
ら後も先生方は大いに金の星の名



金の星社 六月號

出版だより

『日本の児童と 藝術教育』に就いて

巖谷 小波

近來童話に關する書物はすふふん澤山出る方であるが、それも一時流行つた赤本式でなく、内容もまじめなら、装幀も親切なのが多くなつたのは大いに賀すべき事だと思ふ。

中にも沖野君のこの新著は、なまじシステマなどにとらはれず、隨處隨筆と言つた風に、言ひ度い事書き度い事を、次ぎ／＼に書きのべた、その自由なる筆法が小氣味よい。

著者はまた此書の中で、お伽噺と童話の區別について、一家の見識を明かに説いて居る。この邊にまた抱負も現はれる。この邊に更に話し方、聞き方、乃至お話

の鑑し方に付いても、懇に説いてあるがその大部分、私の云ひたいところを云つてくれた感じがした。

(時事新聞所載)

新刊書の評判

母を尋ねて三千里

▽定價金九十錢
▽送料金六錢

非常な好評です。名著大系の中でも最も評判のいい本の一つでした。忽ち初版二千部が賣切れになつた。この中から「母を尋ねて三千里」といふ題名が、先づ讀者を引きつけずにはおかないと思えます。しかも、一度讀み出したら、いよいよ此の本の立派なことを知られたでせう。

装幀と挿畫のいい事も、また非常な評判となつてゐます。寺内

名所めぐり

▽定價金八十錢
▽送料金六錢

しばらく振りに發行された本居先生の作曲集であるために、大層な歡迎を受けました。童話作曲として、はなはだしい「名所めぐり」を獻つた作曲集であるだけに、こんな歡迎を受けるのでありませう。この中には、もうすでに、各地で盛にうたはれてゐるものがあります。單純な童話作曲と違つて、かゝる「名所めぐり」は面白く作曲集こそ、本當に盛んに獻はるべきものでせう。

夢のお國

▽定價金八拾錢
▽送料金六錢

金の星童話曲譜の第十一輯として發行された「夢のお國」は、これも本居先生の「名所めぐり」と同様大した歡迎を受けて、初版を

労働の少年

▽定價金四拾錢
▽送料金六錢

實切り再版が發行されました。藤井清水先生が關西學境でならした方だけに、殊に關西方面では飛ぶやうに賣れました。いよいよ今度上京されて、この間もラヂオで此中の作曲を放送されましたが、童話愛好家は、先生の名作曲に驚かれました。殊に藤井先生の伴奏は、日本作曲家中まれに見る名手として、驚嘆されました。

金の星の曲譜も、先生の作品を加へて、一段と光彩を増しました。續いて、近く先生の作曲第二輯も發行の豫定になつてゐますが、そのあかつきは、これもまた大好評を受けるでせう。

尙表紙畫は、おなじみの露谷虹兒先生の名畫であるために、一段と注目なりました。丘の上に、一人の少女が夢見るやうな體をして、空想にふけつてゐます。もう夕暮時で、空の星がまたたいてゐます。かゝる衣冠で描かれたのが「夢のお國」の表紙畫ですから、實に藝術味の豊かなるもので、露谷先生獨特の妙味が出てゐます。先生が洋行に先きだつて、特に本社のために此の作を記念として殘さ

れて行つた意味の深いものであります。

オキノ叢書の第一編として發行になつた此の「労働の少年」は、日本童話文學の大家として何人も許してゐる沖野君三郎先生が、心血をこめて書かれたものだけに評判の盛からう筈であり、一大反響がありました。次に投書の一つ二つを掲げます。

讀後感

『家なき娘』を讀みて

三浦 大船

世界第一の高尙な童話と云ふ事を、家なき娘によつてはじめて味ひました。何と云ふ美しい童話でせう。

夢の様な明るい、楽しい、そして近代からすつとかげはなれた世界に吾々を導いてくれたのです。「パリンヌヤ」とお母さんは力なく云ふのでした。何も欲しくはありません。それよりお前に一言話しておきませう。さう、お母さんのお別れの言葉です……「お、お母さま！ お母さま！ お母さま！」

岡本綺一先生の木版表紙が、またまに見る傑作として推薦されてゐます。岡本先生は木版畫に深い研究を持つた方だけに、名所めぐりにふさはしい氣分をあらはした眞に傑作といひ得べきものです。奈良の氣分をあらはし、中央に朱塗りの丸柱が立つてゐて、それを可愛い、子供が柱よりしてゐます。三笠山が岡本に見えます。鹿がゐます。のんびりした奈良のお日よりな、いかになくあらはしてゐます。

奈良は日永だ
いつ日が暮れる
子供よ――

と唄つた野口先生の名童話にふさはしいものです。初版を賣切り、再版を發行しました。

お母さま！ パリンヌヤは叫びつゝけました。

「夢」ではありません。みんな神様のお思召のまです。お母さんは語り續けるのです。抑、でもパリンヌヤの日は涙が溢れて來ました……

お母さんは悲しい言葉をのこして遠い天國に逝かれたのです。可愛いパリンヌヤの悲しみ到底お母さんをよび返す事が出来ませんでした。やむなくお母の背案に隨つて、見も知らぬ祖父を尋ねて行くパリンヌヤは……

あらゆる困難と戦ひました。マロオタウルの工場の前は色々に彼女をなやませました。あらゆる迫害がありました。然し然し！ 遂に祖父に逢ふ事が出来しました。すべての疑ひがはれた時、パリンヌヤの心の底に裏喰ふて居た愛は、永久に無限の青空に飛んで行きました。……（中略）

まだお讀みにならない方は是非お讀み下さい。私はこの本の定價が非常に安いを見た時、金の星社の御趣旨に、深い敬服の念が起しました。（以下略）

懸賞創作募集

【意 注】 童 童 【意 注】 綴 幼 自
 年 詩 方 編 輯 部 選
 山 本 鼎先生選
 若 山 牧 水先生選
 野 口 雨 情先生選
 齋 藤 佐 次 郎 先生選
 童謡は十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として発表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には三圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づつ、賞金として早します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は「金の星」賞を早します。締切、発表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

【送】 御注文は必ず前金で御拂込み下さい
 金 送金は振替が一番便利で御座います
 の 切手代用は（送金切手）一割増しです
 意 注 第何巻第何號よりと書いてください
 住 住所姓名ははつきり書いてください
 廣告料は御照會次第お答へ致します
 大正十五年五月九日印刷納本（毎月一回）
 大正十五年六月一日發行（一日發行）
 編輯兼發行人 齋 藤 佐 次 郎
 印刷人 小 端 安 之 助
 印刷所 東京市田島區葛子三丁目二十五番地
 電話 二二三三 堂
 發行所 金の星社
 東京市本郷區駒込町三五九
 電話 小石川 五三三八七番

母を尋ねて三千里(クオレ)

四六判箱入美本
 内容一九〇頁
 挿畫三色版外數頁
 定價九拾錢
 送料六錢

世界少年少女名著大系 (21) 金の星社編・装幀寺内萬治郎畫伯
 本書は伊太利文豪アミチスの作つた世界的名作であります。「クオレ」の名で、全世界の少年少女から熱烈な愛讀を受けました。
 さて、「クオレ」は何によつて有名かといひますと、「月次講話」といふ幾つかの物語りがあるからであります。で、本書は、その「月次講話」の中で最も有名であり、又最も讀んで見て面白くものばかりを集めました。
 『母を尋ねて三千里』『難破船』『父ちゃんの看病』『少年斥候』『少年筆工』『ローマニヤの血』『少年鼓手』等何れも不朽の名作であります。三千里の道を遙々と母を尋ねて行く少年の哀話もあり、又難破船に乗り込んで自分の身を捨て、少女を救ふ勇敢な少年の話もあり、各篇とも一生忘れられぬ物語りばかりです。
 名著大系の第二十一篇として發行された本書こそ、是非皆さんの一讀せねばならぬ偉い名著であります。

町 坂 動 郷 本 京 東
 社 星 の 金
 番 六 九 五 九 五 替 振 京 東

わたしは歯をみがきます。

ライオンねりはみがきで。

朝も、

夜も、

みがきます。

猫も真似して

みがきます。



坊ちゃん嫌ちゃんのお使ひになる
歯ブラシは、

ライオン歯ブラシが宜しう御座います。